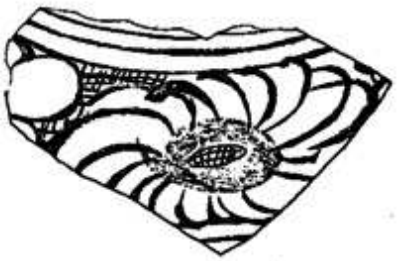
太宰府市の文化財　第26集

太宰府天満宮 Ⅲ

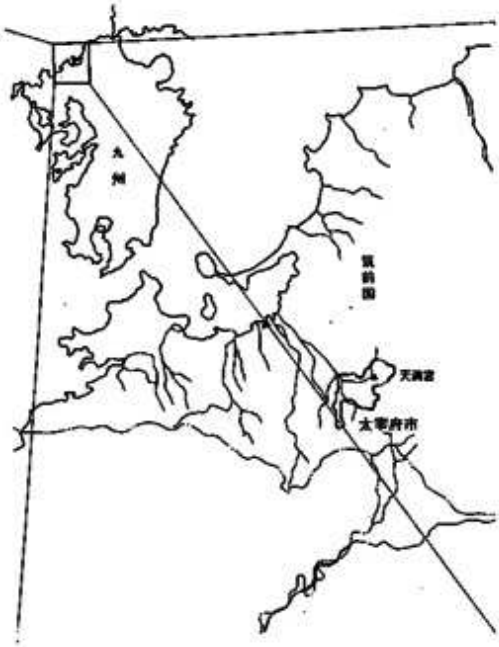


1995

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財　第26集

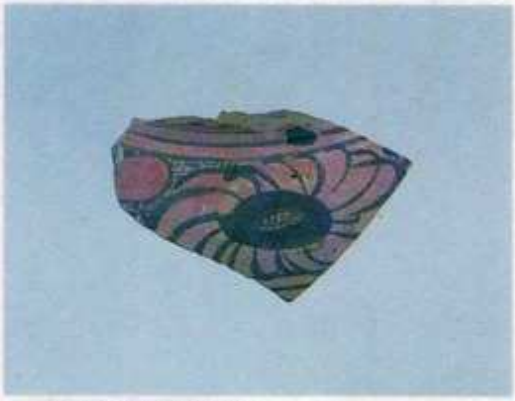
太宰府天満宮 Ⅲ



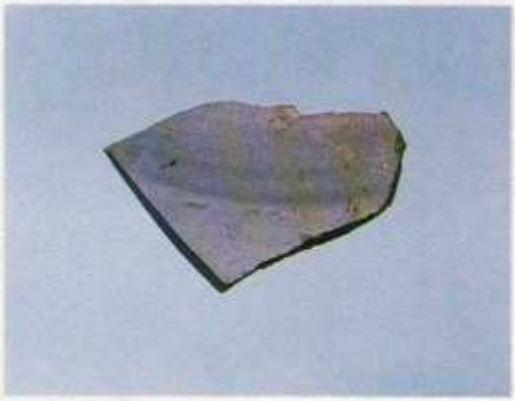
1995

太宰府市教育委員会

太宰府天満宮（安楽寺跡）俯瞰



天満宮４次調査出土
磁州窯系陶器壺片



同左裏面

序

本書は太宰府市が1989（平成元）年と1993（平成五）年に実施した太宰府天満宮（安楽寺跡）での調査をまとめたものです。

太宰府天満宮は学問の神として信仰され、毎年、多くの参詣者を集める寺院として全国にその名を知られております。今回の調査によって創建期の平安時代、様相があまり知られていない中世から近代の境内の様子が窺い知ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを願います。

本書の発刊に当たっては多くの方々のご理解とご協力をいただきました。特に太宰府天満宮の担当事務局、文化研究所の方々、調査に参加された作業員の方々に感謝いたします。

平成７年３月

太宰府市教育委員会

教育長　長　野　治　己

例　　言

1．本書は太宰府市教育委員会が太宰府市宰府4丁目7-1で1989年と1993年におこなった太宰府天満宮（安楽寺跡）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は太宰府市教育委員会により行われ、調査組織は本文中のなかでそれぞれ示している。

3．遺構実測は調査担当者がおこなった。遺物の実測と浄書は、調査担当者と田中克子・森田レイ子・松隈（古賀）里恵子・秋吉由紀子がおこなった。

4．遺構の写真撮影は調査担当者がおこない、空中写真撮影は㈲空中写真企画（代表　壇睦夫）がおこなった。遺物の写真撮影は山村信榮がおこなった。

5．遺構実測図は国土調査法第2座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のない限り座標北（G.N.）を指している。

6．本書に掲載する遺構番号は、以下のように理解される。

7．陶磁器は「大宰府条坊跡Ⅱ」(1983)を基礎とする分類による。

8．執筆は目次に示したとおりである。

9．本書の編集は狭川真一・田中克子・森田レイ子の協力のもと山村信榮がおこなった。

10．出土遺物および図面、写真等の記録類は太宰府市教育委員会が保管し、活用していく。

目　次

1．序説 …… 2（山村信榮）

2．立会調査 …… 4（山村信榮）

3．3次調査 …… 6（狭川真一）
（秋吉由紀子）

4．4次調査 …… 23（山村信榮）

5．磁州窯系陶器について …… 46（田中克子）

6．1次調査出土の平・丸瓦の整理 …… 69（狭川真一）

7．写真図版 …… 89

1．安楽寺天満宮　2．天満宮参道　3．連歌屋遺跡　4．大町遺跡　5．馬場遺跡　6．新町遺跡
7．原山無量寺跡　8．道ノ城跡　9．横岳崇福寺跡　10．岩屋城本丸跡　11．高橋口構口跡
12．五条口構口跡　13．山上町鳥居　14．関屋鳥居

第1図　周辺遺跡分布図（1／25,000）

序　説

1　はじめに

太宰府天満宮（安楽寺天満宮跡）がある場所は、北に玄海灘を望む福岡平野から南に有明海を控えた九州の穀倉地帯の筑後平野とを繋ぐ溝状の地峡帯から北東に抜ける部分にあり、西に大城山、東に宝満山が迫り、博多湾に注ぐ御笠川の源流が横切っている。地盤は天満宮の現在の境内は「真砂土」と呼ばれる花崗岩の風化土が露出し、西側の御笠川に向かって緩やかに傾斜する。傾斜面は先の花崗岩風化土の上面に第三紀に形成されたと思われる砂礫層が乗っている。

安楽寺天満宮跡については過去に三度の発掘調査がおこなわれ、報告書が刊行されている。また、参道改修に係わる調査についても報告した経緯があり詳細については参照されたい。

「太宰府天満宮」1988年太宰府天満宮

「太宰府天満宮Ⅱ」1990年太宰府市教育委員会

「太宰府天満宮参道」1993年太宰府市教育委員会

2　調査体制

調査主体はすべて太宰府市教育委員会である。

平成元年度

総　　括　教育長　藤　壽人　長野治己（平成元年8月～）

庶務担当　教育部長　西山義則　社会教育課長　関岡　勉　文化財係長　鬼木富士夫

主　　事　岡部大治　白水伸司

調査担当　技師　山本信夫　狭川真一　城戸康利　緒方俊輔　山村信榮

（嘱託）中島恒次郎　狭川麻子

平成5年度

総　　括　教育長　長野治己

庶務担当　教育部長　中川シゲ子　文化課長　花田勝彦　埋蔵文化財係長　高田克二

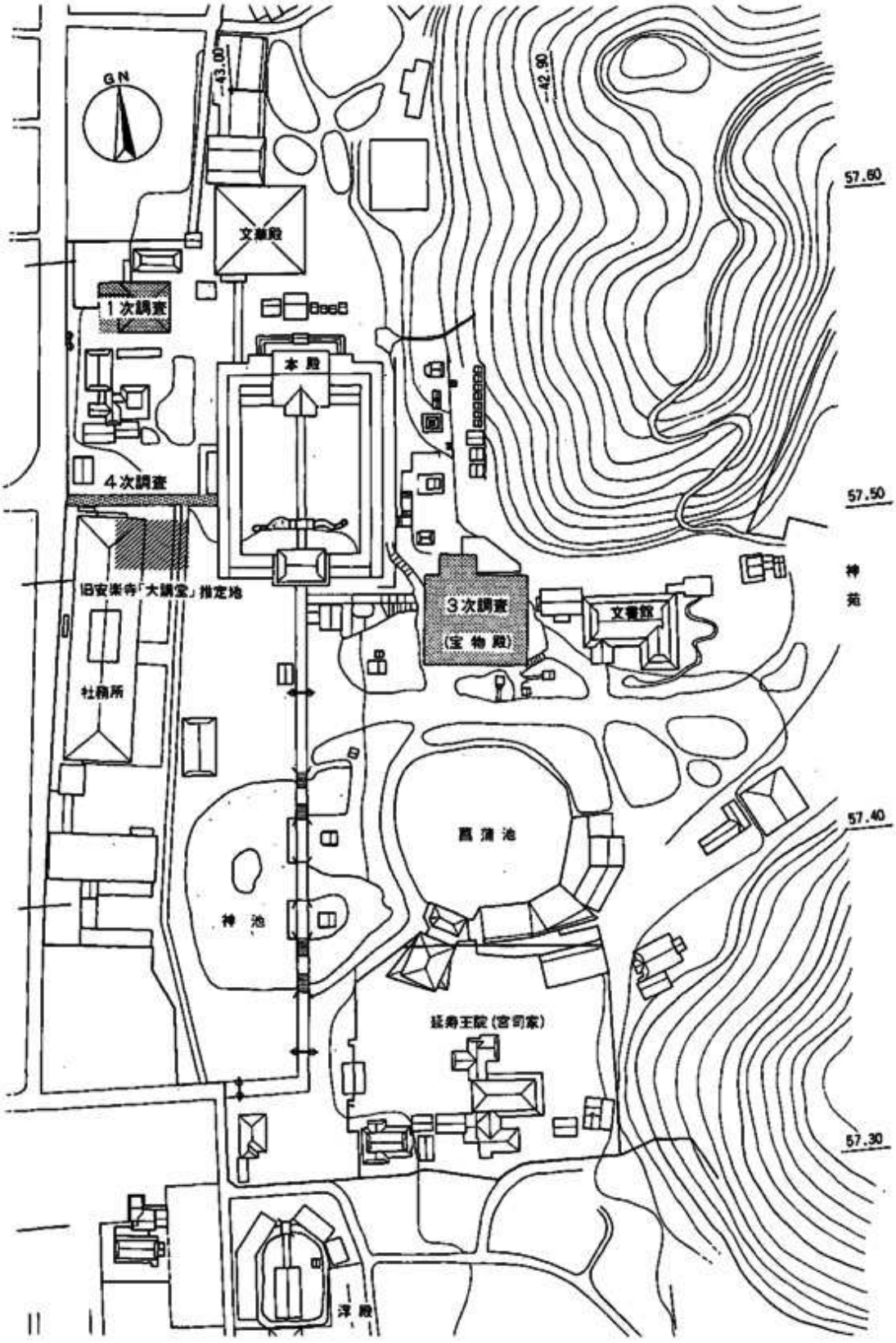
文化振興係長　大田重信　主事　岡部大治　川谷　豊

調査担当　技師　山本信夫　狭川真一　城戸康利　山村信榮　中島恒次郎　塩地潤一

井上信正　重松麻里子（嘱託）田中克子　下川可容子

整理作業参加者

（整理作業員）　安芸朋江　秋吉由紀子　久保喜代香　古賀里恵子　酒井三保子　原野正子　横山美津子　吉田勝子　米川治子　**（整理補助員）**　河田　聡　森田レイ子



第2図　太宰府天満宮(安楽寺跡)境内図

立会調査

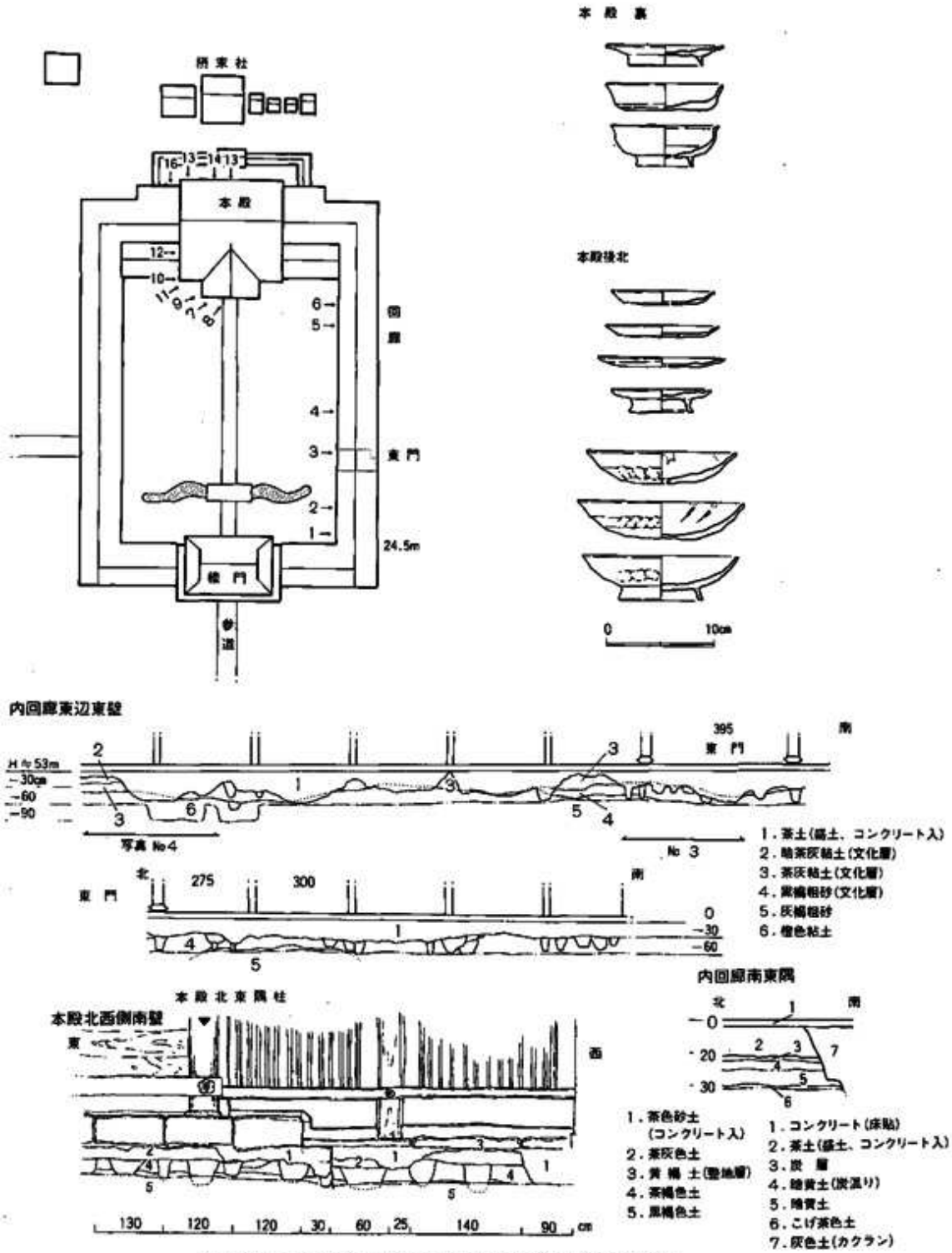
ここに収録された調査は1990年９月から91年11月にかけて太宰府天満宮の境内、特に本殿回廊周りにある既設の石製の雨落ち溝の付け替え工事に伴って太宰府市教育委員会がおこなった立会調査である。調査の記録は城戸康利と山村信榮が作成した。

工事については天満宮側との協議に基づき、頻繁な観光客の安全保持の観点から一つ一つの工区の工事期間が短く設定され、基本的に既設施設の撤去後に新たな掘削をおこなわず新規の石製の溝を構築する工法が取られた。それによって遺構の調査も工体が撤去された段階で観察できる壁面の簡易な記録作成にとどまった。市側の体制の不備もあって立会できずに工事が進行した箇所もあり充分な記録作成ができていない。

遺物包含層やピットななどの遺構が確認された西回廊内陣、本殿南～東辺、本殿北辺である。回廊西側は攪乱された土壙が広がっていた。

遺構が乗る基盤層は変化に富み茶色、黒色の粗砂混じりの土や黄色の粘質土が、回廊東側の丘陵から凡そ西に向かって輪回堆積している状況である。遺物包含層は東回廊中央付近では３層見られ、それぞれの層からピットが堀込まれる。層の厚さは10～15cmほど。ピットの直径は20cmほどのものが多く、柱痕らしいものが見られるものもあった。遺物は近世、近代の瓦片が多く見られたが、確実にピットや遺物包含層に帰属するものは小量の土師器の細片にとどまる。土師器は小皿片が多く、糸切り底のものが見られた。ほとんどが中世に帰属するものと考えられる。過去に、本殿の北側でおこなわれた配管埋設に伴う立会によって採取された遺物には古代末のものが多い。

今回の所見から本殿を含む現在の境内中心地には古代末から中世にかけては軽微な掘立柱建物が幾度も変遷しながら建てられていた可能性が指摘される。ピットの中には建物建設に伴う足場の堀方もあった可能性もある。



第3図　立会調査に伴う出土遺物実測図及び土層略図

第３次調査

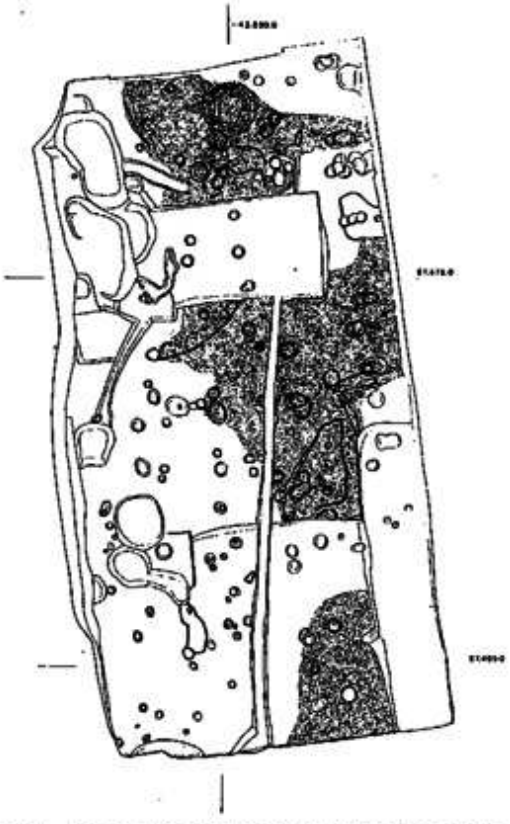
１．はじめに

調査地は、現在の本殿及び回廊のある一角からみて南東の地点で、菖蒲池の北西である。境内の東側にある丘陵が南西へ舌状に派生してきた先端部の裾で、境内の中枢部分からはやや高位置になり、東側に隣接する文書館の建つ部分を含めて狭い空間ながら小さな台地状を呈している。ここは元の宝物殿が建設されていたところで、今回の調査はその建て替えによるものである。試掘調査の結果では、宝物館跡地の西半分及び北側の一部が段落ちになっており、そこに堆積する土も古いものではなく、遺構は存在していなかった。したがって遺構の存在していた東側が発掘調査の対象地となった。試掘調査は平成元年５月16日に実施し、山村信榮が担当した。

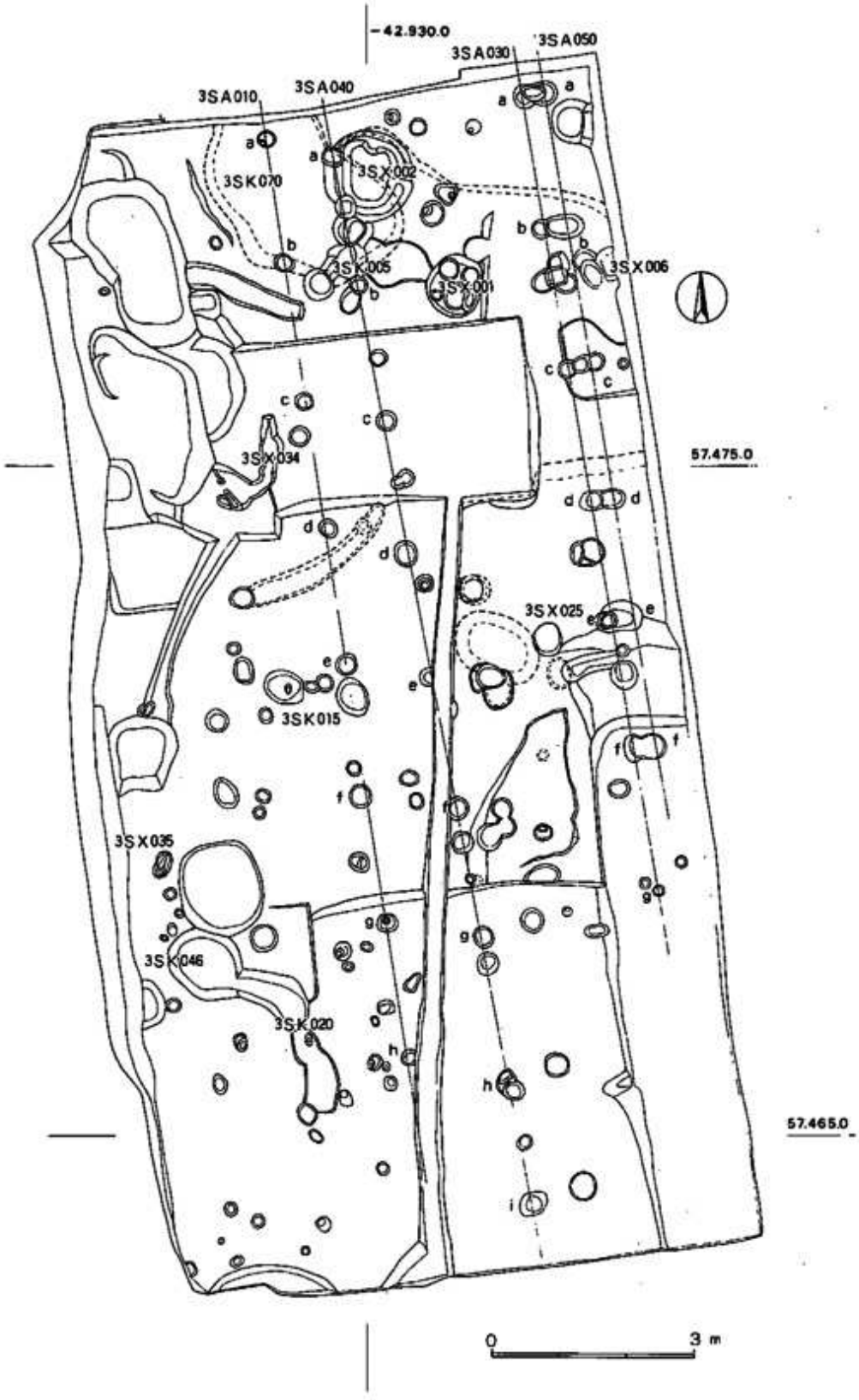
また本調査は、平成元年10月18日から10月31日まで実施し、狭川真一が担当した。開発対象地の面積は500㎡、調査面積は150㎡である。なお、測量基準点の移動では城戸康利、遺構の実測では緒方俊輔の協力を得た。

２．層位など

調査直前まで宝物館が建っていたことから、上面はある程度削平を受けていたものとみられ、表土を除去するとすぐ遺構面が顔を出すという状況であった。調査区の周囲は旧宝物館のコンクリート基礎が巡っており、それらは遺構面よりも深く構築されていたことからこの部分は遺構が消滅していた。表土はこれらの基礎工事の際に盛られたものであるが、精製された土ではなかったことから客土ではなく、この付近の土を掘削して埋め戻したものと思われる。遺構はそのほとんどが地山から穿たれるが、断続的に整地とみられる茶灰色土が残存しており、その上面から掘り込まれている遺構も多い。地山は大半が花崗岩の風化土で形成されており、一部リンネにより粘土化した部分もみられた。



第４図　第3次調査 茶灰色土層検出範囲（網部分）



第5図　第3次調査 遺構配置図（1／100）

3．遺構

調査地内からは柵列4条のほか、土壙、ピットなどが検出された。以下個別に報告する。なお遺構の埋土は上層遺構が暗灰色を呈するものが主体であるが、下層遺構は黄色系のものが主体を成している。

柵列（表1・2）

3SA010　調査区中央やや西寄りで検出した南北方向の柵列で、現状で7間分を検出した。検出分の全長は13.87m、柱間の平均距離は1.98mで、およそN-8°40′-Wの振れを有している。柱掘り方は略円形で、東西長0.26～0.32m、南北長0.24～0.34mである。柱痕は確認できていない。

3SA030　調査区東よりで検出した南北方向の柵列で、現状で6間分を検出したが南端のものは上面が大きく攪乱されており、痕跡にすぎない。検出分の全長は12.01m、柱間の平均距離は2.00m（柱掘り方fまでの平均柱間は、1.97m）で、およそN-9°45′-Wの振れを有している。柱掘り方は略円形で、東西長0.29～0.38m、南北長0.26～0.41m（柱掘り方fを除く）である。柱痕は確認できていない。また3SA050とは切り合い関係にあり3SA030が後出するが、すべての柱掘り方が同じように切り合っていることから、本遺構は3SA050の建て替えと考えることもできる。

3SA040　調査区の中央で検出した南北方向の柵列で、現状で8間分を検出した。検出分の全長は15.88m、柱間の平均距離は1.98mで、およそN-10°40′-Wの振れを有している。柱掘り方は略円形で、東西長0.27～0.40m、南北長0.26～0.40mである。柱痕は確認できていない。

3SA050　調査区の東端で検出した南北方向の柵列で、現状で5間分を検出した（最北端の掘り方は攪乱で底部のみ残存）。検出分の全長は9.88m、柱間の平均距離は1.97mで、およそN-9°45′-Wの振れを有している（いずれも最北端の柱掘り方を含む）。柱掘り方は楕円形で、東西長0.48～0.62m、南北長0.29～0.45mである。柱痕は確認できていない。3SA030に切られている。

これ以外にも実測図で見る範囲で柵列を想定させるピットの並びがいくつか存在するが、ここでは発掘調査終了段階で認知できた4条のみを柵列と認めて報告した。

土壙

3SK005　0.65×0.55m、深さ約0.10mを測り、埋土中に焼土や炭が認められた。柵列3SA040掘り方bに切られているが周辺の他のピット及び茶灰色土層を切っている。

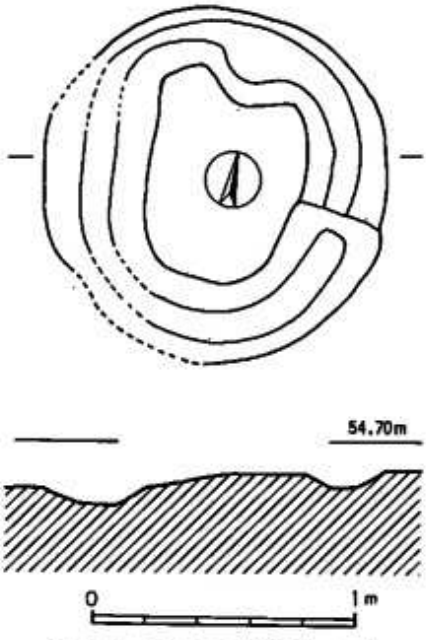
3SK015　0.63×0.55m、深さ約0.20mを測る。底部中ほどに小さなピットがある。埋土中に炭が混入している。

3SK020　1.2×0.6m、深さ約0.35mを測るもので、埋土は大きく上下2層に分割できた。上層は黒色土、下層は暗灰色土で両層ともに炭、灰の混入が認められた。上層からは焼石が出土し

たが安定した状況で検出されたものではない。西端を3SK046に切られている。

3SK046　1.15×1.00m、深さ0.25～0.30mを測る。北側の一部を撹乱で失っている。3SK020を切っている。

3SK070　2.15×3.10m以上、深さ0.03～0.22mを測る。不定形で北側は調査区外に延びている。茶灰色土層下で検出されたもので下層遺構として捉えられる。埋土は赤白色粘質土、黄白色土で構成されるが、これは地山の花崗岩風化土に近似しており、地山が掘削されて埋め戻されたものとみられる。整地前段階での窪み的なものである可能性も考えられる。



第6図　3SX002実測図(1/30)

その他の遺構

3SX001　0.95×0.80m、深さ約0.2mの土壙状を呈するものであるが、底部に数個のピットを検出した。ピットとの直接的な関連は明らかではない。

3SX002　1.37×1.29mで略円形を呈する円形周溝遺構である。溝は全周するが東側に小さな段がある。溝の幅は0.2～0.4mで内側に若干の出入りがある。溝によって区画された内部は0.68×0.58mの不整楕円形状を呈している。性格は明らかではない。茶灰色土層上面から切り込み、3SA040掘り方aを切っている。この付近では最も新しい時期に帰属するが具体的な時期は明らかではない。

3SX006　調査区東端で検出したピットで、0.45×0.30m、深さ0.25mを測る。

3SX025　上面で0.48×0.42m、底部分で0.52×0.37m、深さ約0.25mを測るピットである。壁は北側でオーバーハングしており、埋土はすべて炭であった。壁は焼けていない。上層遺構。

3SX034　直径約0.3m、深さ0.05mのピットである。

3SX035　0.41×0.23m、深さ約0.25mのピットである。底部分に0.1m内外の浅いピットが検出されている。

茶灰色土層(第4図)　調査区の東半で部分的に残存していたものであるが、当初はこの付近前面に認められていたものと思われる。この層の前後で遺構の在り方が異なることから人為的な整地として捉えておきたい。厚さは北側の一部で10cm程度に及ぶ部分もあるが、南側では薄く、2～3cm程度である。この層を除去すると地山に達し、若干の遺構が検出された。出土遺物は少ないが、おおよその年代を知ることが可能である。　(狭川)

4.出土遺物

(1)土器・陶磁器

3SA050出土土器（第7図）

土師器

小皿a(1)　糸切り後、板状圧痕が残る。口径は7.6cm、器高は1.2cm。

坏a(2)　糸切り後、1.5～3.0mm幅の板状圧痕が残る。口径は11.6cm、器高は2.3cm。

両者とも柱掘り方aからの出土である。

3SK005出土土器（第7図, PL5）

土師器

小皿a(3)　ヘラ切り後、板状圧痕が残る。口径は9.6cm、器高は1.6cm。

坏a(4・5)　ヘラ切り後、5は板状圧痕が残る。口径は15.0～16.0cm、器高は2.1～2.6cm。

大坏a(6)　ヘラ切り後、板状圧痕が残る。口径は21.4cm、器高は2.7cm。

3SK015出土土器（第7図）

土師器

小皿a(7～9)　7は糸切りで、口径は7.6cm、器高は1.3cm。8・9はヘラ切りで、口径は9.0～9.1cm、器高は1.5～1.6cm。

坏a(10)　ヘラ切りされる。口縁部を欠損する。

3SK070出土土器（第7図）

土師器

小皿a(11～17)　11～17は糸切りで、15以外に板状圧痕が残る。口径は7.6～9.8cm、器高は0.9～1.2cm。17はヘラ切りで、口径は9.8cm、器高は1.2cm。

坏a(18)　糸切り後、2.0～3.0mm幅の板状圧痕が残る。口縁部を欠損する。

白磁

碗(19)　VまたはⅧ類とみられる。口縁部の小破片である。

3SX001出土土器（第7図）

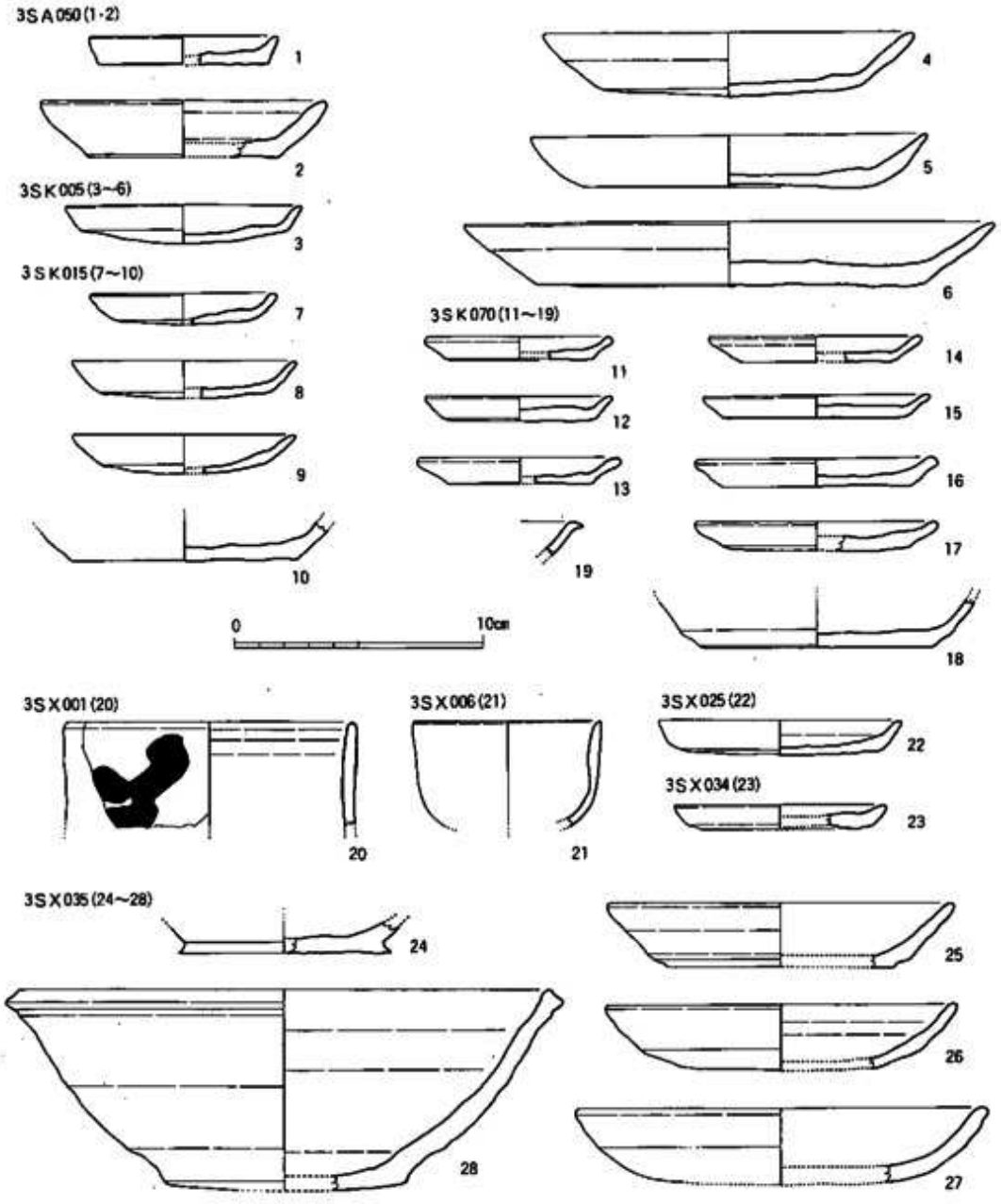
陶器

碗(20)　口径は11.8cm。淡灰茶色でややきめ細かい胎土に、鉄釉による手描きの文様が施される。その上に光沢のある透明釉がやや厚めにかかる。唐津か。

3SX006出土土器（第7図）

白磁

丸碗(小)(21)　口径7.6cmで底部を欠く。体部はわずかに外反しながらほぼ垂直に立ち上がる。白色できめ細かい胎土に、光沢のある透明釉がやや厚めに施される。



第7図　各遺構出土土器実測図（1／3）

3SX025出土土器（第7図）

土師器

小皿a(22)　ヘラ切り後、板状圧痕が残る。口径は9.8cm、器高は1.4cm。

3SX034出土土器（第7図）

土師器

小皿a(23)　糸切り後、約7.0mm幅の板状圧痕が残る。口径は8.6cm、器高は1.0cm。

3SX035出土土器（第7図, PL7）

土師器

坏a(24　25)　糸切りされる。25の口径は14.0cm、器高は2.6cm。

丸底坏a(26・27)　ヘラ切りされる。口径は14.2～16.6cm。磨滅が著しく、内面のミガキの有無は不明。

須恵質土器

鉢(28)　糸切りされる。口径は22.4cm、器高は8.2cm。口縁端部は小さな玉縁状につくり、体部は口縁を肥厚させつつ、わずかに外反する。体部内外面は横ナデされ、内面は使用の為、磨滅して平滑になる。東播系。

表土出土土器（第10図）

土師器

小皿a(1・2)　型ぬきによる梅鉢文を見込みに配する。内面を回転ナデ、外面を回転ヘラケズリ調整される。その後、外面底部に「太宰府天満宮」の文字を刻印する。1と2の刻印は別のものと思われる。

坏a(3)　糸切りされる。口径はゆがみがはげしく正確ではないが9.7cm前後、器高は2.4cm。内面体部上方～口縁端部にかけて煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。

青花

小碗(4)　光沢のある透明釉を全面施釉後、高台畳付部分内外の釉を掻き取る。高台はやや細く、体部はかなり丸みをおびる。外面に型紙刷による文様が施される。

丸碗(5)　口縁部の小片である。内外面に手描きによる文様が施される。釉は光沢のある透明釉で厚くかかる。試掘時の表土から採集した。

皿(6)　体部～口縁にかけての小片である。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁付近で大きく外反する。内外面に手描きによる文様が施される。釉はかすかに青みがかった透明釉で光沢がある。明代のものか。

青磁

碗(7)　胎土はきめ細かく淡灰色で、露胎部分は淡赤茶色を呈す。釉は灰青色がかった光沢のある透明釉でかなり厚めに施され、全面施釉後、高台見込みの釉を掻き取る。内面見込みに段が一条施され、外面には縦線の蓮弁文が施される。Ⅳ類。

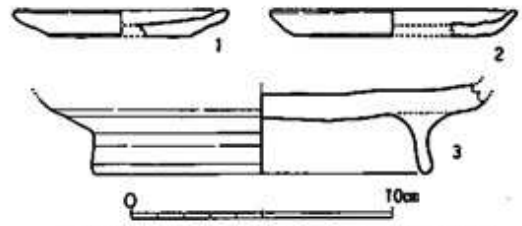
8は梅瓶など壺類の体部とみられ、新安海底遺物の時期に相当すると思われる。胎土は淡灰色できめこまかい。釉は緑青色がかった光沢のある透明釉で、厚くかかる。外面に片切り彫りによる文様が施される。

茶灰色土層出土土器（第8図）

土師器

小Ⅲa（1・2） 2は糸切りされるが、1は不明である。口径は8.2～9.5cm、器高は1.0cm。

大坏c（3） 糸切り後、やや細く高めの高台を付す。高台径13.0cm。



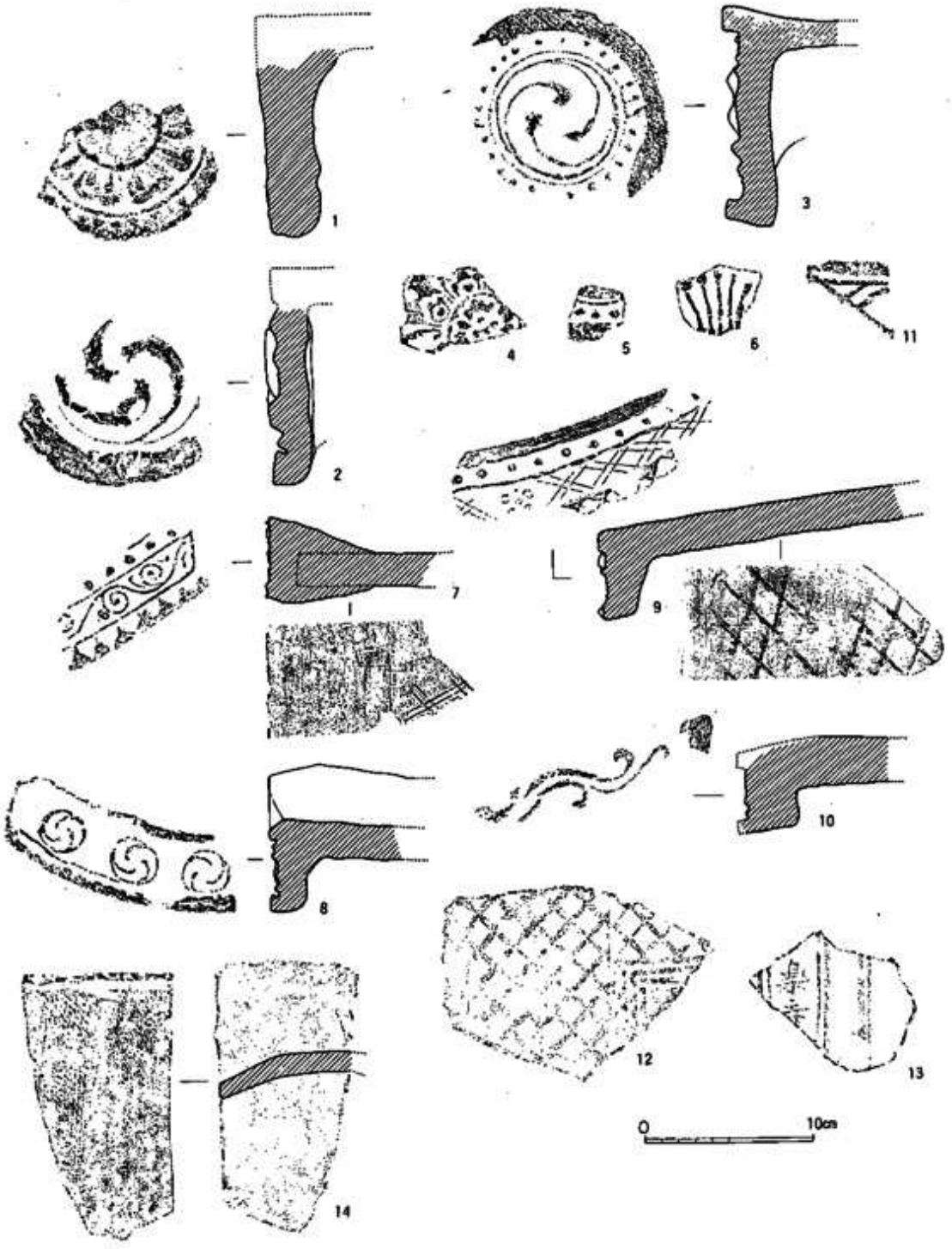
第8図 茶灰色土層出土土器実測図(1/3)

（2） 瓦類（第9図, PL7）

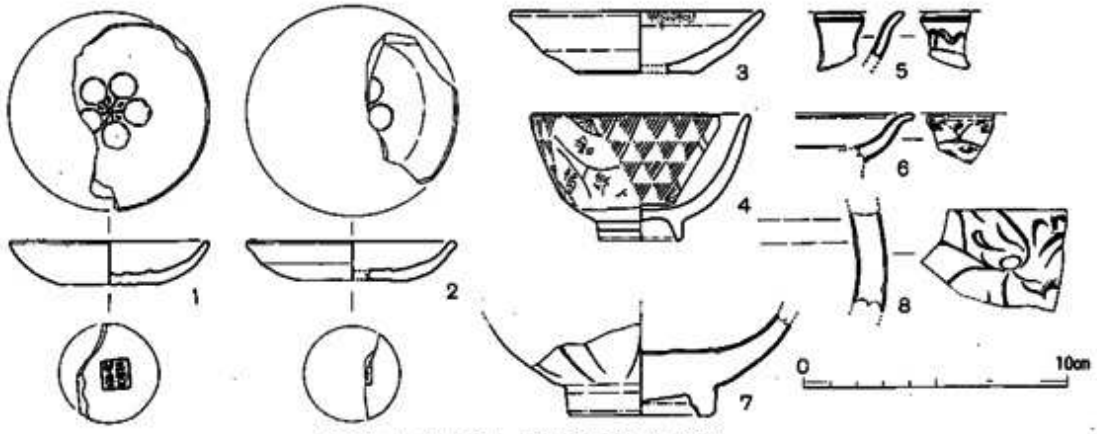
軒丸瓦（1～6） 1は内区に複弁八葉蓮弁文を配し、中房の界線には蓮弁の各弁間に対応して内側に小さな稜を造り出している。全体に磨滅が著しく、中房内の蓮子及び外区の珠文の数は分からない。灰色で胎土のきめはやや粗い。Ⅲ-2類。撹乱（S-16）中出土。2は右巻きの三つ巴文で、巴の尾端が隣り合う巴の中位に取り付く。外縁は直立縁で珠文はない。淡茶灰色で胎土のきめはやや細かい。Ⅶ－2類。撹乱（S-16）中出土。3は外区に26個の珠文、内区に左巻き三つ巴文を配する。巴の尾端は長くのび、各々の尾端が接合して圏線状を呈している。外縁はやや高い直立縁である。灰白色で胎土のきめはやや粗い。Ⅳ－2－a類。試掘時の表土から採集。4は表採品で小片であるが、Ⅰ-1類とみられる。5は小片の為分類不明であるが、巴文の類に属するとみられる。撹乱（S-16）中出土。6は小片ながら草花文を配したⅧ類とみられる。撹乱中出土。

軒平瓦（7～11） 7は内区に右から左に流れる扁行唐草文、上外区に珠文、下外区に上方に頂部をおく突鋸歯文を配する。平瓦との接合方法は定かではないが、補強粘土の量は上下とも厚く、上下面ともヨコ方向の強いナデで仕上げられる。平瓦の凸面には二重斜格子の叩き痕、凹面には目の粗い布目痕を残す。灰白色で硬質。胎土は大粒の白色砂粒を多く含み、きめは粗い。Ⅰ-1類。試掘時の表土から採集。8は中央に左巻きの三つ巴文、その他には右巻きの三つ巴文を配する。巴の尾端は長くのび、界線を形成する。瓦当面は折り曲げ技法で作られ、ややきめ細かい布目痕が残る。暗灰色で胎土はやや大粒の白色砂粒を多く含み、きめ細かい。Ⅳ類。撹乱（S-16）中出土。9は内区を二重斜格子で区切った空間に梅鉢状の珠文を配し、上外区に大きめの珠文帯、下外区に頂部を持つ突鋸歯文を配する。平瓦の凹面にはややきめ細かい布目痕、凸面には大きな斜格子の叩き痕を残す。黒灰色でやや大粒の白色砂粒を含み、きめはややきめ細かい。試掘時の表土中から採集。10は蔓草文を配し、上下外区及び脇区は造らない。平瓦の接合は差し込み式とみられ、凹面に布目痕、凸面に横方向のヘラナデ痕が残る。灰白色で大粒の白色砂粒を多く含み、きめは粗い。試掘時の表土中から採集。11は小片ながら、二重斜格子で区切られた空間に菱形の突起を四つ配したⅪ類とみられる。SK070出土。

文字瓦（12・13） 12は斜格子内の三重の長方形枠内に文字を記すものとみられる。この形状は大宰府出土品の類例から、「観世音寺」の文字を左字で記載したものとみられ、Ⅴ-2類として分類されるものである。撹乱（S-16）中出土。13は小片の為全体の文様は不明であるが、二重



第9図　第3次調査 出土瓦類実測図及び拓影（1／4）



第10図　表土出土土器実測図（1／3）

の長方形枠内に「安楽寺」と記すものとみられる。Ⅳ-2-a類。表採品。

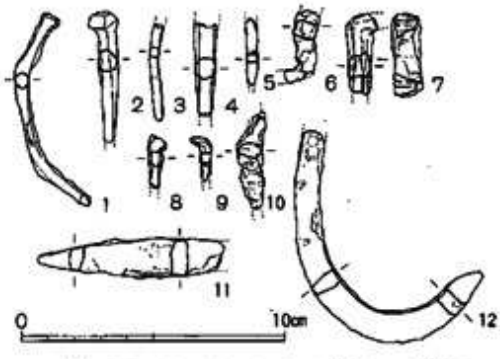
丸瓦(14)　補巻き造りによる平瓦で、片方の端に瓦を切り離した痕が残る。また凸面には目の細かな縄目痕があり、部分的にすり消している。凹面にはやや細かい布目痕が残る。胎土のきめは細かく、灰色を呈し硬質に焼成される。撹乱（S-16）中出土。

(3)鉄製品（第11図）

釘(1～10)　現存の長さ1.7～7.4cm、幅0.4～1.15cm。破片化した資料が多いが、木質が遺存するもの（7・10)、東部を鍵状に折り曲げているもの（1・2・7～9）などがある。なお各資料の出土地点は表5に記載した。

11は現存の長さ7.0cm、幅1.6cmを測り、欠損していて全体の形状は不明であるが、刀子の一部分の可能性がある。茶灰色土層出土。

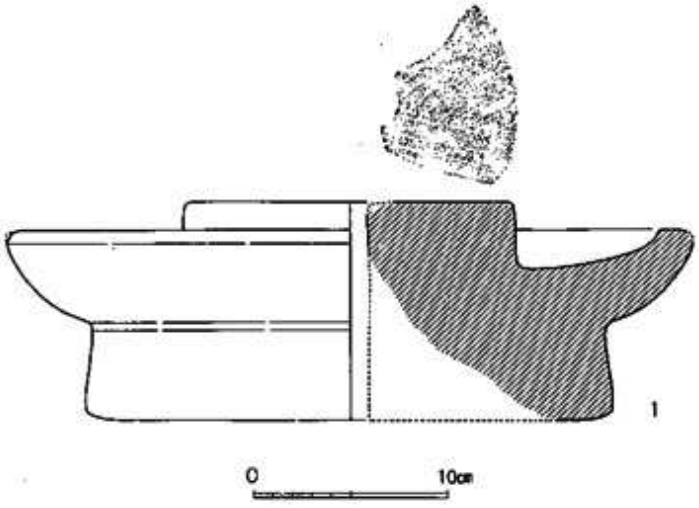
12は吊り金具とみられ、現存の長さ8.1cm、厚さ0.6cmのU字状で、端部をわずかに尖らせている。撹乱（S-44）中出土。



第11図　第3次調査 出土鉄製品実測図

(4)石製品（第12図）

石臼(1)　上下に分かれた石臼の下臼部分で、直径35cm、高さ11.15cmを測る。中心に回転軸を差し込む為の直径約1.8cmの穴がうがたれる。中心より半径8.5cmの摺り合わせ面には溝が刻まれ、その外側は受け皿状を呈している。試掘時の表土中から採集。（秋吉）



第12図　石臼実測図（1／3）

5．小結

ここでは柵列と整地について簡単に触れることでまとめとしたい。

柵列は全部で4条確認したが、3SA040を除いてその振れは近似したものであると言える。しかし振れが異なるとした3SA040も大きく異なるわけではなく、基本的には4条とも同じ方向（敷地に対して南北方向）に造営されたとみて問題なかろう。前後関係は3SA050→3SA030は確実ながら、他は明確にし難い。ただ3SA010と3SA030あるいは3SA050は共存していた可能性も残されている。この場合、柵列に挟まれた空間は通路的な役割をもっていたものと推定される。柵列の建設された年代は、すべて整地とみられる茶灰色土層の上から切り込まれていることで、上限を12世紀中頃に求められる。年代の下限は出土遺物が小量であり明確には論じ得ないが、13世紀の範囲で収まるのではないかと考えている。

いずれにせよこの狭い範囲に柵列が集中しており、境内中枢部分とこの調査地とは若干ながら高低差がみとめられ、これより東側の地域を画する必要があったことが窺われる。現在の文書館が建つ位置に、ある程度の空間が想定できることから、そこに何らかの重要な遺構群が眠っていることが予想される。また、整地以前は柵列遺構がないことから、この付近の土地利用が整地の前後で変化していることが窺われよう。

次に調査地内で断続的に観察された整地と考えられる茶灰色土層についてみてみると、そこから出土した土器から整地の年代は概ね12世紀中頃と判断される。本殿の北西で調査を行った第1次調査でも12世紀前半から中頃の整地が検出されており、この時期に安楽寺境内の随所で整地、拡張事業などの整備が進められていたことを窺わせる。

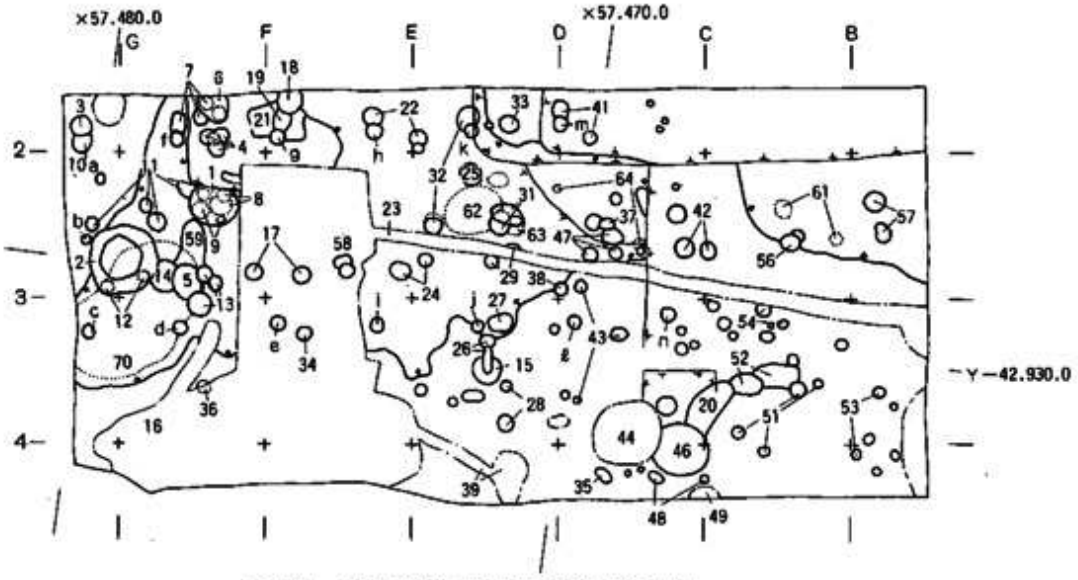
安楽寺は、10世紀前半の創建以来寄進による建物の新築が相次ぎ、これが13世紀前半まで断続的に続いていることを思うと、これに伴う境内地の拡幅、整備の可能性が考えられるところである。第1次調査および本次調査で検出された整地は、これに伴う可能性を否定するものではなかろう。

（狭川）

表1　第3次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種	別		地区
1	3SX001	ピット	唐津	中世～	F2
2	3SX002	円形周溝遺構		時期不詳	F2
3		ピット	埋土は黄茶砂。	新？	G1
4		ピット群	切り合い不詳。（4つで1つとしてあげる）	中世	F1
5	3SK005	土壙	焼土、炭つまる。整地の一部か？？	中世	F2
6	3SX006	ピット	新か	新？	F1
7	(3SA050b)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	F1
8		ピット群	（下層）一概に言えない。むしろ上層の可能性強い。　1→8	中世	F2
9		ピット群	9→1　　8と9は不明だが埋土は同一。	中世	F2
10	3SA010	建物（柵列）	a～nのうちc.d.e.i.j.l.m.S-54がSA010、他はSA030でまとめた。	中世	G2他
11		ピット群		中世	F2
12	(3SA040a)	ピット群	12→2（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	F2
13	(3SA040b)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	F2
14		ピット	14→5　　整地の一部か。（これはピットと判断したほうがよい）		F2
15	3SK015	土壙		12c前～中	D3
16		攪乱			F3
17	(3SA040c)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	EF2
18		ピット		中世	E1
19	(3SA050c)	ピット	21→19→10g（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）		E1
20	3SK020	小土壙	埋土は上下2層に分割。上層黒色土、下層暗灰色土。両層炭混入　一部灰入る。上層石があり焼けている。石は全て浮いている。	13c後～14c？	B3
21		ピット		中世	E1
22	(3SA050d)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	E1
23		溝（攪乱）		新	E2
24	(3SA040d)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	E2
25	3SX025	ピット	一部オーバーハング	12c前～中	D2
26		ピット群		中世	D3
27		ピット		中世	D3
28		ピット群		中世	D3
29	(3SA040e)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	D2
30	3SA030	柵列	S-10a,f,g,h,k,mで成立		
31		ピット群		中世	D2
32	(3SA050e)	ピット群		中世	D2
33		ピット		中世	D1
34	3SX034	ピット		中世	E3
35	3SX035	ピット	東播系鉢　　土器多い	12c中～後	C4
36		ピット		中世	F3
37		ピット	浅いが炭充満。炭多く含むもの　やや古い。	12～13c	C2
38		ピット	鉱滓	中世	C2
39		攪乱	攪乱	新	D4
40	3SA040	柵列	S-12,13,17,24,29,47,42,56,57		
41	(3SA050f)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	C1
42	(3SA040g)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	C2
43		ピット群		中世	C3
44		ピット	攪乱	新	C3
	欠番				
46	3SK046	土壙	20→46→44	中世	C4
47	(3Sa040f)	ピット群	（調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明）	中世	C2
48		ピット群		中世	C4
49		ピット	攪乱か	中世	C4

50	3SA050	柵列	S-7,19,22,32,41		
51		ピット群		中世	B3
52		ピット群	浅い	中世	B3
53		ピット群		中世	A3
54	(3SA010h)	ピット群	(調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明)	中世	B3
欠番					
56	(3SA040h)	ピット		中世	B2
57	(3SA040i)	ピット群	(調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明)	中世	A2
58		ピット群		中世	E2
59		窪み状遺構	整地の一部か？	中世	F2
欠番					
61		ピット群（下層）	茶灰色土除去中検出の為、上層と考えられる。 ただし、埋土は黄茶色土	平安？	B2
62		土壙状（下層）	赤黄色土埋土	平安？	D2
63		ピット（下層）	暗灰色土埋土（上層の掘り残しか？）上では見えていなかったが…	平安？	D2
64		ピット群（下層）	S-62と同じ埋土	平安？	D2
65～69欠番					
70	3SK070	土壙（下層）	赤白色粘質土、黄白色土埋土。	12c中～	F2,3



第13図　第3次調査 略図及び仮番号位置図

表2　柵列柱掘り方法量表

柱穴番号	東西長	南北長	深さ	底部標高
3SA010 a	0.26	0.24	0.20	54.39
3SA010 b	0.28	0.26	0.29	54.27
3SA010 c	0.27	0.26	0.09	54.21
3SA010 d	0.26	0.28	0.13	54.38
3SA010 e	0.31	0.31	0.29	54.20
3SA010 f	0.32	0.34	0.38	54.12
3SA010 g	0.31	0.27	0.22	54.17
3SA010 h	0.20+	0.24	0.06	54.42
3SA030 a	0.30+	0.36	0.21	54.45
3SA030 b	0.29	0.29	0.21	54.42
3SA030 c	0.25	0.26	0.17	54.38
3SA030 d	0.38	0.30	0.48	54.16
3SA030 e	0.32	0.32	0.22	54.44
3SA030 f	0.30	0.41	0.14	54.20
3SA030 g	0.16	0.16	0.05	54.27
3SA040 a	0.31	0.29	0.12	54.42
3SA040 b	0.27	0.26	0.29	54.28
3SA040 c	0.30	0.30	0.09	54.23
3SA040 d	0.34	0.38	0.28	54.29
3SA040 e	0.20+	0.28	0.26	54.29
3SA040 f	0.29+	0.35	0.49	54.04
3SA040 g	0.30	0.32	0.21	54.20
3SA040 h	0.34	0.40	0.36	54.22
3SA040 i	0.40	0.34	0.37	54.12
3SA050 a	(0.37)	(0.22)	0.28	54.36
3SA050 b	0.56	0.36	0.25	54.41
3SA050 c	0.48	0.29	0.13	54.36
3SA050 d	0.34+	0.30	0.44	54.21
3SA050 e	0.62	0.45	0.14	54.54
3SA050 f	0.37+	0.38	0.14	54.19

単位はm

表5　出土鉄器計測表

図番号	種別	長さ	巾	厚さ	出土遺構
1	釘	7.40	0.65	0.50	3SK046
2	釘	5.00	1.10	0.80	3SA050e
3	釘	3.65	0.40	0.35	3SK020
4	釘	3.60	0.85	0.80	3SK046
5	釘	2.50	0.45	0.30	3SA050e
6	釘	2.70	0.95	0.70	3SA050e
7	釘	3.20	1.15	1.00	3SA040a
8	釘	2.10	0.70	0.60	3SK015
9	釘	1.70	0.80	0.40	3SX063
10	釘	3.70	1.00	0.55	3SA030c
11	刀子?	7.00	1.60	0.60	茶灰色土層
12	吊り金具	8.10	7.10	0.60	攪乱（S-44）

単位　cm

表3　掘立柱柵列柱間計測表

柱　間	3SA010	3SA030	3SA040	3SA050
a - b	1.87	2.oo	1.96	(2.oo)
b - c	2.1o	2.12	2.o6	2.o8
c - d	1.9o	2.oo	2.oo	2.o5
d - e	2.o7	1.78	1.88	1.78
e - f	1.95	1.94	1.99	1.97
f - g	1.9o	2.17	1.96	
g - h	2.08		2.13	
h - i			1.9o	
全　長	13.87	12.o1	15.88	9.88
平均柱間	1.98	2.oo	1.98	1.97
		a-f平均1.96		

単位はm

表4　掘立柱柵列座標値

遺構番号	X	Y	方位
3SA010 a	+57,479.86	-42,931.50	N-08° 40′ 04″ -W
3SA010 h	+57,466.15	-42,929.41	
3SA030 a	+57,480.49	-42,927.69	N-09° 43′ 44″ -W
3SA030 g	+57,468.65	-42,925.66	
3SA040 a	+57,479.61	-42,930.50	N-10° 39′ 58″ -W
3SA040 i	+57,464.00	-42,927.56	
(3SA050 a)	+57,480.54	-42,927.36	N-09° 43′ 45″ -W
3SA050 f	+57,470.80	-42,925.69	

表6　第3次調査 出土遺物一覧表

出土遺物一覧表

凡例

○（　）の中の数字は破片数を示す。
○Ⅳ×ⅤはⅣまたはⅤ類の意。
○Ⅳ～Ⅶは Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ類のうちのどれかの意。
○同一個体で別々の遺構から出土している場合はそのまま両方の遺構に点数をカウントしている。
○Ob は黒曜石、And は安山岩、F はフレークの意。
○陶磁器分類は「大宰府条坊跡」Ⅱ1983年太宰府市教育委員会の分類に基づく。

試掘

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)
瓦類	片
その他	桃の種(炭化)

S-5

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)(1)、坏a(ヘラ)(1)、大坏a(1) 皿a(ヘラ)(1)

S-6

土師器	坏a(糸)
白磁	椀　V(1)
肥前系陶磁器	白磁；丸椀(小)1-A(1)
瓦類	片

S-7

土師器	坏a(糸)(1)、小皿a(糸)(1)
瓦類	片

S-8

土師器	片
瓦類	片

S-9

土師器	片

S-10a

土師器	片(糸)

S-10b

土師器	片(糸)

S-10c

土師器	小皿a、片(糸)
瓦類	片

S-10d

土師器	片
瓦類	片

S-10f

土師器	片
瓦類	片

S-10g

土師器	坏a(糸)
金属製品	釘(1)

S-10h

土師器	坏、片

S-10i

土師器	片
金属製品	釘(1)
瓦類	平(縄目)

S-10j

土師器	坏a(糸)
瓦類	片

S-10k

土師器	片
瓦類	平

S-10l

土師器	片(糸)

S-10m

土師器	片

S-11

土師器	片
瓦類	片

S-12

土師器	片(糸)
金属製品	釘(1)
瓦類	片

S-13

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)
瓦類	片

S-14

土師器	椀c、片(糸)
瓦類	片

S-15

土師器	坏a(ヘラ)(2)、小皿a(ヘラ)(1)(2)、小皿a(糸)(1)
金属製品	釘(1)

S-16 攪乱

土師器	小皿a(糸)
瓦類	軒丸(3)、軒平(2)、平(斜格子(1)、縄目(1))

S-17

土師器	片
瓦類	片

S-18

土師器	坏a(糸)
瓦類	丸片

S-19

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)

S-20上層

須恵器	片(1)
土師器	坏a(糸)、鉢?(1)、片(糸)
金属製品	釘(1)、銅銭(1)
瓦類	軒平(1)、片

S-20下層

土師器	片(糸)
瓦類	平(1)、丸片(イブシ)、片

S-21

土師器	坏a(糸)
瓦類	片

S-22

土師器	坏a(糸?)、小皿a
瓦類	片

S-23

土師器	片(糸)
須恵質土器	壺?(1)
瓦類	片

S-24

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)
瓦類	片

S-25

土師器	坏a(糸?)、丸坏a、小皿a[1]
金属製品	鉱滓(8)
瓦類	片
その他	焼土塊

S-26

土師器	片(糸)
国産陶器	無釉；片(1)

S-27

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)
瓦類	片

S-28

土師器	片(糸)
瓦類	片

S-29

土師器	坏a(糸)、片
瓦類	片

S-31

土師器	片
瓦類	片

S-32

土師器	小皿a(糸)、片
金属製品	釘(3)
瓦類	片

S-33

土師器	小皿a(糸)、片
瓦類	片

S-34

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)(1)
瓦類	片

S-35

土師器	坏a[糸(2)、ヘラ]、小皿a(糸、ヘラ)、丸坏a(ヘラ)(2)
須恵質土器	鉢(東播)(1)
瓦類	片

S-36

土師器	鍋、片

S-37

土師器	丸坏a ?(ヘラ)
白磁	椀 IV(1)

S-38

土師器	鍋、片
金属製品	鉱滓(8)
石製品	片(1)

S-39 攪乱

土師器	坏a(糸)
瓦類	片

S-41

土師器	小皿a(糸、ヘラ)

S-42

土師器	片
瓦類	片

S-43

土師器	片
白磁	椀 IV(1)
瓦類	片

S-44

白磁	その他 片
金属製品	吊り金具
瓦類	片

S-46

土　師　器	坏a(糸)、小皿a(糸)
青　磁	不明；片(1)
白　磁	その他　片
国産陶器	鉄釉；片(1)
肥前系陶磁器	染付；片(1) その他；片(1)
金属製品	釘(3)
瓦　類	丸、平(イブシ)

S-47

土　師　器	坏a(糸)
瓦　類	片

S-48

土　師　器	片
瓦　類	片

S-49 撹乱？

土　師　器	小皿a(糸)
国産陶器	常滑；甕(1) S-56と接合
瓦　類	片

S-51

土　師　器	片(糸)
金属製品	鉱滓(8)
瓦　類	片

S-52

土　師　器	片(糸)
瓦　類	片

S-53

土　師　器	小皿a(糸)、片(糸)
瓦　類	片

S-54

土　師　器	坏a(糸)、片

S-56

土　師　器	坏、小皿a
国産陶器	常滑；甕(1) S-49と接合
その他	木炭

S-57

土　師　器	片
瓦　類	片

S-58

土　師　器	片
瓦　類	片

S-59

土　師　器	片(糸)

S-61

土　師　器	片(糸)

S-62

土　師　器	片

S-63

土　師　器	片
金属製品	鉱滓(8)

S-64

土　師　器	片

S-70

土　師　器	坏a(糸)(1)、丸坏a(ヘラ)、小皿a(糸)(1)(6)
白　磁	椀　V×VIII(1)
中国陶器	褐釉；壺類A'c(1)
瓦　類	軒平(1)

第４次調査

１）はじめに

調査地は太宰府市宰府４丁目７－１の太宰府天満宮回廊の西側に所在し、天満宮回廊の西に延びる東西の石敷き道路の石の葺き替えにともなって発掘調査をおこなった。調査期間は1990年９月17～10月５日で調査は城戸康利、重松麻理子、山村信榮が担当した。調査面積は84㎡である。遺物整理作業は田中克子、森田レイ子と山村が担当した。

調査は太宰府天満宮側との協議により路盤形成のための工事面で検出される遺構について掘削調査し、規模が大きく深いものについては範囲確認をおこない将来の調査に委ねることになった。

２）土層と遺構

調査区は標高868ｍの宝満山の裾部にあり、風化花崗岩に由来する堆積輪回によって形成された砂、砂レキ層、粘土などの土壌からなる。調査区内では花崗岩風化土の岩盤は見られない。遺構は既設の石畳とその堀方埋土を除去した段階の地表下約20～30cmで遺構が直に検出された。従ってここでは遺構の上位では文化層と呼べる遺物包含層は既に削平された状態であった。遺構の地山は灰白色の粗い砂（無遺物）層が広く見られ、西側に暗茶色の遺物包含層があった。

３）遺構

土坑状遺構

４SK006（第13図, PL８－３，９－１）

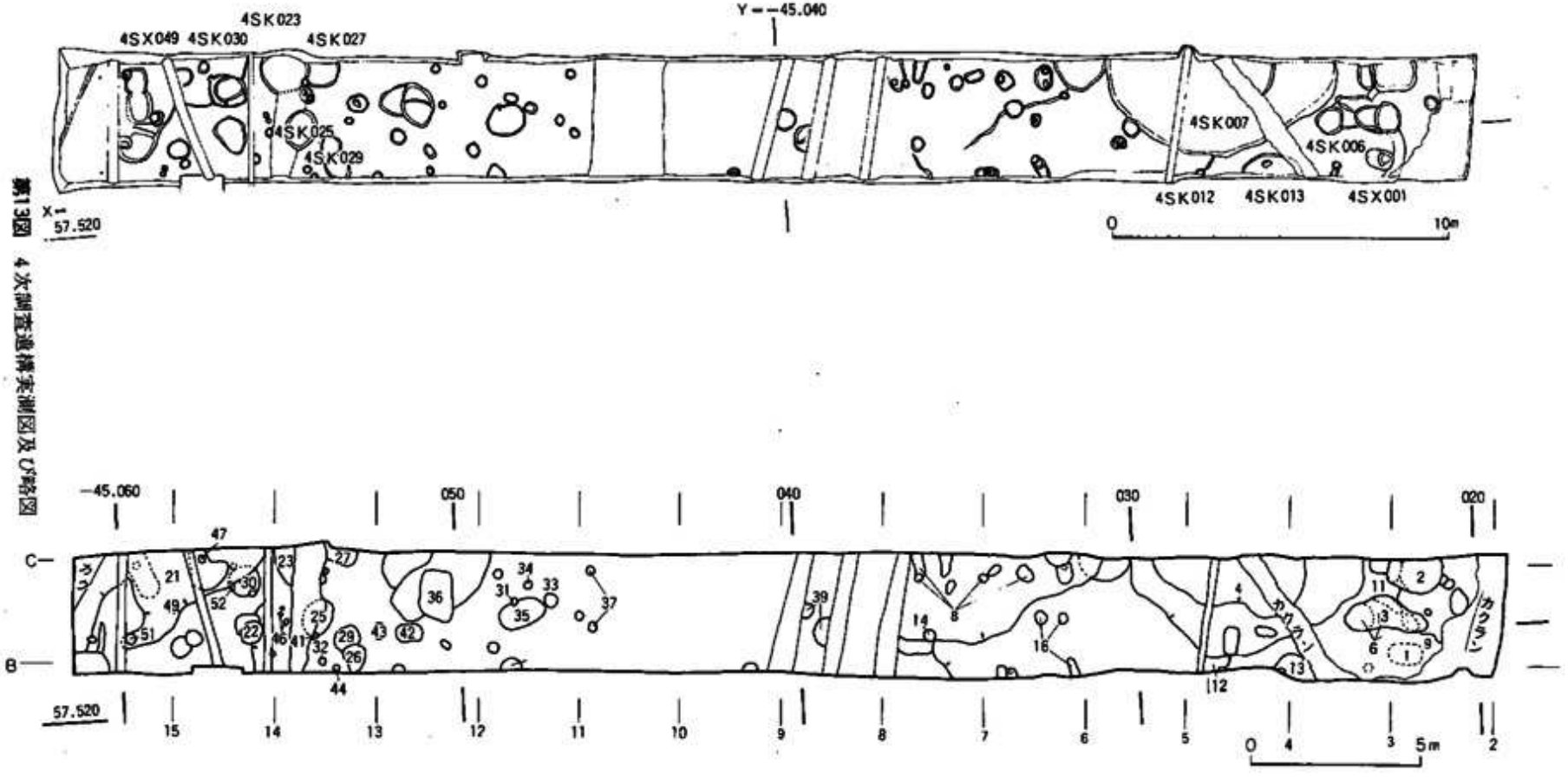
検出時には長さ2.5ｍ×1.0ｍ上面が同じ黄色土で覆われていたもので、掘り下げた結果三つほどの溜り状の遺構に分れた。

４SK007（第13図, PL８－３，９－１）

直径７ｍほどの大きな土坑で、調査の制約上完全に全容は把握できず南北にトレンチを入れただけに留まった。遺構は青灰色砂ー灰色砂の順で堆積しており、調査では灰色砂をＳ－４として掘っている。近世、近代の陶磁器片以外に焼けた材木片や瓦片、釘などが目立って出土した。深さは１ｍでかなりの容積を持つ廃棄物を処理した土坑と考えられる。

４SK012（第13図, PL８－３，９－１）

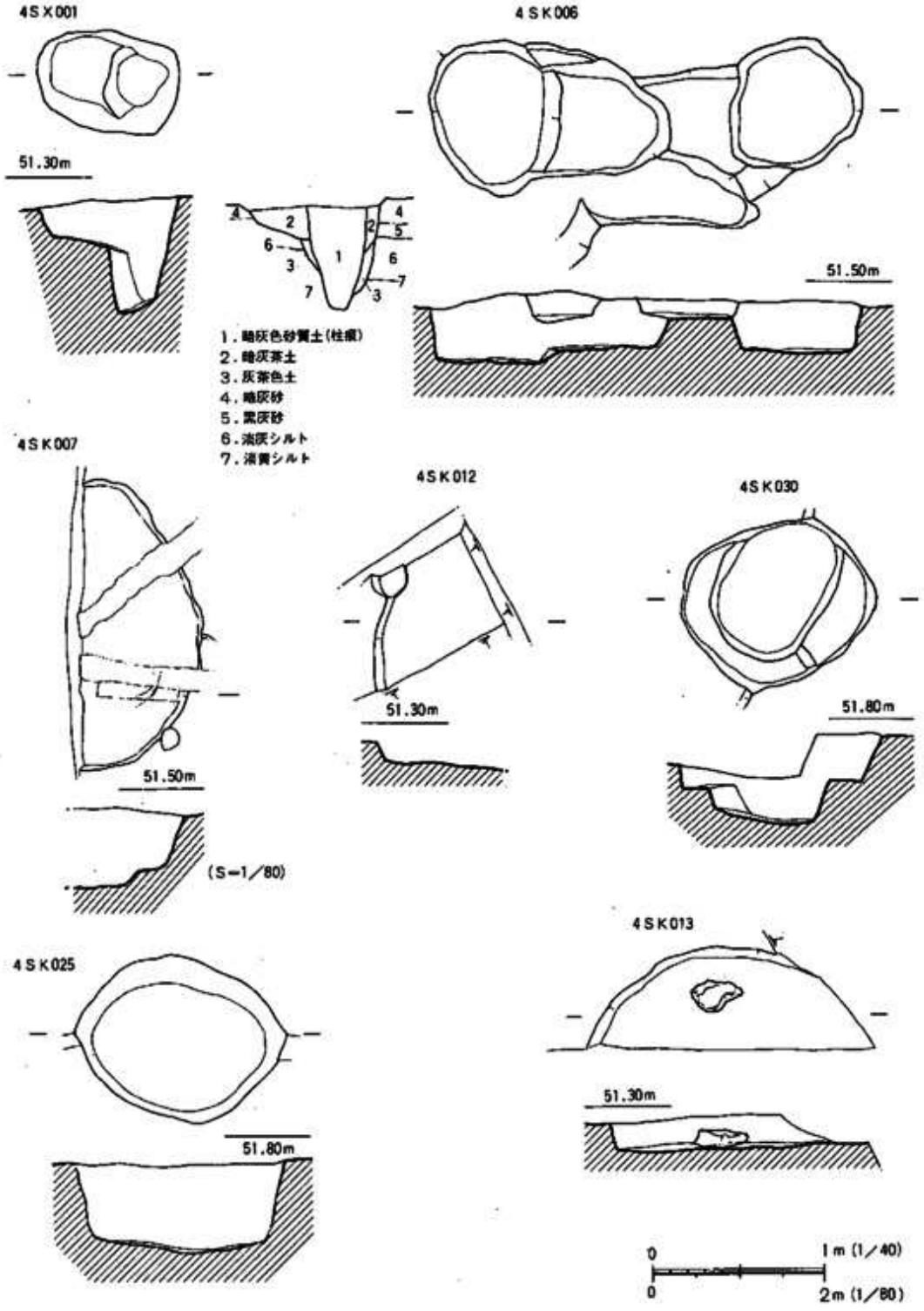
検出面からの深さ15cmほどのもので、４SK007やカクランに切られほとんどもとのプランを保っていない。黄茶色土で埋没する。条痕を持つ縄文の深鉢が出土しており、今回検出された遺構の中では最も古いものである。



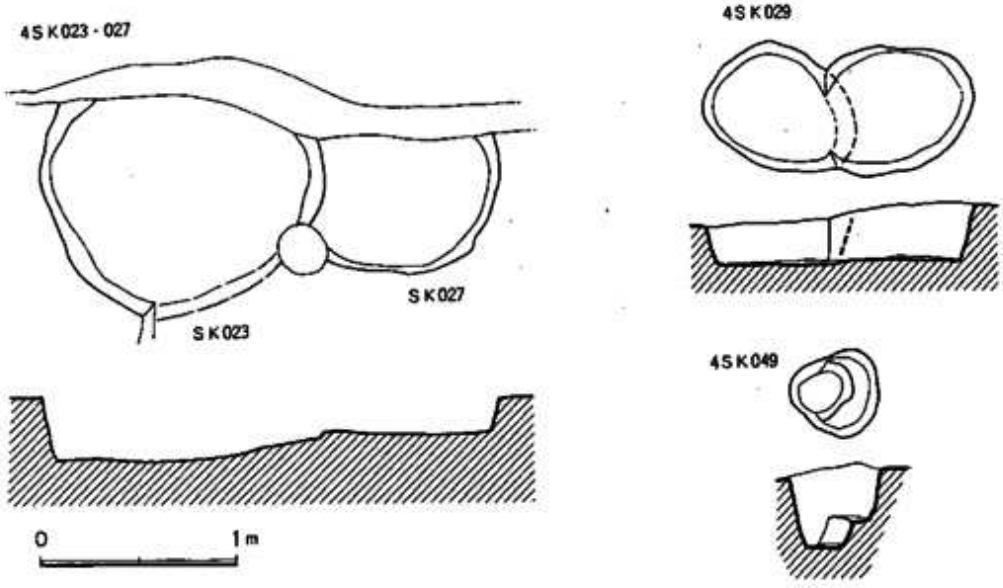
第13図　4次調査遺構実測図及び略図

表7　遺構番号台帳

S-番号	種別	地区	時期	備考
1	pit	B2	平安後期～	→S-9
2	土壙	B2	近世後期～	淡茶色砂→茶色土
3	たまり状	B2	近世後期～	
4	たまり状	B4	近代～	S-7→S-4
6	pit群	B3	近世後期～	
7	たまり状	B4	近代～	
8	pit群	B7	近世後期～	
9	たまり状	B3	平安後期～	
11	pit群	B3	近世後期～	
12	土壙	B4	縄文～	
13	土壙	B4	平安後期～	近世の瓦は壁面から混入か
14	pit	B7	近世後期～	
16	pit群	B6		
21	たまり状	B15	近世後期～	灰色土。瓦多量。
22	pit	B14	近世後期～	茶色土＋黄色土。瓦多量。
23	pit	B14	近世後期～	茶色土＋黄色土。
25	pit	B13	14c前半～	黒色土＋黄茶色土。
26	pit	B13	近世後期～	明褐色土。
27	pit	B13	近世後期～	瓦多量。
28	pit	B14	平安後期～	
29	pit	B13	中世～	黒色土＋赤色真砂ブロック。
30	土壙	B14	近世後期～	明灰土→灰茶色土→暗茶色土。S-30→S-21
31	pit	B11	近世後期～	黒褐色土。
32	pit	B13	近世後期～	黒色土。
33	pit	B11	近世後期～	黄茶色土。
34	pit	B11	古代～	黄茶色土。
35	土壙	B11	近世後期～	暗黄色土。瓦多い。
36	土壙	B12	近世後期～	黒茶色土。
37	pit群	B10	近世後期～	暗茶色土。
38	pit群	B11	近世後期～	黒茶色土。
39	pit	B8	近世後期～	
41	pit	B13	中世	S-41→S-25
42	pit	B12	近世後期～	
43	pit	B12	平安後期～	中央に石あり。
44	pit	B13	古代～	
47	pit	B14	近世後期～	
48	土壙	B14	近世後期～	
49	pit	B15	平安～	
51	pit	B15	近世後期～	
52	pit	B14	近世後期～	



第14図　天満宮4次遺構実測図1（1／40・1／80）



第15図　天満宮4次 遺構実測図2（1／40）

4SK013（第13図, PL 8－3, 9－1）

深さ15cmほどのもので、茶色系の土で埋没する。近世の瓦が出ている。

4SK023（第13図, PL 9－2・3, 10－2）

茶色土と黄色土の塊で埋没する。近世の瓦が出ている。

4SK025（第13図, PL 9－2・3, 10－2）

埋土は黒色土（砂質）－黄茶色土の順で堆積する。14世紀前半の遺物が上下層から安定して出土している。

4SK027（第13図, PL 9－2・3, 10－2）

埋土は明褐色土。多量の近世後半以降の瓦が処分されている廃棄土坑である。

4SK029（第13図, PL 9－2・3, 10－2）

黒色土と赤色真砂（花崗岩風化土）の混土が埋土。鉄さいが出土している。

4SK030（第13図, PL 9－2・3, 10－2）

明灰色土－灰茶色土－暗茶色土の順で埋没する。S-21に切られる。

その他の遺構

4SX001（第13図, PL 8－3, 9－1）

直径25cmほどの柱痕を持つピット。平安時代に属し、堀方が段状に掘削された建物の柱痕跡であり古代の安楽寺天満宮の伽藍が不明な現段階にあって貴重な存在である。

4SX049（第13図, PL 9－2・3, 10－2）

黒色系の土で埋没し、土師器の完形の椀が一点出土した。祭祀的な性格も考えられる。

遺物（第図42～48）

土壙出土の遺物

4SK012

縄文土器（第16図－1，PL11－1）

1はわずかに条痕をとどめる深鉢形の縄文土器である。胎土は大きめの砂粒を含み暗茶褐色を呈す。

4SK013

土師器（第16図－2・3，PL11－1）

2、3は丸坏。2の内面にはコテ当ての痕跡が残る。

瓦（第16図－4・5，PL11－1）

4、5は格子目のタタキを施す瓦片で、4は二重の斜格子のタタキを持つ丸瓦、5は平瓦。

4SK025黒色土層（第16図－6～17,PL11－2）

土師器

坏a（6～13）　底部は糸切りで、ナデbによって成型される。

青磁

椀（16・17）　16は竜泉窯系のもので塊型のもの。17は高麗の象嵌青磁で、白と黒の象嵌模様が施される。

4SK025黄茶色土層（第16図，18～22,PL12）

土師器

坏a（18～21）　底部は糸切りで、ナデbによって成型される。

擂り鉢（22）　内面に6本を単位とする擂り目を持つ。擂り目の下地には細かい目を持つハケ状工具による横方向のナデがある。外面は粗いナデ、底部はケズリが見られる。

坏の法量は全体に大きめでXVII期（13世紀中葉から後半）頃の所産と考えられるが、小皿の法量はやや小さく若干時期が下る可能性を示す。擂り鉢の例としては当該地域では最も早い時期に属すものとなる。

4SK030灰茶色土層（第16図，23・24）

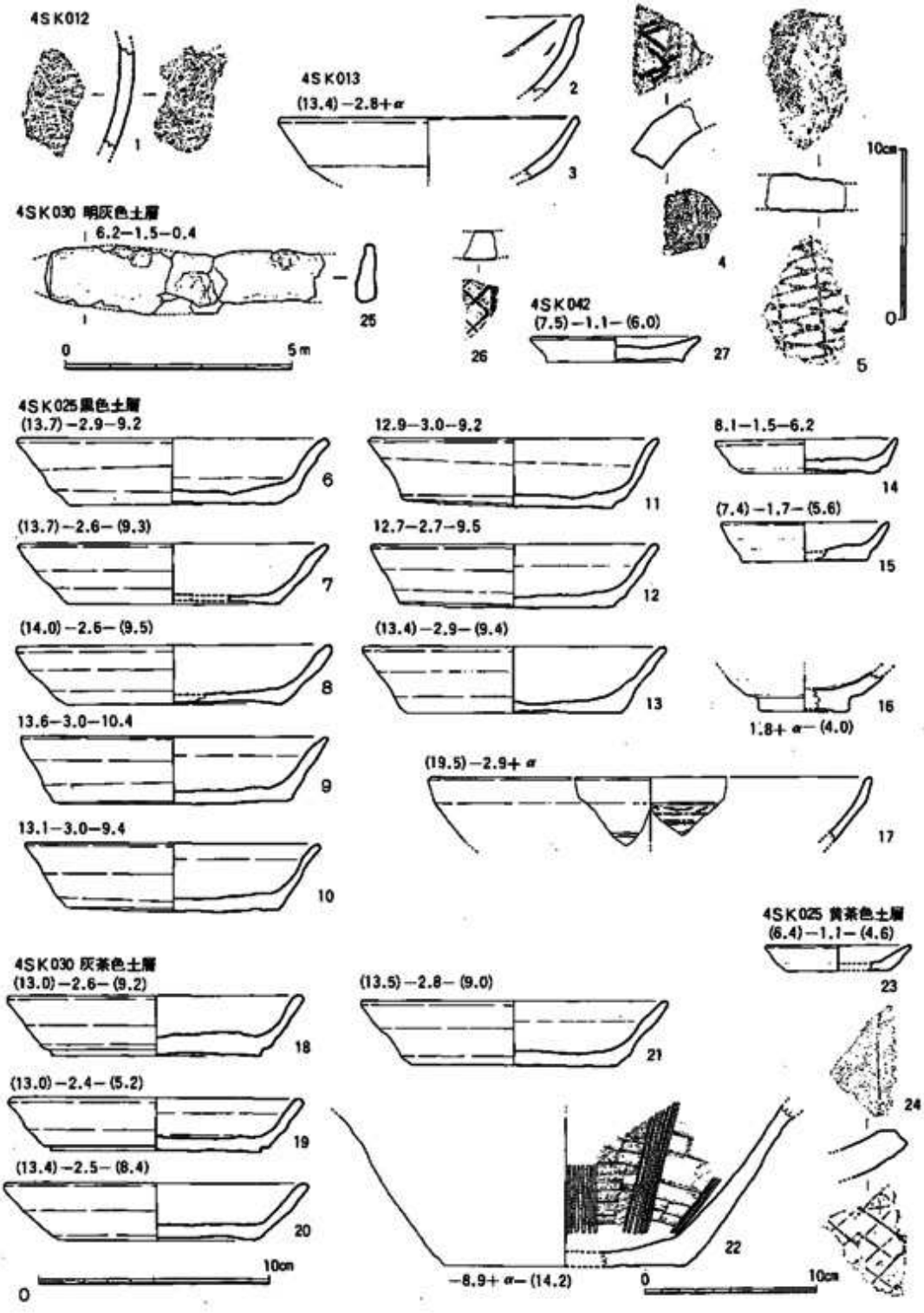
土師器

小皿a（23）　糸切りで黄褐色を呈す。

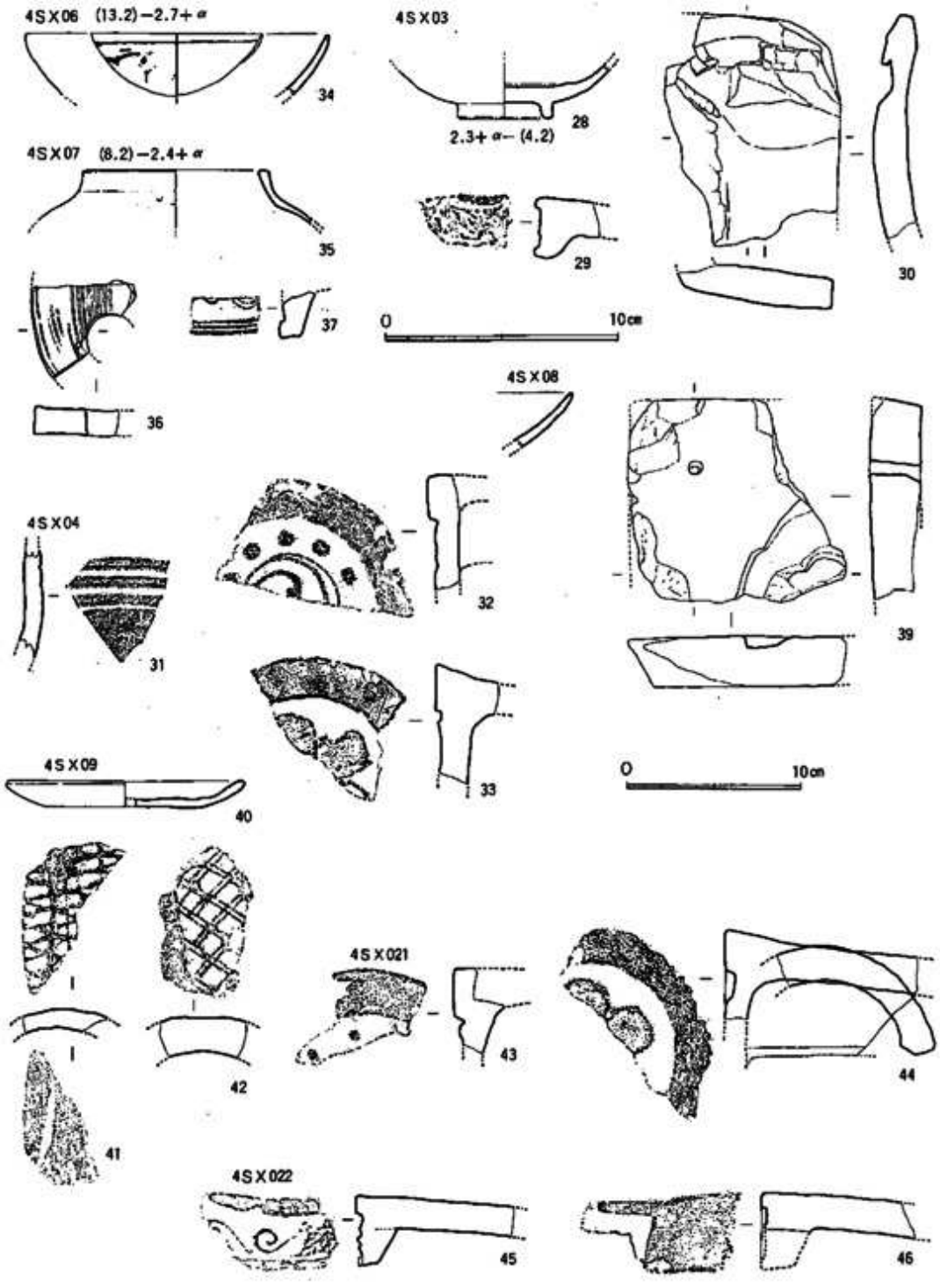
瓦

平瓦（24）　正格子のタタキを持つ。

4SK030明灰色土層（第16図，18～22）



第16図　第4次調査 遺構出土遺物実測図 1 (1〜27)



第17図　第4次調査 遺構出土遺物実測図2 (28〜46)

瓦

平瓦(25)　正格子のタタキを持つ。

金属器

板状鉄製品(26)　幅1.5cm、厚さ0.4cmの板状の鉄片。建築部材か。

4SK030は土器から17期（13世紀）以降の時期のものと思われる。

4SK042（第16図,27）

土師器小皿a(27)　糸切りで黄褐色を呈す。体部はつまみ出した様な成型。

4SK042は土器から17期（13世紀）以降の時期のものと思われる。

性格不明遺構出土の遺物

4SX003（第17図, PL13,28～30）

陶器

椀(28)　磁質の焼きで胎土は灰白色、釉調は淡灰色。4.2cmほどの輪高台を持つ。

瓦

軒平瓦(29)　3.5cmのやや幅が狭い瓦頭面を持つ。イブシにより黒色化する。

鬼瓦(30)　背面の四隅のいずれかの部分。厚さ1.2cmでイブシにより黒色化する。

陶器の時期から江戸時代の後半期に属すと思われるが、平瓦は古い様相を呈す。

4SX004（第17図, PL13,31～33）

陶器

甕(31)　須恵質の陶器で体部に横沈線が入る。

瓦

軒丸瓦(32･33)　32は圏線を持つ巴文の外に珠文がめぐる。33は中心に梅鉢文を持つ。共に周縁が幅広い。32は江戸中期以降の、33は近世末以降の時期と思われる。

4SX006（第17図, PL13,34）

染付磁器

椀(34)　丸椀のタイプに属し、内外面の口縁直下に圏線を施す。

4SX007（第17図, PL13,35～37）

陶器

土瓶(35)　乳灰色の精製された胎土を持ち、褐色で肩部に圏線をかき透明釉を施す。信楽焼き系（筑前野間皿山産か）

ヒチリン(36)　赤褐色の素焼きの板状のものに穿孔が施される。ヒチリンの桟か。

瓦

軒平瓦(37)　顎幅が狭い軒平瓦。イブシは全体にかかっていたものと思われる。

陶器の時期からこれらの遺物は明治前半期に位置づけられる。土器の他この4SX007からは多くの板状、棒状の炭化材が出土した。

4SX008（第17図, PL13-2,38・39）

磁器

椀（38）　白磁で胎土にわずかに黒色斑がみられる。

瓦

鬼瓦（39）　方形をなし、中心に家紋が入るものと考えられる。

4SX009（第17図, PL13-2,40～42）

土師器

皿a（40）　ヘラ切り底で、淡橙色を呈す。口径は10.4cmに復原される。

瓦

丸瓦（41・42）　41はきつい斜格子に縦線を入れた、42は二重の正格子のタタキを持つもの。

4SX021（第17図,43・44）

瓦

軒丸瓦（43・44）　周縁が幅広のタイプで、意匠は43は巴、44は梅鉢文と思われる。

4SX022（第17図,45・46）

瓦

軒平瓦（45・46）　顎幅が小さいタイプ。イブシは均等に回っている。

4SX023（第18図, PL14-1）

土師器

小皿a（47）　ヘラ切り底で黄褐色を呈す。口径は10cmに復原される。

椀（48）　口径が11.4cmと小さく、ナデbで仕上げられる。

瓦

平瓦（49）　厚手で縄目のタタキを持つ。

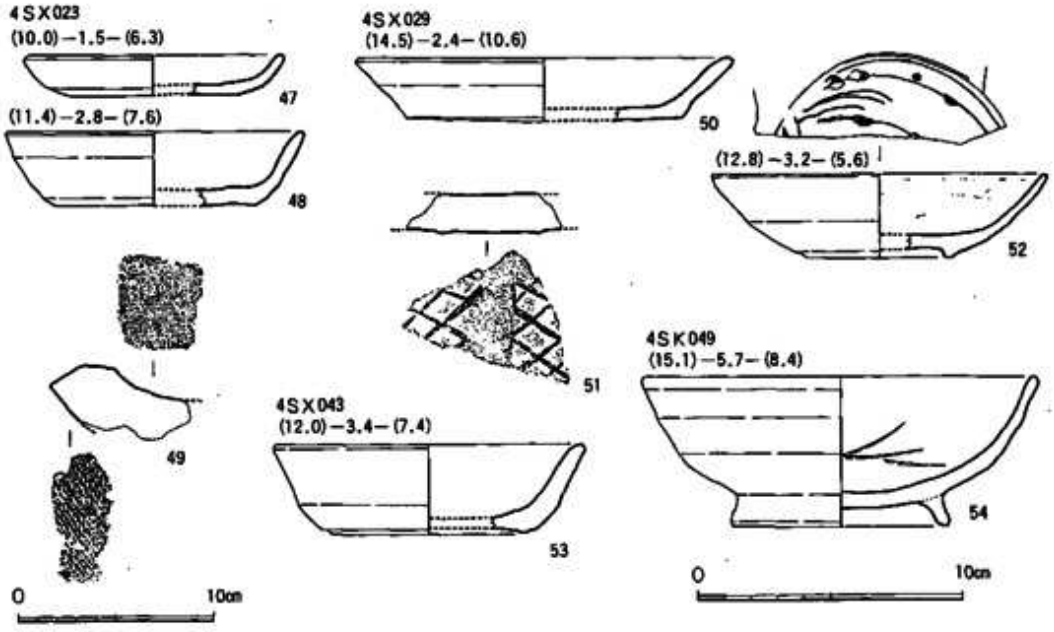
4SX029(第18図,50-51)

土師器

坏a(50)　底部は糸切りされ口径が14.5cmと大型のもので、ナデbによって成型される。XVI期頃の所産か。

瓦

平瓦(51)　斜格子のタタキを持つ。



第18図　第4次調査 遺構出土遺物実測図3 (47～54)

SX039（第18図, PL14）

染付磁器

皿(52)　ゴケ底風の高台を持ち、内面に草様の文様を入れる。

SX043（第18図, PL14）

坏a(53)　底部は糸切りされ口径が12cmと大型のもので、ナデbによって成型される。

SX049（第18図, PL15-1）

土師器

椀c(54)　内面にコテ当ての痕跡が見られる。口縁は多少外反する。X期前後の時期か。

各遺構出土の瓦（第19図53～73）

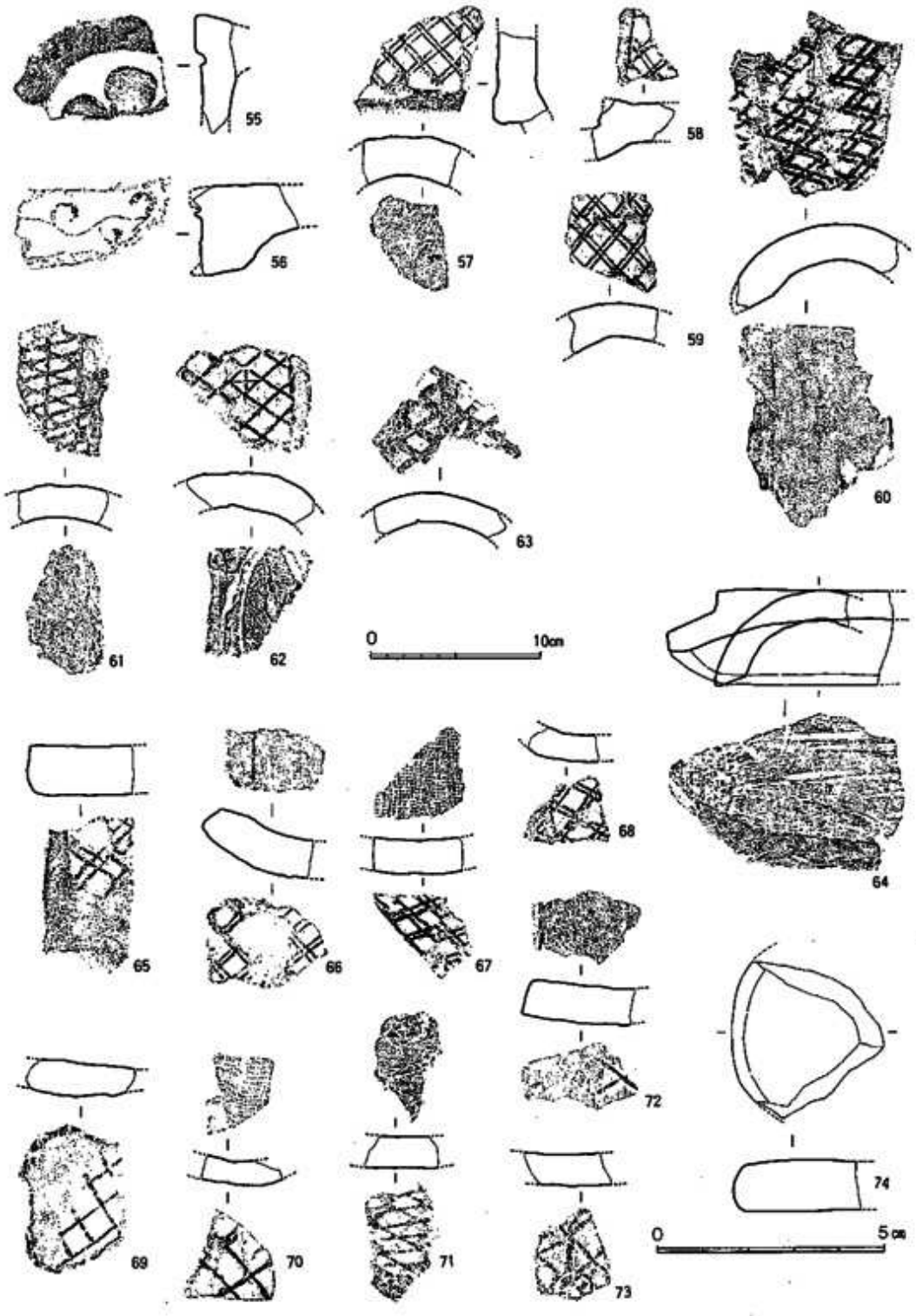
軒丸瓦(55)　梅鉢文を持つもの。No33・44・110・111と同じものか。

軒平瓦(56)　はっきりした唐草文を持つ。

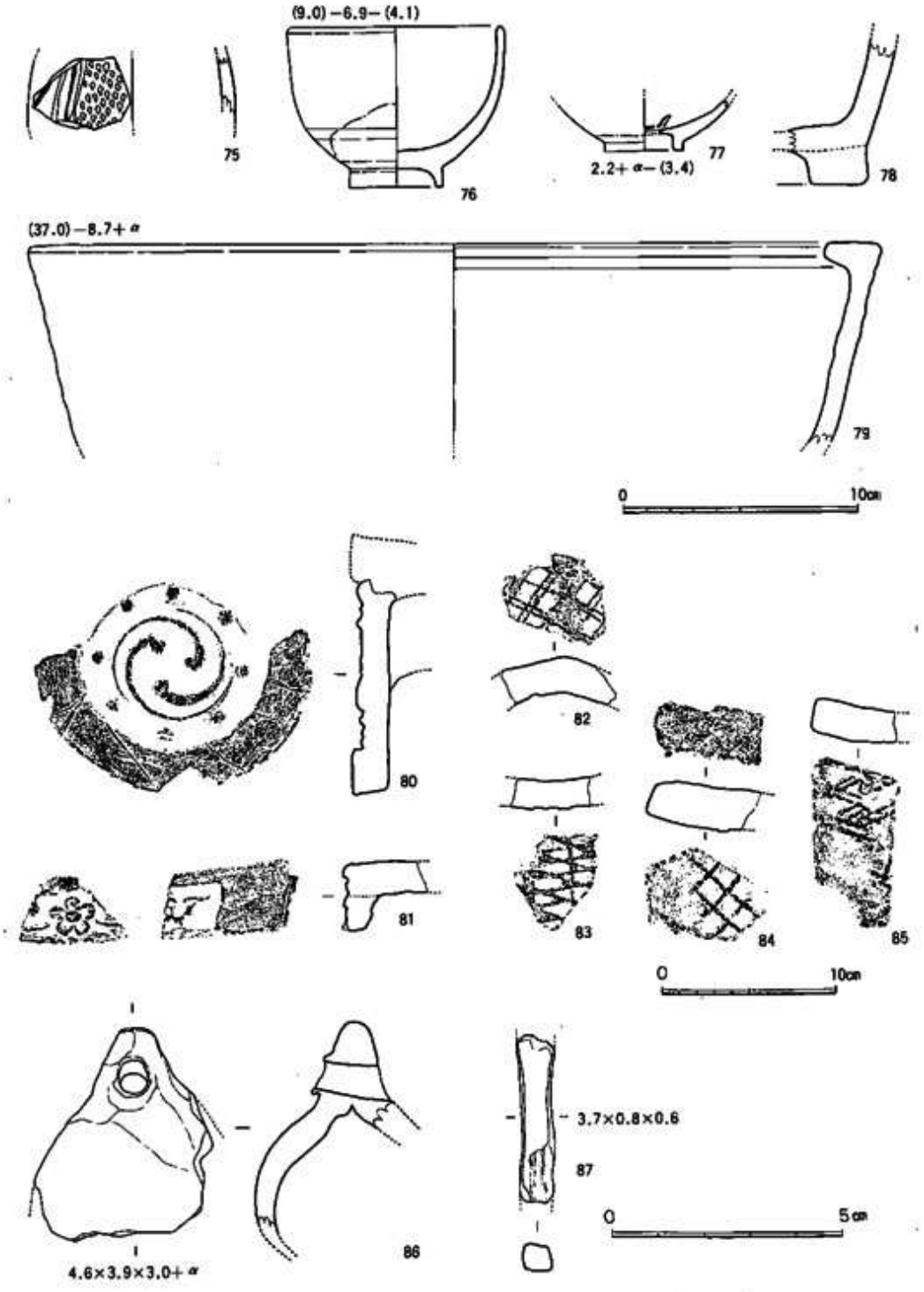
丸瓦(57～64)　57～60は二重格子で60はやや斜格子ぎみ。61は斜格子に縦線が入る。62は正格子に近い斜格子に十字が入る。63は幅の広い斜格子。64は全面にイブシがかかった近世の瓦。

平瓦(65～73)　65から68は二重格子のタタキを持ち、67は斜格子。残りは単格子で69は正格子。

土製品(74)　素焼製の偏平な形状をし、周縁はカーブを描く。紡錘車か。



第19図　第4次調査 遺構出土瓦・土製品実測図 4 (55～74)



第20図　第４次調査　茶灰色土出土遺物実測図５（75～87）

茶褐色土出土の遺物（第20図, PL14-2,75～87）

粉青沙器

壺(75)　高麗象嵌の長胴の壺の胴部片と考えられる。

近世陶器

椀(76・77)　76は灰褐色の胎土に緑茶色の釉を濱け掛けで施す。77は灰色の固い胎土に緑色釉を施す。

瓦質土器

鉢(78・79)　体部は直線的な造り。近世以降の所産か。

瓦

軒丸瓦(80)　螺旋状の尾を引く巴文をもつ。周縁は幅がある。近世のものか。

軒平瓦(81)　文様の中心に梅鉢文が使われる。前出の梅鉢文を持つ軒丸瓦とセット関係になる。近世後半以降のものか。

丸瓦(82)　二重の正格子を持つ。

平瓦(83～85)　83は斜格子に縦線が入る。84は正格子。85は二重の斜格子のタタキを持つ。

土製品

土鈴(86)　素焼きの基部に穿孔を持つもので、近世の後半期によく見られる。

金属製品

釘(87)　0.7cmの厚みを持つ鉄釘と思われる。

表土出土遺物（第21～23図, PL15-2～PL19,88～141）

須恵器

坏蓋(88)　口縁端部内側に隆起線が回るもので、8世紀の前半から中葉頃に盛行するもの。

土師器

坏a(89・90)　90は糸切り底。

瓦質土器

鉢(91・92)　91は擂り目を持つ擂り鉢の口縁部で、端部が肥厚するタイプ。92は内側にL字に折り返される火鉢の口縁部で、外面に沈線と連続して菱形のスタンプが施される。

青磁

椀(93)　青緑色の釉を持つ竜泉窯系青磁椀。

白地鉄釉陶器

壺(94)　硬質で灰色の胎土に白色の下地塗を施し鉄で圏線、格子、花模様を描く。一部に瑠璃色の釉が残存する。二次的に火を受けたのか釉の表層が剥落している。磁州窯系のもの（巻末に詳述）。

肥前系染付磁器

椀（96～101） 96～99は丸椀で、98は重網手文を、99は内底中央にコンニャク版を押印する。100・101は小椀で100は猪口の可能性がある。

徳利(102) 中央部が薄くなるカーブを持つ底部を有す。

陶器

椀(95) 白地の胎土に透明の釉を持つ。高台畳み付け部分は釉をふき取る。

灯明皿(103) 灰褐色の胎土に淡緑色の釉を持つ。口縁端部は釉をふき取る。

土瓶蓋(104) 黄色味を帯びた胎土に緑と茶色の彩色をし透明釉をかける。製品としては35と対になると思われる。

瓦

塼(105)

軒丸瓦(106～111) 106は中央の蓮花文の周りを唐草文、圏線、珠文、周縁が囲むもので、平安時代のもの。107は右巻きの巴文に珠文を持つ「巴瓦」で、瓦当面が薄く胎土が須恵質で周縁の幅が狭く珠文の数が多い点で中世後半期の所産と思われる。108、109も巴瓦で珠文が大きく周縁の幅があるもので、近世以降の所産である。110・111は梅鉢文のタイプでこれも周縁の幅が広い。近世後半期以降の所産。

軒平瓦(112～118) 112～114は近世の、116～118は近代以降の桟瓦の可能性がある。

丸瓦(119～123) 119・120は二重正格子。121は正格子のタタキ。122・123は縄目タタキ。

平瓦(124～137) 125～129は二重格子。130～136は単線の格子目タタキ。137は四ツ菱のマークを有すもの。

金属製品

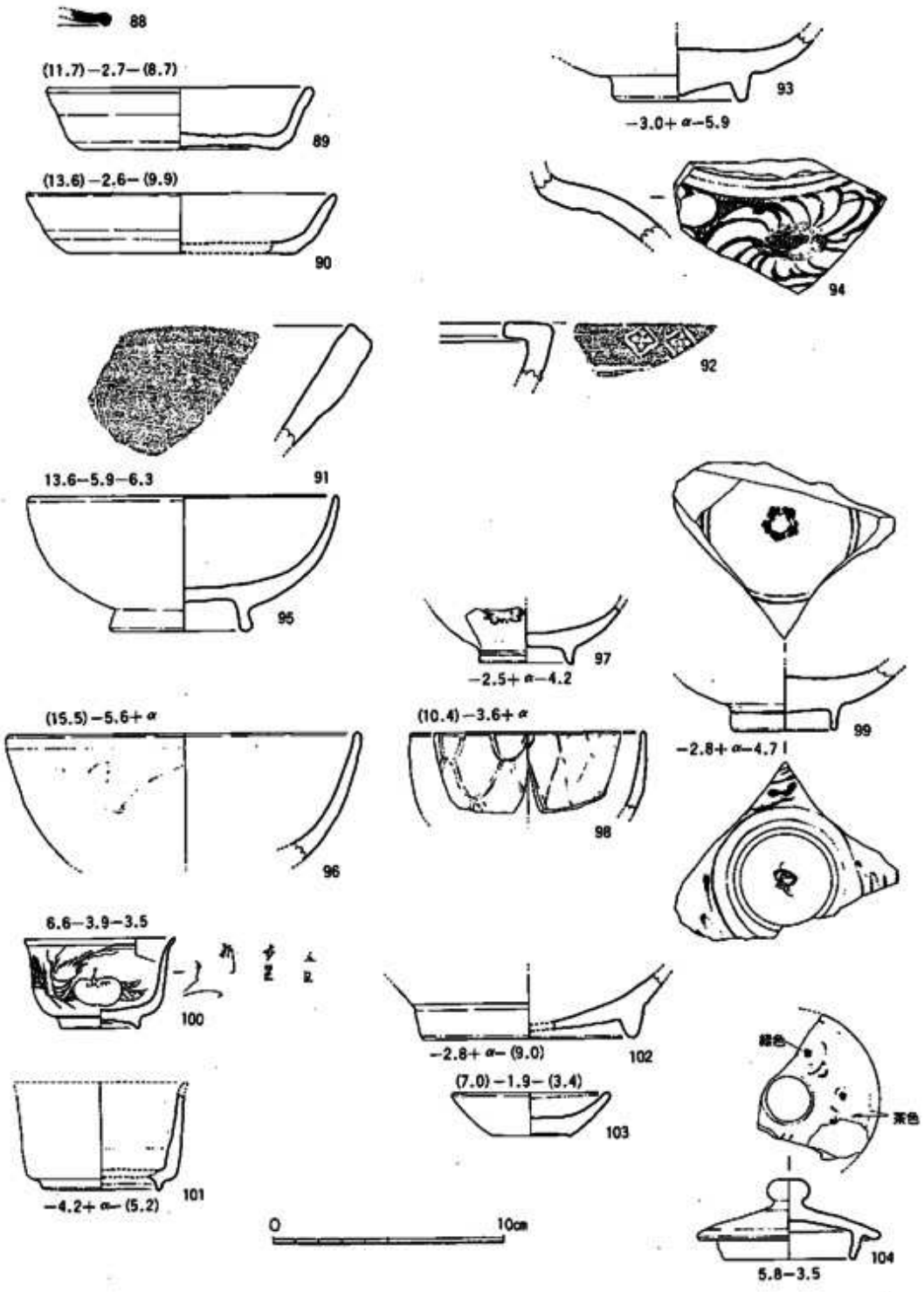
銅銭(138) 寛永通宝の「ハ」銭＝新寛永。

板・棒状鉄製品（139～141） いずれも鉄製で用途不明。139は釘の可能性がある。

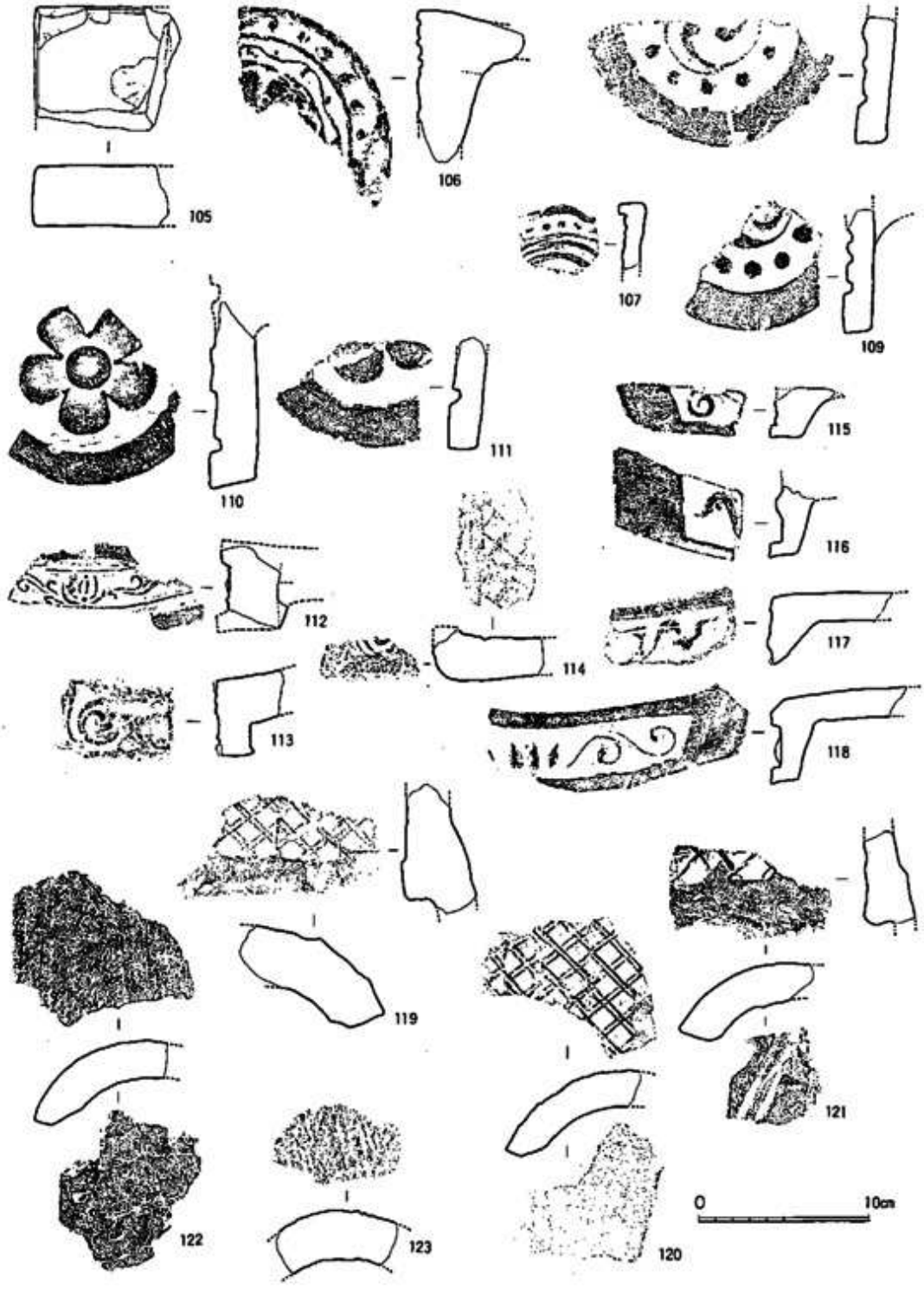
(注釈)

ナデbは、単位幅が1cmを越え、ナデの方向に細かい線状痕が走り、体部に含まれる砂粒は表面に引き起こされるものより埋没するほうが多い。工具を用いない広義のヨコナデにあたる。

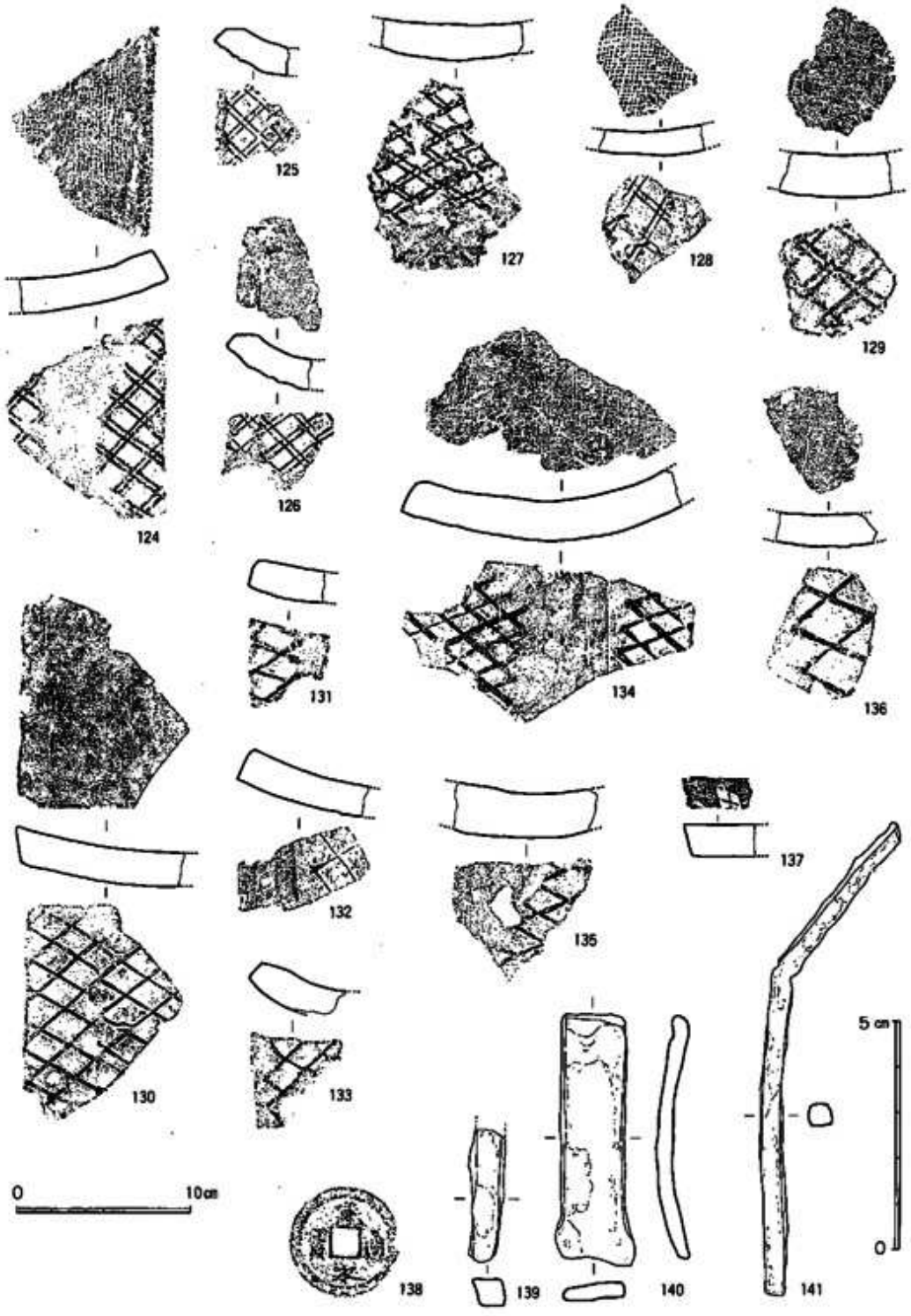
「大町遺跡」1992年太宰府市教育委員会



第21図　第4次調査表土出土遺物実測図6（88〜104）（1／3）



第22図　第4次調査表土出土遺物実測図7（105～123）（1／4）



第23図　第4次調査表土出土遺物実測図8（124～141）（1／4・2／3）

表8-1　第4次調査 出土遺物一覧表

出土遺物一覧表

凡例

○（　）の中の数字は破片数を示す。
○Ⅳ×ⅤはⅣまたはⅤ類の意。
○Ⅳ～Ⅶは Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ類のうちのどれかの意。
○同一個体で別々の遺構から出土している場合はそのまま両方の遺構に点数をカウントしている。
○Ob は黒曜石、And は安山岩、F はフレークの意。
○陶磁器分類は「大宰府条坊跡」Ⅱ1983年太宰府市教育委員会の分類に基づく。

表土　地区不明

土師器	坏a(糸)(3)
土師質土器	七輪サン(1)、片(4)
国産陶器	雑釉；椀(1) B13と接合 黄緑釉；片口(1)
肥前系陶磁器	染付；片(1) 色染付；片(1) その他；片(1)
瓦類	古代；軒平(1)、丸[斜格子(3)縄(1)]、平[斜格子(3)]片(4) 近世；軒丸(1)、平(91)、丸(26)、片(46)

表土　B2

須恵器	蓋3(1)
土師器	坏a(糸)(6)(4)
土師質土器	七輪サン(1)、片(2)
国産陶器	褐釉；甕(1)、土管(1) 鉄釉；片(1)
肥前系陶磁器	染付；椀(2)、猪口(1)、丸椀(大)(1)、片(2) 白磁；椀(1)、紅皿(1)
瓦類	古代；平(斜格子)(3)、片(2) 近世；平(128)、丸(42)、片(57)、軒丸(2)、軒平(2)

表土　B3

土師器	坏a(3)、片(7)
国産陶器	雑釉；片(1)
肥前系陶磁器	不明；片(1)
瓦類	古代；平(斜格子)(1) 近世；平(66)、丸(15)、軒平(2)、軒丸(1)、片(22)

表土　B4

瓦類	近世；平(26)、丸(9)

表土　B5

土師器	坏(2)
土師質土器	七輪サン(2)
国産陶器	雑釉；土瓶注口(1)
肥前系陶磁器	染付；丸椀(大)1-2(コンニャク)(1)、椀(4)、片(5) プリント染付；片(1)
瓦類	古代；平斜格子(1) 近世；平(78)、丸(6)、片(66)、軒丸(1)、軒平(1)

表土　B6

龍泉窯系青磁	椀 Ⅲ?(1)
肥前系陶磁器	染付；徳利(1)、丸椀(大)(1)、椀(3)、片(1)
金属製品	釘?(2)
瓦類	古代；平(斜格子)(1)、片(1) 近世；丸(2)、平(6)、軒丸(梅鉢文)(1)

表土　B7

土師器	片(9)
国産陶器	褐釉；摺鉢(1) 雑釉；椀(1)
肥前系陶磁器	染付；丸椀(大)1-2(1)、片(8)
金属製品	銭「寛永通宝」(1)、釘?(1)、不明鉄片(6)
瓦類	古代；丸(1)、平[斜格子(1)]、セン?(1) 近世；丸(7)(48)、軒丸(巴文)(1)、片(43)

表土　B8

土師器	坏(1)、片(6)
国産陶器	褐釉；片(1) その他；片(1)
肥前系陶磁器	染付；丸椀(小)(1)、片(2) プリント染付；猪口(1)
金属製品	鉄釘(1)、キセル(1)
瓦類	古代；平[斜格子(1)] 近世；平(85)、丸(22)、片(84)、軒丸(巴文)(1)

表土　B9

土師器	坏a(糸)(6)、片(13)
土師質土器	ホウロク(1)
瓦質土器	火鉢(1)
肥前系陶磁器	染付；片(7) プリント染付；皿(1)
金属製品	鉄製品(1)、鉄製品(棒状)(1)
瓦類	古代；平[斜格子(4)]、丸[斜格子(1)]、軒平(1)、軒丸(1)、片(1) 近世；平(281)、丸(41)、軒丸(4)、軒平(1)、軒丸?(1)、片(153)

表土　B11

土師器	坏(1)
瓦類	古代；平[斜格子(1)] 近世；平(77)、丸(15)、軒平(1)、平(スタンプ)(1)、片(91)

表土　B12

土師器	坏a(糸)(6)
瓦類	古代；平[格子(1)] 近世；平(1)、片(3)

表土　B13

土師器	坏a(糸)(21)
龍泉窯系青磁	椀 I-1(1)
須恵質土器	摺鉢(1)
国産陶器	雑釉；椀 褐釉；椀 その他；土瓶蓋(野間山水)(1)、椀(3)
中国陶器	天目；椀(1)
瓦類	古代；平[斜格子(3)]、軒平(1)、片(1)、セン(1) 近世；平(157)、丸(25)、軒丸(2)、軒平(1)、片(163)

表土　B14

土師器	坏a(糸)、小皿a(糸)
中国陶器	磁州窯系；瓶(鉄絵、ルリ釉)(1)
金属製品	鉄製品(釘?)(1)
瓦類	近世；片

表8-3　出土遺物一覧表

表土 C12

土師器	坏(3)
白磁	皿　片(1)
国産陶器	緑釉；土瓶(1)
	刷手；坏?(1)
肥前系陶磁器	プリント染付；瓶(1)
瓦類	古代；平{格子(2)}、丸{格子(1)}
	近世；平(30)、丸(8)

表土 C13

国産陶器	その他；土管(1)
肥前系陶磁器	白磁；椀2(1)
瓦類	古代；平{格子(1),縄目(1)}、平(5)、丸(2)
	近世；軒丸(1)、平(16)、丸(3)

表土 C14

土師器	小鍋(5)
土師質土器	片(1)
瓦質土器	火鉢(1)
国産陶器	雑釉；灯明皿(1)
	その他；土管(1)、甕(1)
肥前系陶磁器	染付；徳利 2(1)
瓦類	古代；平{格子(1)}、丸{格子(2)、縄目(1)}、平(5)、丸(2)
	近世；軒丸{梅鉢文(1)、他(1)}、軒平(1)、平(96)、丸(10)、古代模倣瓦(1)

茶灰土 B7

土師器	坏?(糸)(2)、片(糸)(2)、片(3)
龍泉窯系青磁	椀　片(1)
高麗青磁	象嵌；蓋×水注(1)
土師質土器	火鉢(2)、片(1)
国産陶器	雑釉；椀1-1A(1)、椀4(1)、椀(刷手)(1)、片(1)
	無釉；摺鉢(1)
肥前系陶磁器	染付；片(2)
	プリント染付；片(1)
	白磁；片(3)
金属製品	鉄製品(釘 ?)(1)
瓦類	古代；平(3)、丸(2)
	近世；軒平②、軒丸(3)、平(2)
土製品	土鈴(2)

S-1

土師器	坏(糸あり)(4)
瓦類	古代；片(1)

S-1 暗灰土

土師器	片(2)、坏a×小皿a(糸)

S-1 暗灰茶砂

土師器	片(坏×小皿)(1)

S-2

土師器	片(5)、小皿a(糸)(1)
瓦質土器	鉢 ?(1)
国産陶器	雑釉；片(2)
	不明；甕(1)
金属製品	鉄釘 (3)
瓦類	近世；軒丸(1)、丸(3)、平(25)

S-2 淡黄砂

土師器	片、大甕
土師質土器	片(1)
瓦類	古代？；平(1)

S-3

土師器	片(2)
瓦質土器	片(1)
国産陶器	雑釉；椀1-1(1)
瓦類	古代 ；軒平(2)、軒丸(1)
	近世；軒丸(1)、丸(15)、平(78)、鬼瓦(1)

S-4

須恵器	片?(1)
土師器	片(1)
瓦類	古代 ；片(2)
	近世；平(21)、丸(11)、軒丸(2)

S-6

土師器	坏(2)
肥前系陶磁器	染付；小皿(1)
瓦類	近世；平(37)、丸(4)、軒平(2)
土製品	不明(1)

S-7

土師器	坏a(糸)(1)
土師質土器	七輪サン(1)
瓦質土器	片(1)
国産陶器	雑釉；土瓶1(野間山水)(2)、椀(1)
金属製品	鉄釘? (1)、ガマ口の枠(1)
瓦類	古代 ；平{斜格子(2)}
	近世；丸(11)、平(59)、軒平(1)、片(8)
石製品	おはじき(1)

S-8

土師器	火鉢?(1)、片(糸)(1)
白磁	坏　片(1)
肥前系陶磁器	白磁；小皿(1) XIか?
瓦類	古代 ；片(1)
	近世；平(27)、丸(7)、鬼瓦(1)

S-9

土師器	丸坏?(3)、小皿a(ヘラ?)(1)、坏a(ヘラ)(8)、片(2)
瓦類	古代 ；片(1)、格子(2)

S-11

土師器	片(3)
瓦類	古代 ；平{斜格子(1)}
	近世；平(9)、丸(2)、片(5)

S-12 黄茶土

縄文土器	粗製(1)

表8－2　出土遺物一覧表

S-13

土師器	坏(ヘラ)(9)、丸坏(4)、片(3)
瓦類	古代；丸(1)、平{斜格子(1)} 近世；丸(1)

S-14

瓦類	近世；丸(6)、平(18)

S-21

土師器	皿?(糸)(8)
瓦類	古代；丸{斜格子(2)}、平{斜格子(1)}、行基(2) 近世；瓦当(梅鉢文)(1)、軒丸(2)、丸(35)、平(93)、片(4)

S-22

瓦類	近世；平(121)、丸(32)、軒平(2)

S-23

土師器	坏a(1)、火鉢?(1)、小皿a(ヘラ?)、
瓦類	古代；鴟(1) 近世；平(3)

S-25

土師器	坏a(糸あり)(5)

S-25 黄茶土

土師器	坏a(糸)(48)、高台(1)、片(糸あり)(50)
須恵質土器	摺鉢(1)
瓦類	近世；片(7)

S-25 黒色土

土師器	坏a(糸)(79)、小皿a(糸)(3)、小皿b(1)、片(50)
高麗青磁	象嵌；椀(1)
中国陶器	天目；椀(2)
金属製品	片(1)
瓦類	古代；平{斜格子(1)} 近世；丸(1)、平(2)

S-26

土師器	坏a(糸)(1)
瓦類	古代；斜格子(1)、丸(1)、平(1) 近世；丸(2)、平(8)

S-27

土師器	坏a(1)
瓦類	古代；丸{格子(1)}、片(3) 近世；平(58)、軒平{梅鉢文(1)}

S-28

土師器	片(18)
瓦類	古代；片(1)
土製品	紡錘車(1)

S-29

土師器	坏a(糸)(16)、片(13)
金属製品	鉱滓(1)
瓦類	古代；平{斜格子(1)}

S-30 暗茶土

土師器	片(3)
瓦類	古代；片(4) 近世；片(3)

S-30 灰茶土

土師器	小皿a(糸)(1)、片(3)
瓦類	古代；平{斜格子(1)}、片(1) 近世；平(1)、片

S-30 明灰土

土師器	小皿a(糸)(1)、坏(11)
国産陶器	不明片(1)
金属製品	刀子?(1)
瓦類	古代；平{斜格子(1)} 近世；片(7)

S-31

土師器	片(5)
瓦類	古代；平{斜格子(1)}、丸{斜格子(1)} 近世；片(4)

S-32

土師器	坏a(2)、片(11)
瓦類	近世；片(1)

S-33

国産陶器	緑釉；皿(1)
瓦類	古代；平{斜格子(1)}、片(2) 近世；丸(3)、片(2)

S-34

土師器	片(2)
瓦類	古代；丸{格子(1)}

S-35

金属製品	スラグ?(1)
瓦類	古代；丸{斜格子(1)}、平{斜格子(3)}、平(1)、片(3) 近世；平(81)、丸(8)、軒丸(1)、片(75)

S-47

瓦類	近世；丸(2)、平(6)

S-48

土師器	片(3)
瓦類	近世；片(3)

S-49

土師器	椀c(1)

S-51

土師器	片(1)
国産陶器	不明片(1)
金属製品	片(2)
瓦類	近世；平(17)、丸(3)、片(9)

S-52

土師器	片(2)
瓦類	近世；片

表8－4　出土遺物一覧表

S-36

土師器	坏(2)
瓦類	古代；丸[斜格子(1)]、丸(2) 近世；平(3)

S-37

土師器	坏(6)
瓦類	近世；片(10)

S-38

土師器	片(1)
瓦類	近世；片(3)

S-39

須恵器	片(1)
土師器	片(2)
肥前系陶磁器	染付；小皿1-A②
瓦類	古代；平[斜格子(1)]、平(1)、片(1) 近世；平(5)、丸(1)
土製品	瓦玉(1)
石製品	おはじき(1)

S-41

土師器	坏a(糸)(5)、坏a(1)

S-42

土師器	小皿a(糸)(1)、片(糸)(4)
瓦類	近世；片(1)

S-43

土師器	坏a(糸)(1)、坏a(1)、片(8)
金属製品	鉄釘?(2)、片(1)
瓦類	古代；片(3)

S-44

土師器	片(1)

S-46

土師器	片(1)

4次調査の所見

今回の調査は工事作業面で検出される遺構の調査に止まり、残りの遺構は一応保全されている。限定的な遺構検出であったが、縄文時代から近代に至る幅広い時期の遺構が確認された。

縄文時代の遺構の存在は広く、宝満山の裾に広がる当該時期の生活ステージの一つに位置づけられ、今回の調査も含め至近にある新町遺跡3次調査で検出された晩期中頃にその活動の一つのピークがあるものと思われる。今後集落が発見される可能性が大きい。

平安時代の遺構は堀方が段状に掘られる大きめの柱を用いた掘立柱建物の柱穴であり、このことから現在の回廊周辺には掘立柱建物が存在したらしい。創建期を含めた安楽寺天満宮の建物配置は1次調査で堀込み地業が確認されているほかには詳細が判明していない。康和2(1100)年に安楽寺天満宮に参詣した大江匡房が残した文書から、この時期に門外および廟前に3つの池があると詠んでいるが、建物構成がほぼ今のような状況に落ち着いたと思われる小早川隆景による天正19(1591)年の本殿再興以前(それ以前の本殿は1587年に消失)の建物配置は依然として霧中にある。立会調査では意外にも回廊や現在の本殿の下に多くの中世以前の柱穴を含むピットが検出されている。

中世に属す遺構も今回の調査でも確認され、その中から高麗象嵌青磁片、中国天目椀等の輸入陶磁器が見つかっている。その中には後述するが、中世後半期の地方では領主クラスの遺跡から出土することが多い磁州窯系の壷の破片も含まれ、中世後半期の安楽寺天満宮の経済活動の一端が知られる。

近世後半期から明治前半期には相当規模の建物等の改変がおこなわれたものと思われ、廃棄物(焼けた板材や瓦などが主体)を捨てるために掘られたと考えられる穴が数多く見つかった。特に明治前半期の4SK007は直径が6mを超える大きなもので、焼けた板材が多く投げ込まれていた。土坑の南側は江戸時代まであった安楽寺の中心施設「大講堂」があったと推定される場所であり(第2図参照)、恐らく神仏分離、廃仏毀釈の風潮が高まった時期に形成されたものと考えられる。

その後の4次調査地点は整地が施され、現在に至るまで通路として使用されたらしく、所々で硬化面が見られた。

以上のように太宰府天満宮の現在の境内地には複合した時代の遺構が展開していることが再確認された。

(山村)

磁州窯系陶器について

田中克子

はじめに

日本国内で発見される中国産陶磁器の生産窯系は、現在わっかているものだけでも20系統を越える。広い範囲で同系統の製品を生産していることを考えれば、その生産窯の数は膨大なものになると思われる。これらの陶磁器は中国、或いは日本国内の政治・経済等の状況と対応しながら、古代から綿綿と輸入され続けてきた。中国産輸入陶磁器は越州窯・龍泉窯・景徳鎮窯等を代表とするいわゆる江南産が主力である。

製品の実態

しかし、江南産に混じって中国江北産と思われる陶磁器も少量ながら各時代出土していることも見逃せない。この江北産陶磁器の中でも磁州窯は特に日本人に親しまれたと思われ、現在でも数多くの遺品が残されている。しかし、磁州窯と呼ばれる製品群をどのように定義づけるかというと、かなり不鮮明と言わざるをえない。その理由の一つとして、その生産品の種類があまりに多岐にわたっている点があげられる。現在、磁州窯と一般的に呼ばれている製品を概観してみると、まず釉の種類についてだけでも素地に白化粧土を施した後に透明釉をかけた白釉、或いは黒釉・飴釉・翡翠釉・澱青釉・黄釉・緑釉・三彩・赤絵等かなり多彩であり、また装飾技法からみても掻落し・線彫り・象嵌(珍珠地)・鉄絵・練上げ手等様々な技法が併用されている。磁州窯という呼称はもともと河北省磁県一帯にある窯で焼かれた製品に対する呼称として使用されていた。しかし、例えば北方青磁窯の代表として知られる耀州窯においても白釉陶器を焼造していたように、前述したような特徴をもった製品を焼いた窯跡は河南省を中心として河北・山西・陝西・山東・安徽各省等かなり広い範囲にわたって分布することが認められおり、現在ではこれらの窯でやかれた同様の作風を持つ製品に対する一つの型式名として、磁州窯系ということばが使用されている。

「磁州窯系」定義について

では具体的にどのような作風のものを対象として、磁州窯系という呼称を使用するかという点について、長谷部楽爾氏は、三彩や赤絵は技法上特殊であり、それぞれ別の系譜に属するものとして扱っており、また黒釉についても、同種のものが中国全土にわたって生産されており、磁州窯の輪郭を不明瞭にするものとして、これらを除外して考えている（文献1.2）。つまり、鉄分を含んだ灰色の素地に白化粧して透明釉をかけた、いわゆる白釉陶器を磁州窯の基本形と

し、これを他と区別する何よりの特徴としてあげている。佐藤雅彦氏もほぼ同様にとらえており、幅広い加飾法を用いているが白い肌を基本とするという点においてはすべて共通であるとしている(4)。中国においても李輝柄氏を始めとし陶磁研究者の間では、特に白地黒花の製品に対しいわゆる狭義の磁州窯製品も含めて磁州窯型、或いは、磁州窯系という認識のしかたがなされており、焼造窯についても“磁州窯風格的窯”と呼称している(65)。また、澱青釉(鈞釉磁)については鈞窯系の製品として、磁州窯系製品からは除外して考えたい。ただし、生産地では実際上記のような多岐にわたる製品が生産されたことは事実であり、磁州窯で焼かれたものは黒釉であれ、鈞釉であれ磁州窯製品であることには間違いがないのである。しかし日本における出土品の具体的な生産地を特定できない以上、磁州窯系製品の基本的な認識としてはいわゆる白釉陶器を基本形と考えることが妥当であろう。

本稿では日本で出土した磁州窯系陶器の資料を紹介するとともに、それらが含む問題点を提議することで、やや輪郭の不鮮明な磁州窯系陶器に一光を投じることができたらと思う。

日本国内の出土状況

日本国内で磁州窯系陶器が発掘調査により出土した遺跡は表9に示す通りである。磁州窯系陶器と呼ばれる製品の基本的な認識のしかたは前述したが、吉州窯や景徳鎮窯等江南地域の窯でも磁州窯の影響を受けて類似品を生産していることは周知のとうりである。亀井明徳氏は吉州窯製品についての論考の中で、吉州窯白地黒花陶器は素地に直接鉄釉で彩絵する点を磁州窯と識別する指標としてあげているが、吉州窯でも白化粧を施した後に彩絵したものがあり、この場合文様のものを除いては磁州窯との判別は難しいとしている(15)。日本で調査によって出土した資料のほとんどは小片で全形を把握することは難しく、これら日本出土のものが磁州窯系製品と断定することはかなり困難である。今回は大宰府以外は既報告の中からの集成で、報告された内容から可能性の高いものを抽出し、また疑問の残るものについても今後の参考資料として表記した。また、いわゆる白釉陶器以外の資料についても報告者、或いは調査者によって磁州窯系製品と断定されているものについても一応列記した。従って実質的にはその数が増減する可能性はかなり大きい。

〈出土地〉

出土地の分布状況から見ると、南は沖縄から北は東北まで広く出土しており、出土地域(分布)からみた特異性は認められない。しかし、遺跡の性格上から見ると、そのほとんどが貴族や武士の館跡、寺院、或いは城郭等、各地域の有力層に関連すると思われる遺跡である。また、博多・草戸千軒・京都・鎌倉等中世都市として栄えた地域からの出土も多い。これらの地が当時の貿易商人たちの中心地であることから考えれば当然の結果とも言える。共伴遺物や層位関係等出土状況から明確な廃棄年代をおさえることができるものはかなり少ないが、遺跡・遺構

の時期幅はだいたい12世紀前半～17世紀代の間で押さえられる。

〈出土遺物〉

器種で最も多いのが壺で、瓶・盤がこれに次ぐ。いわゆる貯蔵形態がほとんどで、碗や皿等の供膳形態は認められない。装飾技法では割花・掻落し・鉄絵といったものが認められる。出土陶片はいずれも残存状態が良好でなく、詳細な生産年代は不明瞭であるが、だいたい11世紀後半代から17世紀後半代に相当すると思われるものがある。ただし、東京大学構内出土の白地鉄絵壺について、鈴木裕子氏は共伴した多量の17世紀後半代の陶磁器から、この製品についても同様の年代観を持っており、このことについて伝世、或いは混じりではなく、少量ではあっても消費地で製品がみられるということは、その窯が生産を続けている証拠になると考えたいとしている（16)。第35図に示したように清代以降の紀年名資料も若干認められるが、中国での窯跡調査報告例では明代以降の状況は不明瞭で、この製品が17世紀後半代のものかどうか私見を加えることはできない。量的には元代のものと思われる白地鉄絵が最も多く、京都周辺から出土した宋代の製品がこれに次ぐ。中国江北一帯で磁州窯が隆盛をきわめた時期のものが少量ながらも輸入されていることがわかる。

問題点

以上、日本出土の磁州窯系陶器について概観してきたが、報告例が少ないこともありその全体像を把握することはかなり困難ともいえる。二、三の問題点をあげてまとめとしたい。

1、器種に関する問題

日本で出土する陶片は各時期を通して、ほとんどが貯蔵形態である。まず中国における磁州窯系製品の生産状況はどのような状況であるか、その代表的焼造窯である河南省鶴壁集磁窯・河北省磁州窯等の報告例（64. 65. 66）によると、北宋代から元代にかけてその生産品の主力となっているのは、一貫して碗や皿（盤）類等である。しかし、三上次男氏によると、もともと庶民のための日常用具を生産していたこれらの窯は、元成立以降、美術工芸品嗜好の強い支配階級層によって、実用品とともに大形の高級品を生産することにも力を入れたとされる(6)。

日本出土品は京都周辺で出土する宋代の掻落し瓶・壺を始めとして、これ以後最も多く出土する元代のものと思われる鉄絵の短頸壺、或いは盤等、日常用品とは考え難い器種がほとんどである。出土品の多い13世紀後半から14世紀代にかけて、明確に共伴関係を押さえられる遺跡・遺構は少ないが、大体同時期のものと思われる輸入陶磁器の組成をみると、やはり龍泉窯や白磁・青花等江南産が主力となっており、しかも碗形態が多いことがわかる。この時期の輸入陶磁器組成を示す好例として新安海底遺物があるが、横田・森田・森本・山本の

四氏はこの沈没船の陶磁器組成をかなり詳細に分類しており、青磁・白磁（江南産）とも一般質、或いは粗質の碗・皿等供膳形態が9割以上を占めるという結果を出している（19）。また、時代は前後するが、12世紀から13世紀にかけて江南産の白磁・青磁の碗・皿がかなり多量に輸入されていることは言うまでもない。これらを考えあわせると、日本では日用品として対象となるのは江南産製品（供膳形態）であり、これに対し江北産である磁州窯系製品は、生産地で大量に焼造されている実用品ともいえる碗や皿ではなく、壺や瓶等貯蔵形態に限定して輸入された点に、この窯の製品（大形品）に対する需要者の特別の嗜好を伺い知ることができる。

中国での磁州窯製品の国内流通の状況をみると、遼寧省三道崗沖で発見された沈没船の例によれば、（船自体の年代は北京大学考古学研究室の船板の放射性年代測定によればB．P．740±80年というデータが出されているので元後半期のものといえるが、）この沈没船から出土した580点の陶磁器の全てが磁州窯製品であったという（72）。白地鉄絵、黒釉、緑色瑠璃釉の各手法のものがあり、器種には缶（甕）、皿、盆（盤）などがあるとされている。この船は河北から遼寧へ向かう途中に沈んだと想定されており、中国国内の磁州窯製品の流通段階では一定量の「供膳器種」も含まれていたことを示している。このことは先に述べたように日本側の磁州窯製品の「貯蔵形態」に対する偏向性を窺わせる。

ここで、「貯蔵形態」ということばを使用したが、当時の日本において磁州窯製品の「貯蔵形態」が実際に実用の貯蔵容器として取り扱われていたかというと、江南産に比べた出土量の少なさから考えればこの可能性はかなり低い。日常貯蔵用品として、13世紀以降、国内ではすでに国産の陶器（大形容器）が生産・流通しており、実際磁州窯製品と共にこれら国産陶器、或いは中国製陶器（貯蔵形態）が出土する例も多い。さらに、磁州窯系生産地が中国内陸部に位置することを考えれば、需要量の多い日用雑器は運搬費のかさむ遠隔地から輸入するよりも、より貿易港に近い江南の生産地から輸入したほうがより安価に入手できることは当然で、これらのことから江北産である磁州窯系製品は、同時に輸入された江南産製品が実用品として対象となっていたのに対し、いわゆる奢侈品として意識されていたと思われる。

2、時期的問題

輸入時期（生産年代）と廃棄年代に多少のずれが生じている。どのくらいの年代のずれがあるか、まず遺跡・遺構の年代が在地の土器から把握できる資料が少なく、また出土陶磁器によって遺構の年代を決定している例もあり、明確な廃棄年代をつかむことはかなり困難ともいえる。また生産年代についてはそれを推定できる資料として、中国における年代の推定可能な窯跡と消費遺跡の調査報告例・紀年名入りの遺品等を図示した（図26～35）。しかし、中国国内においてもまだ細かな生産年代が確立しておらず、結局陶磁史（美術史）的に編年された生産年代を

参考にせねばならず、さらに日本出土の陶片は全形を把握できるほどのものが少ないため、かなりおおざっぱなとらえかたしかできない。このような状況の中ではあるが、最大で100年近くの年代のずれが生じており、特に元様式と言われる製品にこのような現象が強く認められる。陶磁器の場合、使用期間が長いことや、伝世ということを考慮すれば当然の結果とも言えるが、これと関連して同様の現象が元様式染付にも見られることは見逃せない。元染付が14世紀でなく16世紀の遺構から出土する例が多く、これについては小野正敏氏や上田秀夫氏より特別の意識下における伝世として既に問題提議されている（12.13）。元染付自体も沖縄を除けば出土量はかなり少なく、またこの時期の龍泉窯系青磁についても不明瞭な点が多く、これは13世紀後半から15世紀にかけて、幕府による貿易統制や中国船の来航の減少とも関連して考えられるが、日本出土の元様式磁州窯製品に見られる年代のずれは、より珍貴なるものとして伝世に特別の意識が働いた結果と考えるのは早急であろうか。

おわりに

今回太宰府市の太宰府天満宮で磁州窯系製品の一小片がたまたま出土したのをきっかけに、これまであまり報告されることのなかった江北産陶磁器のひとつを概観したわけであるが、勉強不足のままの草稿で、しかも磁州窯というあまりにも大きなテーマをとりあげたことは大胆とも言える行動と、校了後後悔の念を禁じえない。しかし、これまで脚光をあびてきた江南産陶磁器に対して、やや影のうすかった江北産陶磁器の日本国内のあり方について考えていく上で、一資料として使用していただければ幸いである。また、草稿中博多遺跡群においてかなり多量の磁州窯系陶器が出土していることが判明したが、未報告資料のため今回は資料として使用することを控えた。今後の報告を待って本稿を加筆・訂正したい。

なお、草稿にあたってさまざまな助言や資料の紹介をして下さった山村信榮氏・森本朝子氏に謝意を表します。

参考文献

1．長谷部楽爾『陶磁体系39 磁州窯』平凡社　1974
2．『世界陶磁全集12　宋』小学館　1977
3．『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館　1978
4．佐藤雅彦『中国陶磁史』平凡社　1978
5．Indianapoplice Museum of Art『Freedom of Clay and Brush through Seven Centuries in Northern China:Tz'u-chou Type Wares,960-1600A.D.』Indiana University Press 1980
6．『世界陶磁全集13 遼・金・元』小学館　1981

7.佐々木達夫『元・明代の窯業史研究』吉川弘文館　1985
8.亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版　1986
9.佐藤雅彦・長谷部楽爾・弓場紀知訳『中国陶磁通史』中国硅酸塩学会編　平凡社　1991
10.矢部良明『中国陶磁の八千年』　平凡社　1992
11.上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」貿易陶磁研究No.2　1982
12.上田秀夫「根来寺第Ⅲ地区出土の元染付とその他の中国陶磁」貿易陶磁研究No.3　1983
13.小野正敏「一乗谷及び豊原寺出土の元様式の染付」貿易陶磁研究No.3　1983
14.亀井明徳「勝連城跡出土の陶磁器組成」貿易陶磁研究No.4　1984
15.亀井明徳「日本出土の吉州窯陶器について」貿易陶磁研究No.11　1991
16.鈴木裕子「東京大学本郷構内の遺跡・御殿下記念館地点出土の絵高麗梅花文碗」陶説第496号　1994
17.長谷川通隆「大内館出土の中国陶磁」貿易陶磁研究No.3　1983
18.馬淵和雄「浄明寺出土の白地鉄絵について」鎌倉考古No.2　1980
19.横田賢次郎・森本朝子・山本信夫「新安沈没船と太宰府・博多の貿易陶磁器－森田勉の研究成果に寄せて－」貿易陶磁研究No.9　1989
20.李徳金・蔣忠義・関甲堃「朝鮮新安海底沈没船中の中国陶磁」出光美術館館報33　1980
21.「今帰仁城跡開発調査報告Ⅰ」　今帰仁村文化財調査報告書第9集　今帰仁村教育委員会　1983
22.「勝連城跡」勝連町の文化財5　勝連町教育委員会　1983
23.「佐敷グスク発掘報告」佐敷村教育委員会　1980
24.「福福遺跡発掘調査報告書」沖縄県文化財調査報告書第50集　沖縄県教育委員会　1983
25.「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ」長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会　1991
26.「栄町遺跡」長崎県文化財調査協議会　1993
27.「博多Ⅱ－図版編－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第86集　福岡市教育委員会　1982
28.「博多Ⅷ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集　福岡市教育委員会　1987
29.「博多12」福岡市埋蔵文化財調査報告書第177集　福岡市教育委員会　1988
30.「博多17」福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集　福岡市教育委員会　1991
31.「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　福岡市教育委員会　1984
32.「都市計画道路博多駅築湾線関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集　福岡市教育委員会　1989
33.「英彦山修験道遺跡」添田町教育委員会　1985

34.「大内氏館跡Ⅰ」山口市埋蔵文化財調査報告第9集　山口市教育委員会　1981
35.「大内氏館跡Ⅳ」山口市埋蔵文化財調査報告第13集　山口市教育委員会　1982
36.「草戸千軒遺町遺跡1～30次報告」年報　1965～1983
37.「平安京右京四条三坊」京都市埋蔵文化財調査概要　京都市埋蔵文化財研究所　1991
38.『平安京跡発掘資料選二』京都市埋蔵文化財研究所　1986
39.「1977年度の覆工板下調査　X7」京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報3　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1982
40.「左京四条一坊」平安京発掘調査概報昭和58年度　京都市観光局　1984
41.「1977年度のトレンチによる発掘調査№73」京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報3　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1982
42.「仁和寺院家跡」昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要　京都市埋蔵文化財研究所　1993
43.「鳥羽離宮跡127次調査」昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要　京都市埋蔵文化財研究所　1993
44.『鞍馬寺経塚遺宝』鞍馬寺　1933
45.「平安京右京六条一坊」京都市埋蔵文化財調査報告11　京都市埋蔵文化財研究所　1992
46.「植物園北遺跡発掘調査概報」　京都市文化観光局　1990
47.「根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ」　和歌山県教育委員会　1978
48.「高野山発掘調査報告書」元興寺文化財調査研究所　1982
49.「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6－平成元年度発掘調査報告－」鎌倉市教育委員会　1990
50.「諏訪東遺跡」諏訪東遺跡調査会　1985
51.「(推定) 藤内定員邸跡遺跡－鎌倉市中央公民館用地内遺跡の発掘調査報告書－」鎌倉市教育委員会　1985
52.「千葉地東遺跡－鎌倉県税事務所建設工事に伴う鎌倉市御成町所在遺跡の調査－」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10　神奈川県立埋蔵文化財センター　1986
53.「千葉地遺跡－鎌倉市御成町15-5番地所在中世市街地遺跡の発掘調査－」千葉地遺跡発掘調査団1983
54.「向荏柄遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会　1985
55.「逗子市文化財調査報告書第1集」逗子市教育委員会　1970
56.「東京大学本郷構内の遺跡・山上会館・御殿下記念館地点（第一分冊)」東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学埋蔵文化財調査室　1990
57.「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3　吉田川西遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3　長野県埋蔵文化財センター　1989

58.「未森城跡　未森城跡、測量・発掘調査報告書」未森城跡調査団　押水町教育委員会　1989
59.高掘勝喜他「普正寺」石川考古学研究会　1967
60.「柳之御所跡発掘調査報告書－第20・22次発掘調査－」平泉町文化財報告書第15集　平泉町教育委員会　1989
61.「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報　平成２年度」岩手県文化進行事業団埋蔵文化財調査報告書第159集　岩手県文化進行事業団埋蔵文化財センター　1991
62.赵青云・李德保「河南省鶴壁集磁窯遺址発掘簡報」文物　1964年第８期
63.鶴壁市博物館「河南省鶴壁集磁窯遺址1978年発掘簡報」中国古代窯址調査発掘調査報告集　1984
64.叶喆民「河南省禹県古窯址調査記略」文物　1964年第８期
65.李輝柄「磁州窯遺址調査」文物　1964年第８期
66.河北省文化局文物工作隊「観台窯址発掘報告」文物　1959年第６期
67.朱金升「河北磁県南開河村元代木船発掘簡報」考古　1978年第６期
68.童依華「中国歴代陶磁款識彙集」1984
69.中国科学院考古研究所・北京市文物管理所「北京西絳胡同和後桃園的元代居住遺址」考古　1973年第５期
70.宗毅「試談磁州窯在国外的影響及其伝播」中国古代陶磁的外銷　1987年福建晋江年会論文集　1987
71.国立歴史民俗博物館「日本出土の貿易陶磁」1994年
72.「中国・南海沈船文化を中心とする―はるかなる陶磁の海路展図録」朝日新聞社　1993

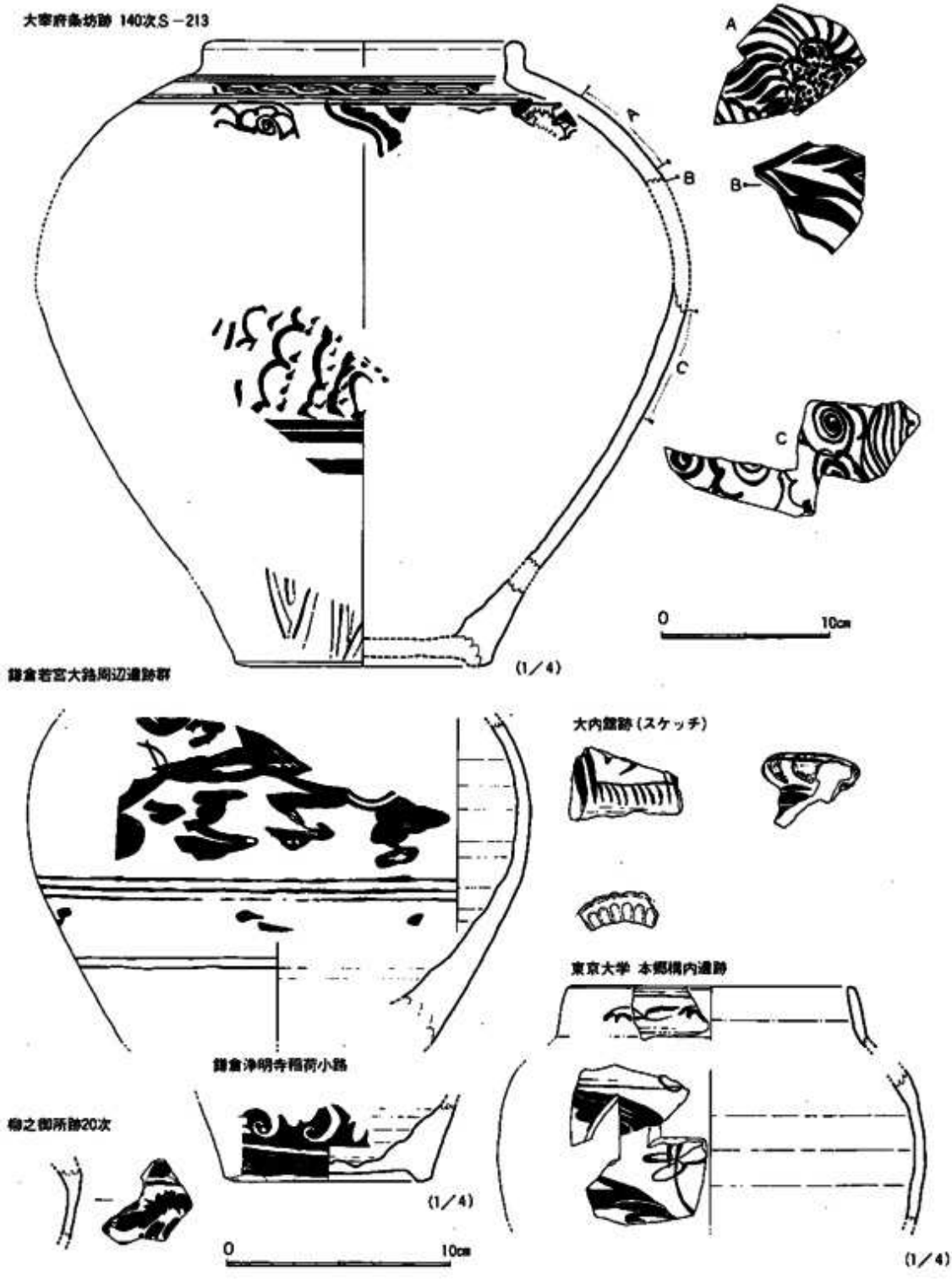
〈表９の凡例〉

・龍泉窯青磁“上田”は、上田秀夫氏による型式分類（文献11）、龍泉窯青磁“大”と白磁は「太宰府条坊跡Ⅱ」（1983年）を基礎とする分類による。

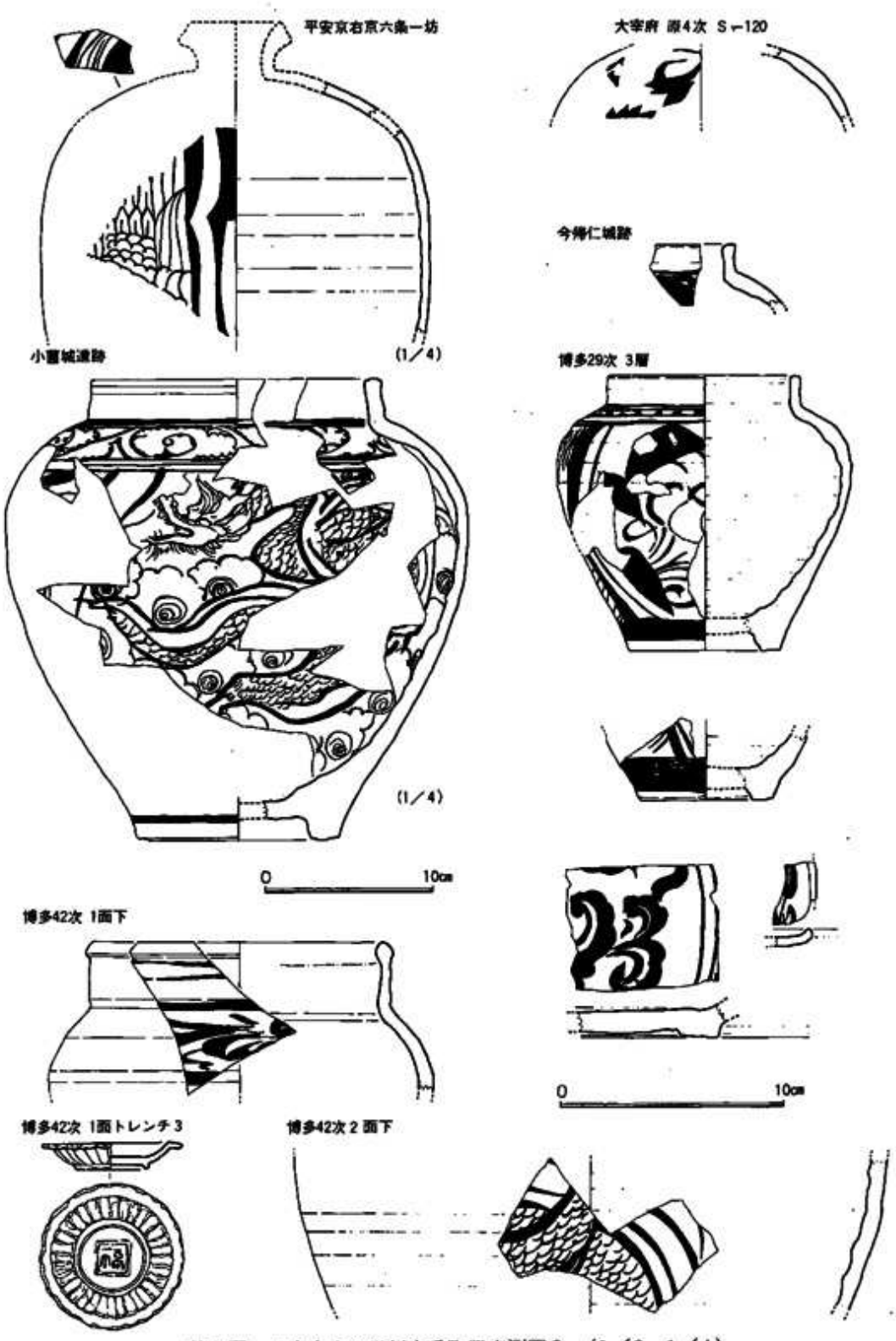
・▲は磁州窯系陶器とは報告されていないが、可能性があるもの（吉州窯・景徳鎮窯の可能性も含む。）

・出土遺物の欄には、極端に時代がさか上るもの（いわゆる混入遺物）以外の中国産陶器のみを記載。

・出土磁州窯系資料の名称で“鉄絵劃”としたものは鉄絵を施した後に、文様部分の一部（縁どり等）を線彫りしたものを示す。



第24図　日本出土の磁州窯系陶器実測図１　（1／3，1／4）



第25図　日本出土の磁州窯系陶器実測図2　(1/3, 1/4)

表9-1　磁州窯系製品出土一覧表

文献番号	遺跡・遺構	所在地	性格	出土遺物	遺跡・遺構の時期	推定生産年代
21	今帰仁城跡 3区II層	沖縄県国頭郡今帰仁村字 今泊ハンタ原地	城郭	翡翠釉鉄絵壺▲ 龍泉：碗上田B・盤・香炉 白磁：IX・枢府・ピロースク 青花(元・明) 華南彩釉陶：緑釉劃花瓶 ・三彩水滴 翡翠釉：皿 陶器	14c～16c	
22	勝連城跡	沖縄県	城郭	白地鉄絵 龍泉 白磁：枢府 青花	14c中～15c中 (輸入陶器より 判断　文献14)	14c前～中
23	佐敷グスク跡	沖縄県島尻郡佐敷村佐敷	城郭	白地鉄絵壺(文献17)	14～16c	
24	稲福遺跡 C-35II層	沖縄県島尻郡大里村稲福		白地鉄絵壺▲ (報告者は"吉州"とする)	13・14c	
25	小薗城遺跡 空堀	長崎県東彼杵郡東彼杵町 瀬戸郷字小薗	城郭 (推定地)	白地鉄絵龍文壺		14c前～中
26	栄町遺跡	長崎県長崎市栄町1-15	町屋敷	灰釉鉄絵唐獅子像▲		15～16cカ
27	博多4次	福岡県福岡市博多区冷泉 7-1	都市	緑釉掻落唐草文梅瓶 龍泉・青白 白磁：碗II～V(多量) (文献8)	11c後 ～12c前	宋
28	博多29次 3層	福岡県福岡市博多区 網場町22-67	都市	白地鉄絵牡丹文壺 白地鉄絵唐草文皿 龍泉：碗上田C-II 白磁：枢府 青白：ロハゲ 青花(元・明)	14～17c初 (16c中心)	14c前
29	博多35次 SF049	福岡県福岡市博多区 上呉服町56	都市	翡翠釉鉄絵瓶 白地鉄絵盤 龍泉：碗上田B・C・香炉・盤 皿 白磁：IX・枢府・徳化 青白：枢府系 陶器：盤・甕・壺	15c初～前	14c前～中
	SDO20	〃		翡翠釉鉄絵瓶 (SF049と同一固体) 龍泉：碗上田B・C・香炉・盤 皿 白磁：IX・枢府・ 青白：枢府系・合子・梅瓶 青花(明) 陶器：甕・盤・壺・鉢	15c前～中	14c前～中
30	博多区42次 1面下	福岡県福岡市博多区 網場町8-25	都市	白地鉄絵壺 龍泉：盤(元末明) 青花(明)		
	1面	〃		翡翠釉紅皿▲ (大内館跡出土品と同じ)		明

表9-2　磁州窯系製品出土一覧表

	2面下	〃		翡翠釉鉄絵壺	15～16C	14c前～中
31	祇園駅出入口 2・3区 SE067	福岡県福岡市博多区 祇園町	都市	白釉鉄絵鉢? (可能性うすい?) 龍泉 白磁：IX 青白 陶器：天目		
32	築港線III IV面10号溝	福岡県福岡市博多区 上呉服町1	都市	青磁鉄絵? (高麗の可能性あり) 龍泉：碗・香炉・盤・小坏 白磁：枢府・IX 青白：枢府系・合子・瓶 青花(明) 陶器：壺・鉢・天目	14c後半	
	大宰府太宰府 天満宮 表土	福岡県太宰府市 宰府4丁目	寺社	翡翠釉鉄絵壺		14c前～中
	条坊140次 S-213	福岡県太宰府市観世音寺	居館	白地鉄絵壺 龍泉 白磁	14c～15c前	14c前～中
3	原4次　S-120	福岡県太宰府市三条 福岡県久留米市 御井町字二本木	寺院	緑釉鉄絵瓶▲ 緑釉練上網代碗 (文献17)	13c代	
33	英彦山修験遺 遺跡			緑釉鉄絵文瓶 (こんぴら山やぐら出土のものと同。報告者は"泉州"産とする。朝鮮産の可能性もあり)		13c
34	大内氏館跡1 次13号石組	山口県山口市大字大殿 大路	居館	白磁鉄絵枕 龍泉：碗 青花(明) 陶器：天目		(嘉靖期カ 16c前～中)
35	大内氏館跡 4次2号井戸	〃	〃	白磁鉄絵褐彩水注 翡翠釉紅皿▲ 龍泉：碗・皿・盤 白磁：皿 青花(明) 赤絵皿 陶器：天目	16c中頃	14c後～15c
36	草戸千軒町 遺跡　28次 SK1860	広島県福山市草戸町	都市	白地鉄絵壺 龍泉：碗(内底印花)	16c代 (報文中IV期 遺構に属す)	
3	草戸千軒町 遺跡	〃		白地鉄絵壺		14c前
37	平安京 左京四条三坊 遺水堆積土	京都市	都市	白地黒掻落牡丹文壺	12C前半	宋
38	左京二条三坊 十六町	京都市上京区烏丸通 丸太町上ル春日町、 京都御苑	都市	緑釉掻落壺	12c	北宋

表9-3　磁州窯系製品出土一覧表

39	左京二条三坊 十六町 NO.X-7	〃	都市	緑釉壺	13・15c	
40	左京四条一坊 四町	京都市中京区壬生 御所ノ内町2715・16	都市	白地黒掻落牡丹文壺	12c	北宋
41	左京七条三坊 十三町.NO.73	京都市下京区烏丸通下珠 数屋町、橋町、常葉町	都市	白釉壺	13・14c	
42	仁和寺院家跡	京都市	寺院	白地黒掻落壺		北宋
43	鳥羽離宮跡 127次	京都市伏見区竹田内畑町		白地黒掻落牡丹文壺		北宋
44	鞍馬寺経塚	京都市左京区鞍馬本町	経塚	緑釉貼花文壺		12・13c (文献1)
45	平安京 右京六条一坊	京都市	都市	緑釉鉄絵劃花瓶▲ (樹下懸垂鳥)	12c後半	
46	植物園北遺跡 1層	京都市北区上賀茂 竹ヶ鼻町4	都市	緑釉鉄絵劃花瓶▲		
38	西鴻臚館跡	京都市		緑釉鉄絵劃花瓶▲		
49	若宮大路 周辺遺跡群 かわらけ溜り 3・4・5	神奈川県鎌倉市雪ノ下 1-210	都市	白地鉄絵麒麟文壺	14c中頃	元
50	諏訪東遺跡 第4溝	神奈川県鎌倉市御成町 806-5	居館	白地鉄絵草花文瓶▲ 陶器：天目	14c中頃	12c～13c?
51	(推定)藤内定 員邸跡 土壙覆土	神奈川県鎌倉市小町 1-891	居館	白地鉄絵鉢▲	13・14c	
52	千葉地東遺跡 河川3砂層	神奈川県鎌倉市御成町 12-18	居館	白地鉄絵掻落瓶▲ 龍泉：碗(大I～III) 白磁：IX・印花文皿・碗 水注 青白：合子・梅瓶・水注 陶器：盤	12～14c	12c
53	千葉地遺跡 3面	神奈川県鎌倉市御成町 15-5	都市	白地鉄絵壺	14c前半	13c
18	浄明寺稲荷 小路3面土壙	神奈川県鎌倉市浄明寺	都市	白地鉄絵壺▲ (報告者は“吉州”とする)	14c前半	
54	向荏柄遺跡	神奈川県鎌倉市	都市	白地鉄絵▲		
55	こんぴら山 やぐら群	神奈川県逗子市池子	古墓	緑釉鉄絵壺▲ (文献1)	13・14c	13c
56	東京大学 本郷構内遺跡 遺構100	東京都文京区本郷7丁目	武家屋敷	白地鉄絵劃花壺		17c後半 (文献16)
57	吉田川西遺跡	長野県塩尻市広丘吉田	集落	瓶	10～17c	
58	末森城跡	石川県羽咋市押水町 字南吉田末森	城郭	翡翠釉白地鉄絵瓶	15・16c	
59	普正寺遺跡	石川県				
60	柳之御所跡20 次3層	岩手県西磐井郡平泉町 平泉字柳之御所	居館	白地鉄絵牡丹文合子	12～16c	13c
61	柳之御所跡 28次			白地鉄絵瓶 緑釉盤・瓶		14c 12c代

鶴壁集瓷窯（1964年）

第1段

（東区8層）

＝唐末

白釉→黄→黒
・白釉緑彩少
碗→注子

碗（白釉）

I式

輪高台　全釉
19.2×6.5

II式

輪高台　半釉
15.5×8.2

III式

輪高台　内面鉄絵
（菊花文）12×4

盂（数量少）

影青釉

11.5×8.5

豆

上・白釉、下・黒釉
平底　11.3×5.2

罐

白釉
黒釉

I式

白釉

13.5×17.7

輪高台　8×19

盂

I式

黒釉・輪高台
2.8×25.5

II式

注子　黄釉、黒釉

I式

白釉（緑彩）

II式

白釉　6.5×17.5

窯具

ロウト型厘鉢
支盤

窯柱
餅盤

第26図　磁州窯出土遺物分類 1

第2段

(東区5-7層)

＝五代

釉色白釉多い

碗 (数量少)

このタイプは少ない

白釉・黒釉(少)あり　口径12.3
八層出土のⅡ式碗と相似の物が多い

瓷臼?

輪高台、下部黒釉

注子

輪高台、白釉
7×26

6×18.5

第一段に比べ胴部が
大きくなる

窯具

厘鉢

窯柱

支塾

圏塾

第3段

(東区4層)

＝

北宋早期

器種　少い
作りは雑
釉色は第二段
と同じ

碗

小輪高台、白釉　13×3.7

豆形器

黒釉　11×6

窯具

厘鉢

第27図　磁州窯出土遺物分類 2

第4段

(東区4層)

＝

北宋早期

白釉碗－最多
↓
白釉盆、蓋、罐

白釉が多いが
青釉碗と盤は、
この時期の主要品

装飾～彩絵、劃花
姓、吉祥語入開始

碗

Ⅰ式

白釉

Ⅱ式

豆青釉色釉 劃花文

Ⅲ式

劃花文 白釉

"天下太平・刘" 22.4×9.5

23.5×9

器底に5ヶ所細長の目跡あり

罐

鉢

21×5

Ⅳ式

輪高台－高 12×5

黒花彩
輪高台 5×11

輪高台－棕色釉 14×8

盆

盤

蓋

青釉 9.3×2
内底に5ヶ所細長の目跡

Ⅰ式

白釉 16×4

Ⅱ式

白釉 7.3×3

亀

窯具

輪高台 青釉 18×6.8

緑釉 玩具

匣鉢Ⅱ式（欠損）

第28図　磁州窯出土遺物分類 3

第5段

(東区1・2層)

(西区2層)

＝

北宋早期

技術的水準ー高い

釉ー白.黒.藍の他
黄色.粉色釉が出現

器形ー多

装飾ー彩絵.刻花.
掻き落し.
印花

碗

Ⅰ式

Ⅱ式

Ⅲ式
直口　厚唇
輪高台 11×3

輪高台 13×5.7
外～白釉　内～豆緑色釉

劃花文22×7.5　半釉　輪高台　白釉

盤

Ⅰ式

Ⅱ式

内底～細長の目跡5ヶ所
13.8×2.5

器壁～薄　白釉　印花　15.8×2.4

盆

Ⅰ式

内～黄金色釉
劃花文　外面～黒釉

42×9.8

彩絵

内～白釉 48×11.5
外～黒釉

Ⅱ式

黒彩絵

黒彩絵　28×6
内～白釉　外～黒釉

瓶

Ⅰ式

黒彩絵
4×2

Ⅱ式

乳白色
5×25.5

Ⅲ式

掻き落し　10×7.5+α

第28図　磁州窯出土遺物分類 4

第5段

(東区1・2層)
(西区2層)

＝
北宋早期

壺

黒釉　7×9.5

炉

6×11.4

枕

Ⅰ式

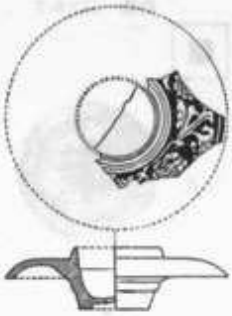
Ⅱ式

灯

Ⅰ式

Ⅱ式

Ⅲ式

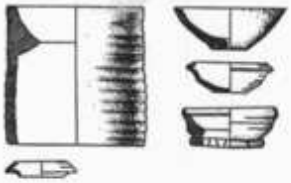


白釉、黒彩絵

器托

玩具

窯具



第30図　磁州窯出土遺物分類 5

第6段

(西区1層)

=元初期

藍釉-主
↓
黒釉

白釉-減少

碗

I式

II式

III式

藍釉 10×6.7

藍釉 13×67

輪高台、褐色鉄絵 上半～内は白釉
下半は褐紅色釉 11×4.5

盤

I式

II式

III式

輪高台（目跡あり）
13.8×2.5

輪高台、豆緑色釉
16×3.5

褐彩絵、短輪高台 20×3.5
外-黒釉、内-白釉

杯

罐 (少ない)

罐

器蓋

黄色釉、輪高台h38

底部未釉
輪高台、褐色釉
15×7.7

乳白色
5 ×25.5

窯具

I式

II式

III式

白色釉、彩絵 11×9

厘鉢多い

支墊

第31図　磁州窯出土遺物分類 6

鶴壁集瓷窯（1978年）

第1期

（第4層）

＝

北宋中～晚期

青釉　碗、盤
↓
白釉
↓
黒釉（少）

盤

I式　II式　III式　IV式　V式　VI式

深腹
輪高台
豆青釉

淡黄釉

豆青釉　19.6×6

花輪、豆青釉　23×9

1963 第四段III式
白釉　20×7.5

黒釉　11×4

碗

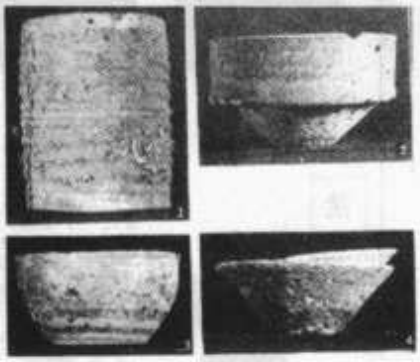
I式

内底に五ヶ所目跡
豆青釉　16.5×7

II式

醤釉　15×4

窯具



第2期

（第3層）

＝

北宋晚期～金

白釉・黒釉多

刻花・劃花
絵花

碗・盤多

1期になかった瓶・壺・盃・鉢が出土

碗

I式　II式　III式　IV式

印花・口禿
白釉（満釉）
7.8×3.8

白釉（満釉）・口禿
7.8×3.8

白釉、劃花文　10～21×3.8～6.8

白釉、劃花文　6.9～18.2×3.2～8.5

V式　VI式　VII式　VIII式

白釉、彩絵
7.5～18.4×3.7～7

印花・口禿・白釉（満釉）
16.2×4

白釉（高台露胎）
9.6×4.3

黒釉
10.5×3.6

第32図　磁州窯出土遺物分類 7

第2期

(第3層)

＝

北宋晚期～金

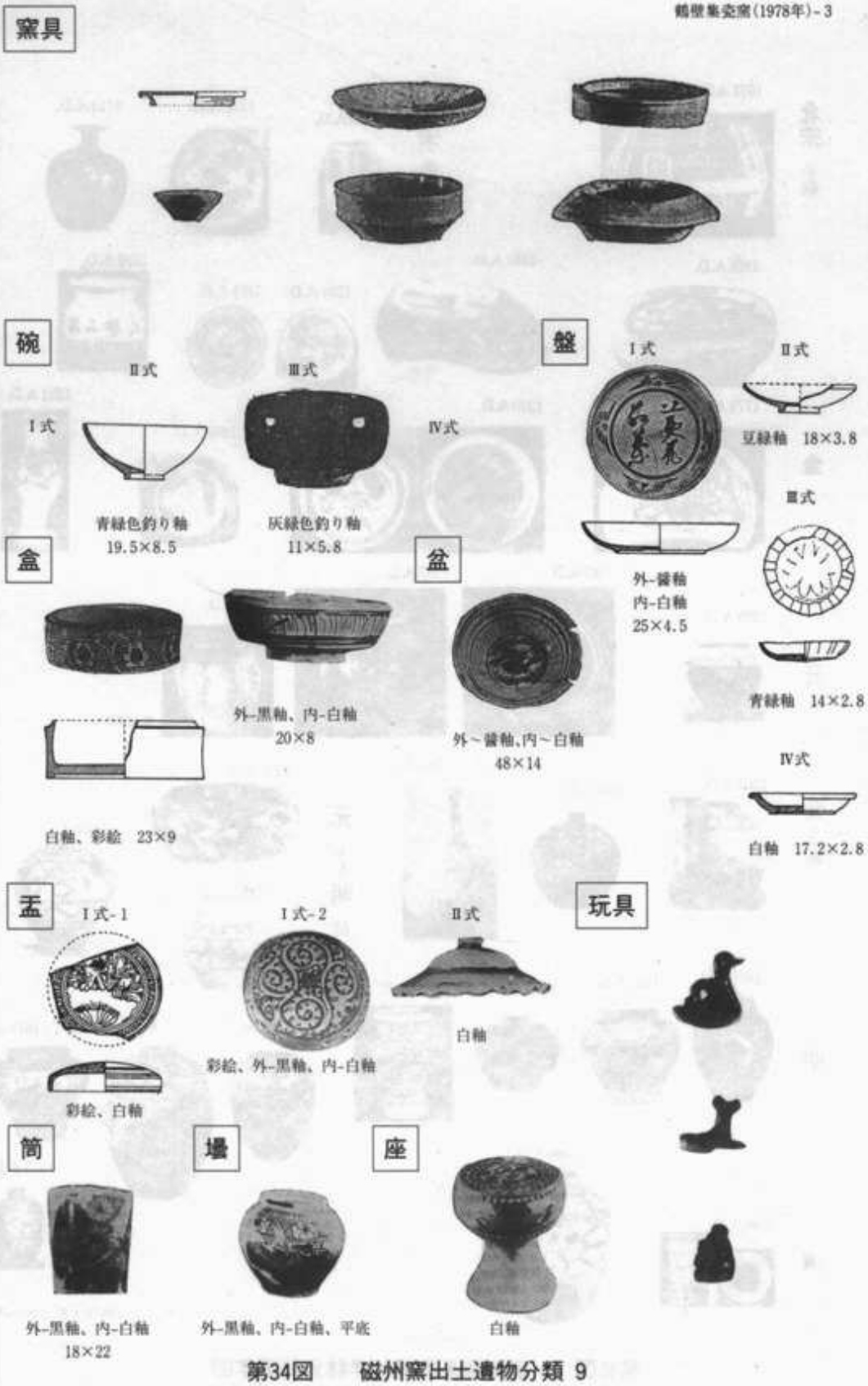
第33図　磁州窯出土遺物分類 8

第3段
(第1-2層)
二元

黒釉、醤釉、青釉が前記と比べ増加

絵花装飾

磁県南関河村元代木船出土品と相似



第34図　磁州窯出土遺物分類 9

第35図　磁州窯系陶器紀年銘資料編年図

第１次調査出土平・丸瓦の整理

１．はじめに

太宰府天満宮第１次調査の報告はすでに刊行（森田勉・山本信夫・狭川真一『太宰府天満宮』1988年　太宰府天満宮）しているが、その折りに報告できなかった丸瓦、平瓦について、ある程度の整理ができたためこの場を借りて報告することとする。

報告する資料は、第１次調査で出土した瓦群で、表面に叩き目の文様を残す資料を文様の種類別に抽出し、以下に簡単な分類を行って報告するものである。そのうち整地層出土の資料については破片の数量を数え、一覧表として提示した。この整地層出土の一群は、同時に出土した土器の年代観から12世紀中頃以前という時期が考えられる。第１次調査の報告でも述べたように、研究の遅れている平安時代から鎌倉時代の瓦の編年を行ううえで、１時点での資料ながら年代が押さえられるという点で有効な一群と考えている。

ここから出土した軒瓦と文字瓦はすでに報告したが、平瓦、丸瓦についてはまったくの手つかず状態であった。しかしながら、整地層出土ではない軒瓦に伴うとみられる平瓦、丸瓦が整地層中に存在していたことから、これら整地層出土の平瓦、丸瓦を整理することで、いくつかの軒瓦が整地層に帰属させることができるのではないかと思われた。また、瓦の凸面にみられるいわゆる叩き目文様は、これまで詳細に検討されたこともなく、それ自体の帰属する年代もほとんど不明といった状態であった。そこで年代的に１点の押さえられる資料であることもあり、こうした資料の蓄積が将来の瓦の研究にわずかながらでも寄与できるのではないかと考え、ここに整理を行った次第である。

しかしながら、ここで報告する資料は遺構面が近世以降の撹乱でかなり荒らされていたことや調査区の壁に密着した位置に整地が存在していたことなどから、調査中に新しい時期の遺物が混じり込んでいる可能性が全くないとは言えない。それらは何らかの形で将来再検討されるべきであるが、表10に示した出土量をみると多量に出土しているものは混入資料とする心配はほとんどないものの、微量しか出土していないものについては、再検討されるべき資料として捉え、若干の注意を払っておきたい。なお、表10において合計数量が０となっているものは、第１次調査で出土しているものの、整地層からは出土していないことを示している。

２．第１次調査出土軒瓦等の概要

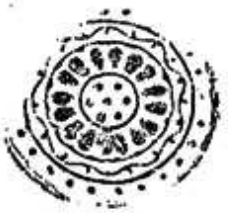
軒丸瓦（第36図）

全出土数は98点であったが、そのうち整地層（1SX010を含む）出土のものは30点であった。出土資料は単弁八葉蓮華文、複弁八葉蓮華文などが主体を占めているが、小量ながら外区に剣頭文を巡らせた巴文のものや、文様は明確ではないが草花文をあしらっていると思われるもの

軒丸瓦

I−1

I−2


II−1

II−2−a

I−3

I−4

II−2−b

III−1

III−3

IV−1

IV−2

V−1

VII

軒平瓦

I−1

I−2

I−3

I−4

I−5

II

III

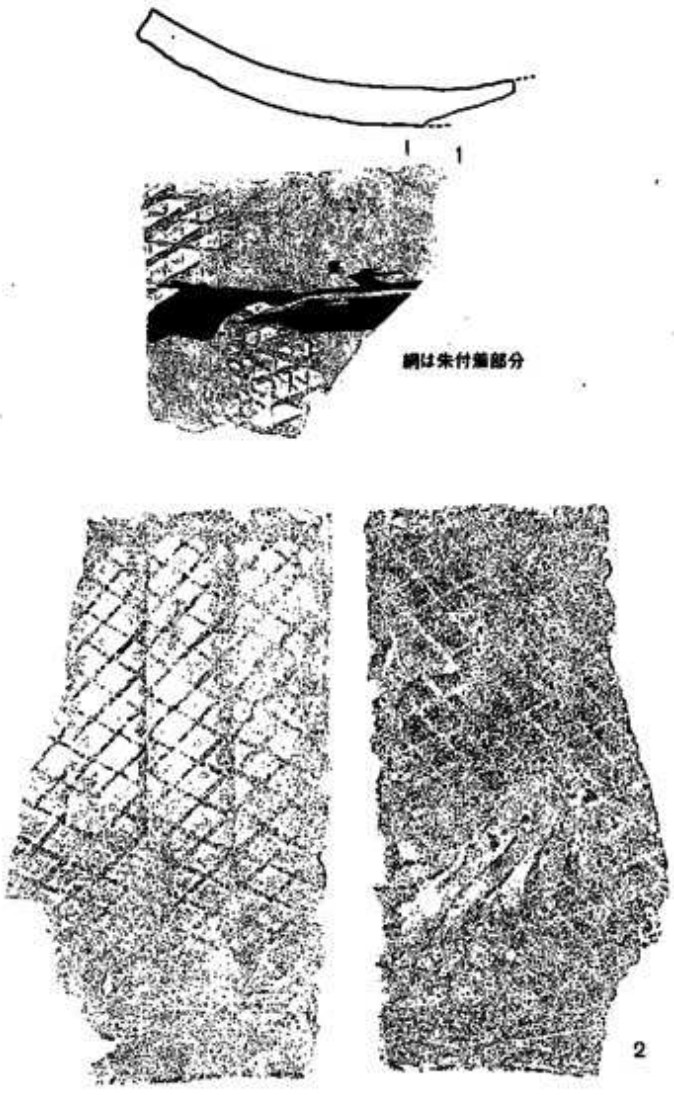
IV

VII

XI

第36図　第1次調査出土軒瓦抜粋（1／6）

などを含んでいる。このうち量的に多い資料は、Ⅰ-1類とした単弁八葉蓮華文が7点、Ⅱ-1類とした複弁八葉蓮華文が8点で、両者を合わせると整地層出土軒丸瓦の50%になる。いずれかが、あるいは両方が創建のものであろう。また、草花文とみている資料（Ⅷ類）は1点のみの出土であり、整地層に帰属させて年代の一端を考えることにやや不安な要素もあったが、これと同時に使用されていたと考えられる丸瓦が今回の整理で整地層出土と判明した（後述）。



第37図　第1次調査出土の平瓦（1／4）

軒平瓦（第36図）

全出土数は91点であったが、そのうち整地層（1SX010を含む）出土のものは27点であった。出土資料は扁行唐草文、均正唐草文などが主体を占めているが、小量ながら剣頭文を配したものを含んでいる。このうち量的に多い資料は、Ⅰ-3類とした扁行唐草文が15点で整地層出土軒平瓦の56%にあたる。創建時のものであろう。

文字瓦

全出土点数は500点であったが、そのうち整地層（1SX010を含む）出土のものは298点であった。なかでもⅣ-2-a類とした「安楽寺」と記載するもののひとつは223点が出土しており、整地層出土文字瓦の75%にあたる。他に、「平井」「佐」「筑」などが整地層から出土している。

その他（第37図）

1は、出土した平瓦中で1点のみ凸面の一部に朱が付着している資料である。桶巻作りの平

表10　第1次調査出土平瓦・丸瓦出土数一覧

分類番号	平瓦						丸瓦						破片合計	備考
	隅1/4残	隅1/2残	側面残	小口面残	隅部無し	小計	隅1/4残	隅1/2残	側面残	小口面残	隅部無し	小計		
格I-A-1 (b)	9	0	8	3	13	33	0	0	0	0	0	0	33	
格I-A-2	1	0	1	2	0	4	0	0	0	0	0	0	4	
格I-A-3 (b)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-A-4 (b)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-B-1-a	98	0	204	108	259	669	10	0	10	5	22	47	716	
格I-B-1-b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-B-2	1	0	3	2	5	11	7	0	12	2	4	25	36	
格I-B-3	4	0	3	1	4	12	3	0	7	2	9	21	33	
格I-B-4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-B-5	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
格I-C-1	8	0	9	6	9	32	5	2	9	0	5	21	53	
格I-C-2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-3	18	0	12	2	15	47	2	0	7	0	4	13	60	
格I-C-4	2	0	2	2	2	8	2	1	2	0	2	7	15	
格I-C-5	5	0	5	4	3	17	2	2	4	0	3	11	28	
格I-C-5′	0	0	1	0	1	2	1	0	1	0	1	3	5	
格I-C-6	22	0	18	15	22	77	16	0	20	3	23	62	139	
格I-C-7	2	0	2	1	2	7	3	0	1	3	5	12	19	
格I-C-8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-9	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
格I-C-10	15	0	16	9	10	50	15	2	24	3	12	56	106	
格I-C-11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
格I-C-12	10	0	5	2	7	24	4	0	7	3	5	19	43	
格I-C-12′	7	0	8	7	5	27	6	0	12	0	7	25	52	
格I-C-13	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
格I-C-14	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
格I-C-15	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	2	2	4	
格I-C-16	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	4	4	
格I-C-17	2	0	2	2	1	7	0	0	0	0	1	1	8	
格I-C-18	1	0	2	4	6	13	1	0	0	1	2	4	17	
格I-C-19	1	0	2	2	1	6	0	0	0	0	0	0	6	
格I-C-20	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
格I-C-21	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
格I-C-22	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
格I-C-23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-26	5	0	4	0	1	10	0	0	0	1	3	4	14	
格I-C-27 (b)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-28 (b)	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	
格I-C-29 (b)	6	0	7	4	6	23	2	0	1	1	0	4	27	
格I-C-30 (b)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格I-C-31 (b)	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	2	
格I-C-32 (b)	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
格I-C-33 (b)	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
格I-C-34 (′)	8	0	27	10	20	65	2	0	4	2	4	12	77	
格I-C-35	1	0	3	0	2	6	1	0	0	1	0	2	8	
格II-A-1	31	1	45	25	64	166	19	3	39	6	39	106	272	
格II-A-2 (b)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格II-B-1	3	0	8	4	7	22	0	0	0	0	1	1	23	
格II-C-1	14	0	14	9	16	53	2	0	7	2	4	15	68	
格II-C-2	0	0	0	0	1	1	3	1	9	0	2	15	16	
格II-C-3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
格II-C-4 (b)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし
縄I	6	0	8	6	8	28	2	0	3	0	3	8	36	
縄II	12	0	29	16	29	86	43	1	33	8	15	100	186	
平行	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	整地層出土なし

瓦で小口部分が残存するあまり大きくない資料である。叩き目は以下に報告する格Ⅰ-C-35類である。朱は幅2.0～3.5cmで小口部分から5～8.5cmのあたりに横方向に付着している。こうした朱の付き方は軒平瓦においてしばしば確認されるところであるが、軒平瓦と同様の結果として付着したならば、文様を持たないながらも軒先に使用されたことが窺える。

2は同じ桶巻作りの平瓦であるが、分割後に重ねて置かれていたことが窺える資料である。平瓦凹面に凸面の叩き目が写ったもので、乾燥に至る作業過程の一端が窺える資料である。

3.今回整理した資料の概要

平瓦、丸瓦の識別は表10において行っているので、ここでは瓦の凸面にみられるいわゆる叩き目痕跡の形状を簡単に分類し、それに従って個々に解説を行ってゆきたい。

分類は以下の要領でおこなったが、あくまでも今回の報告を簡素化することが目的であり、この分類に歴史性はあまり反映されているとはいえない。また安楽寺跡に関する資料のみでもあり、将来的には大宰府跡、観世音寺、筑前国分寺といった地点から出土しているものも含めて詳細な検討のうえ分類を行うべきであることはいうまでもない。

さて、いわゆる叩き目は大きく縄目と格子目（一部平行目）に分けられる。以下に表10を参照しつつ個々の概要を記述する。

格子目瓦

格子目は出土資料の大半をしめているとともに、かなりの種類が混在している。これらをまず格子目が単線で表現されたものを格Ⅰとし、二重線で表現されたものを格Ⅱとして分けることとする。絶対量は圧倒的に格Ⅰが多い（整地層出土中の割合は格子目が71.7%）。次に中分類として、格子の角度で分けることとする。交差する地点の角度が直角のもの、つまり正方形または長方形を呈するもの…A、縦長の菱形ないしは平行四辺形状を呈するもの…B、横長の菱形ないしは平行四辺形状を呈するもの…C、の3種に分けられる。これも細かく見るとAでは正方形と長方形のものがあり両者は別の分類として扱うことができるであろうし、BやCでは菱形の対角線が交差する角度で、3種程度に分類が可能である（この場合、角度の違いで見た目が右上がりあるいは左上がりの斜格子目となる）。しかし、1種の叩き目全体をみた場合、場所によってそのどちらとも捉えることができる資料がかなりあり、この視点での分類は同一の個体でありながら部位の違いによってまったく異なった分類となってしまう可能性が高いため今回は採り上げず、必要に応じて文中に記載した（対角線によって形成される第Ⅰ象現の位置の角度が90°のものをア、90°より小さいものをイ、90°より大きいものをウと仮称する）。ただしA～Cに分けたものについてもこの問題で若干不安な要素を残すものもある。

以上の条件で今回は簡単に分類し、中分類以下は数字で表現した。数字で示されるものは単なる分類のバリエイションで特別な意味は持たせていない。これは資料の全貌が明らかなもの

が少ないことに起因し、同一個体を別に分類している可能性もここでは否定できないことから、ここではこれ以上の分類作業は諦めた（因みに該当する資料中に四隅が完存するもの0点、1/2以上の隅部を残すものは丸平合わせても13点で、全体の0.6%にすぎない）。

最後に補足分類として、格子目中に文様（十字文や＊印風のもの）をあしらうものをbとし、同一の格子目で文様のないものはaで表現した。ただし、文様が明らかに追刻の場合のみこれを使用し、文様をもつ資料は判明しているが、それと同一格子目で文様を持たないものが判明していない場合は（b）で表現した。この場合、原形が文様をあしらった資料であることも充分考えられるところである。

また、追刻は文様だけでなく格子目に縦方向の線を追加したものや格子目に平行して線を加えたものが存在する。これに関しては′で表記した。（′）としたものは上記した（b）と同じ意味であると理解されたい。

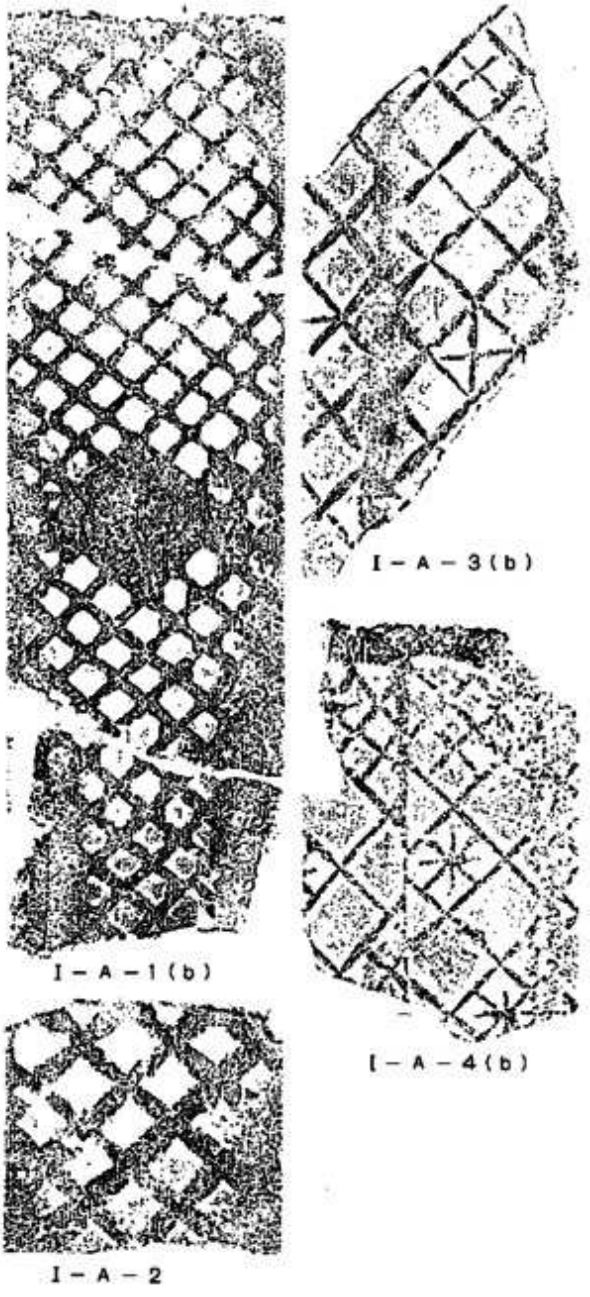
なお文中に記載する数値は、格子目交点中心を結んだ対角線の長さで、縦×横で表記した。

以上の視点にたって以下に個々の概要を報告したい（第36～42図）。

格Ⅰ－A－1(b)　ほぼ正格子で、線は太めである。中程の9枡をつぶして菱形の文様を刻出する。格子目は1.2×1.4cm前後でほぼ整っている。叩き板の幅は約7cm。連続する叩き板の継ぎ目は丁寧に格子が連続するような配慮が認められる。

格Ⅰ－A－2　正格子で、線は太い。2.0×2.0cm。出土量はかなり少ない。

格Ⅰ－A－3(b)　全容は不明だ



第38図　格子目瓦Ⅰ－A類拓影（1／2）

が格子目の一部に「+」文と「×」文を縦位置に配置する。2.4×2.4cm。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－A－4(b)　格子目の随所に「×」文と「＊」文を配置する。2.6×2.7cm。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－B－1－a　縦長の格子で、2.0×1.6cm内外。ほぼ均整がとれている。格子目の空間には木目が縦方向に走っており、素材が木であったことを窺わせる。整地層出土資料中最も多く出土しており、その量は33.7%にものぼる。

格Ⅰ－B－1－b　形状からみて文様は追刻と判断した。文様は「+」文を上方にひとつ配し、中程に「×」「＊」を連続して配置する。整地層からの出土はない。

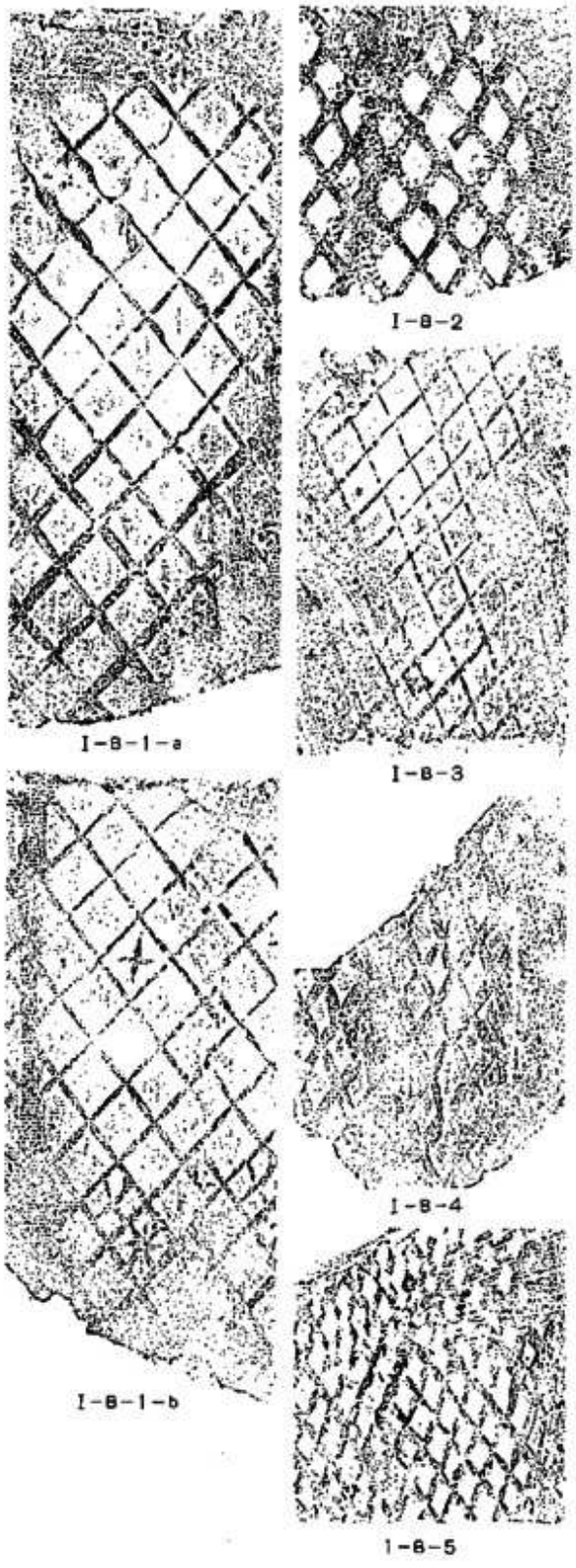
格Ⅰ－B－2　線は太めながら格子目は整っている。1.7×1.3cm。

格Ⅰ－B－3　かなり細い線で表現され、部分的にゆがみがあるが整っているほうである。1.6×1.1cmで、イ類。

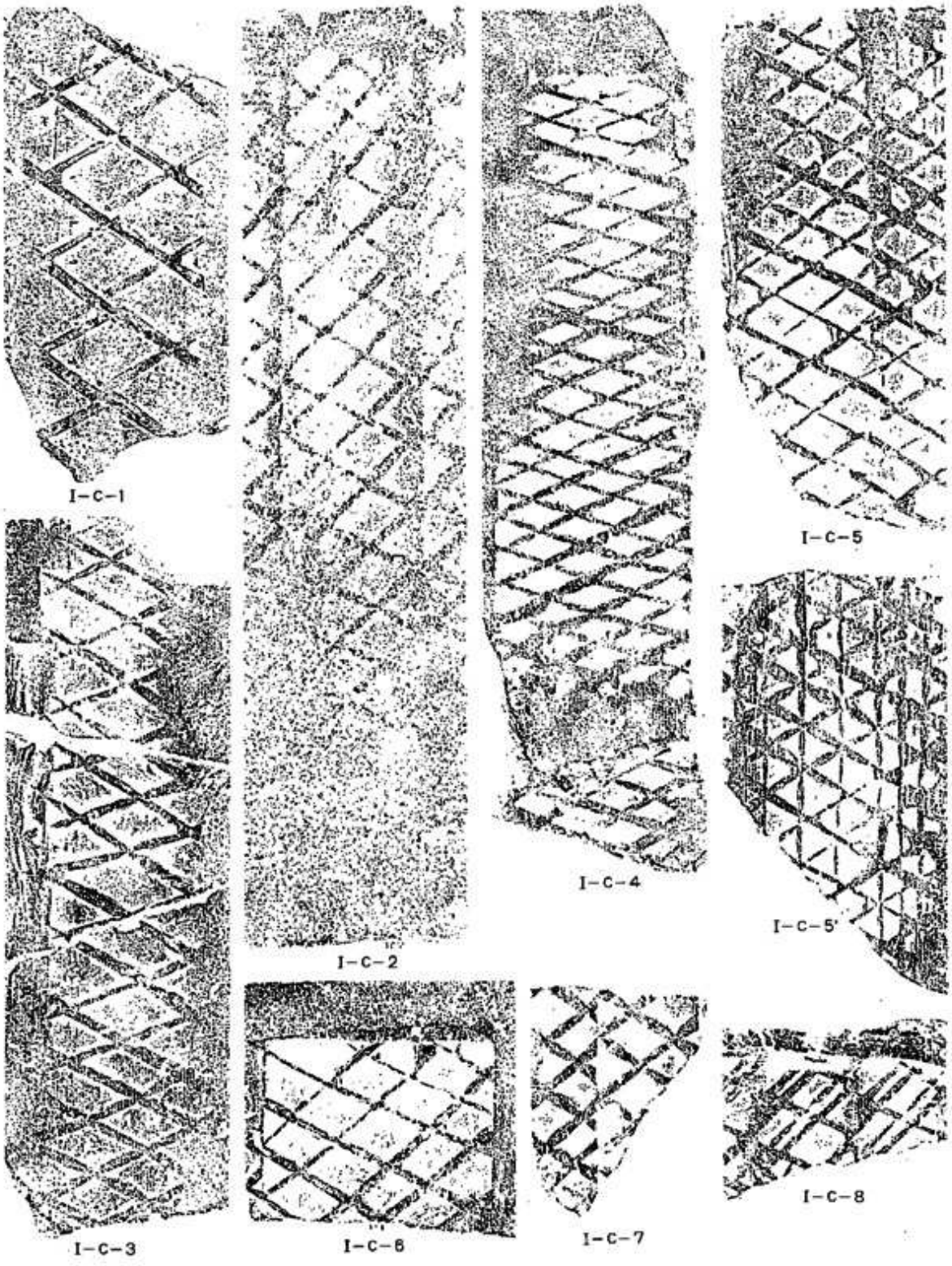
格Ⅰ－B－4　線は押しつぶされたようになっている。1.7×1.0cm。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－B－5　細かめの格子で1.2×0.7cm。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－1　大きめの斜格子で、2.7×3.9cm内外。ただし提示した資料はちょうど叩き目どうしが重なった部分であり、全容を示す資料で



第39図　格子目瓦　Ⅰ－B類拓影（1／2）



第40図　格子目瓦 Ⅰ－C 類拓影 (1) (1／2)

はない。ウ類。

格Ⅰ－C－2　右斜め上がりにみえる斜格子目で、一部不揃いな部分はあるが整っているほうの資料である。2.0×2.4cmでイ類。叩き板の幅は約4cm。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－3　大きめで不規則な斜格子目で、2.0×3.4cm。ウ類。

格Ⅰ－C－4　押しつぶされたような斜格子目で、目は細かめである。1.4×2.3cmでイ類。

格Ⅰ－C－5　線の太さにばらつきはあるが、ほぼ整った斜格子目である。素材に線を刻む際、格子の交点付近の材が木目に沿って同時に剥離したらしく、三角形状に塗りつぶされたように見える部分がある。1.4×2.3cmで、ア類。

格Ⅰ－C－5′　残存する資料で完全に重なる資料は見いだせないが、前記資料に縦線を加えたものと判断した。縦線は格子目の交点を通過するように刻まれている。その際に前記の剥離部分は増加しているようである。出土量は少ない。

格Ⅰ－C－6　格子目は不揃いである。1.9×2.9cmで、イ類。整地層出土資料中の6.6%をしめ、4番目に多い出土量である。

格Ⅰ－C－7　小片のため全容は知れない。1.6×2.3cmでウ類。

格Ⅰ－C－8　右上がりの線は2本で一対になっているが、それに交差する線は単線である。ここでは単線のバリエイションとみてここに分けた。1.5×2.1cmでイ類。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－9　太めの線で表現される。1.5×2.0cmでイ類。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－10　1.4×2.0cmで、ウ類。整地層出土資料中の5.0%をしめ、5番目に多い出土量である。

格Ⅰ－C－11　小片の資料で全容は不明。線の間隔および角度ともに不規則な資料。1.7×2.2cm前後で、イ類。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－12　格子は長方形ながら大きさは2.4～3.0×2.8～3.1cm前後とやや不揃い。ウ類。

格Ⅰ－C－12′　C－12に右上がりの斜線を1本追刻したものと判断した。小片資料で全容は明らかではないが、将来完全な資料の発見で、格Ⅰ－C－12と格Ⅰ－C－12′は同一のものと判断される可能性が強い。なお、この2者が同一のものであれば合計出土数は95点となり、整地層出土資料中の4.5%をしめることになる。これは6番目に多い出土量である。

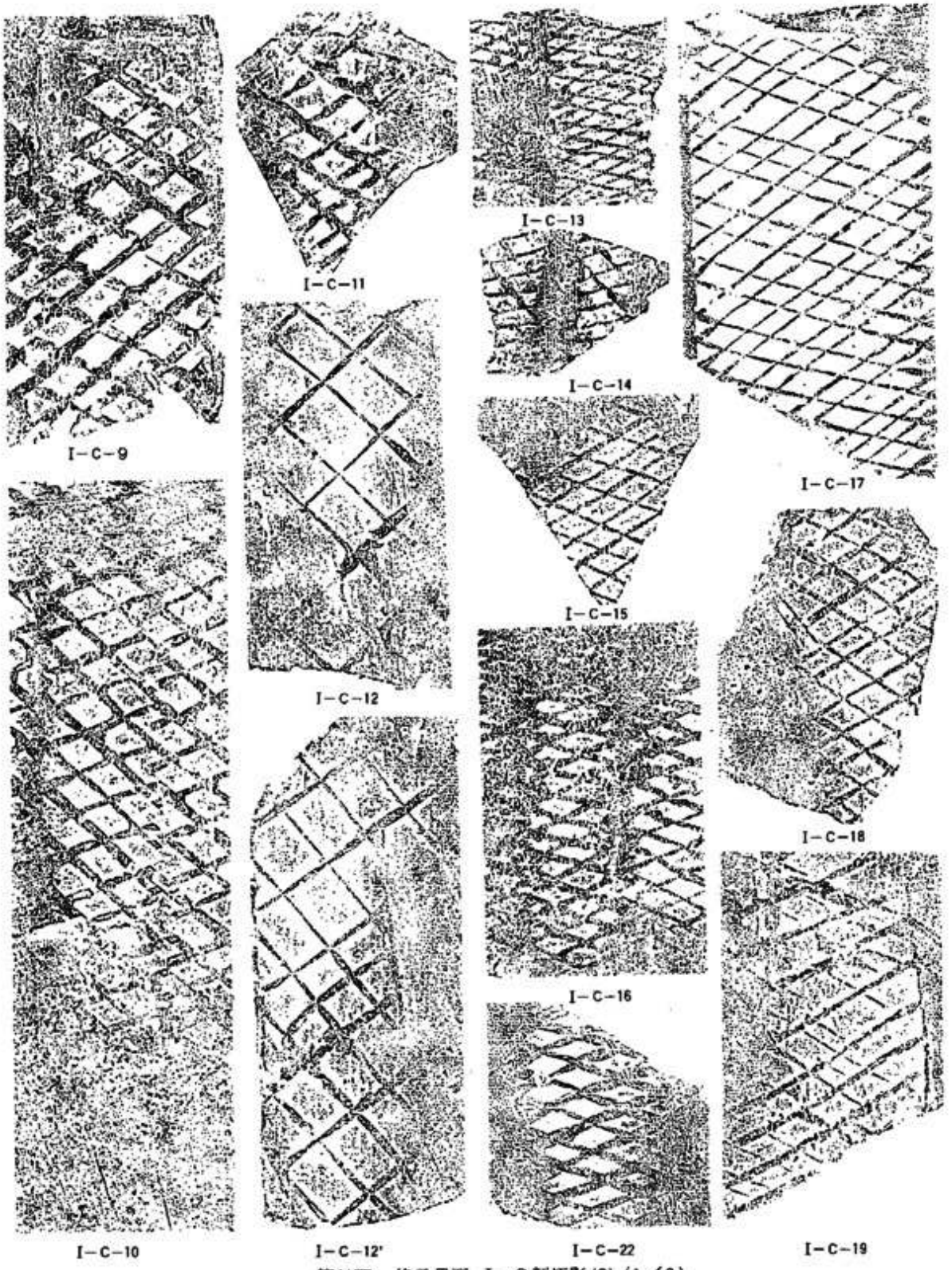
格Ⅰ－C－13　線も細く、細かな格子目。0.4×1.1cmで、イ類。

格Ⅰ－C－14　全容不明。0.7×1.1cmで、イ類。1点のみの出土である。

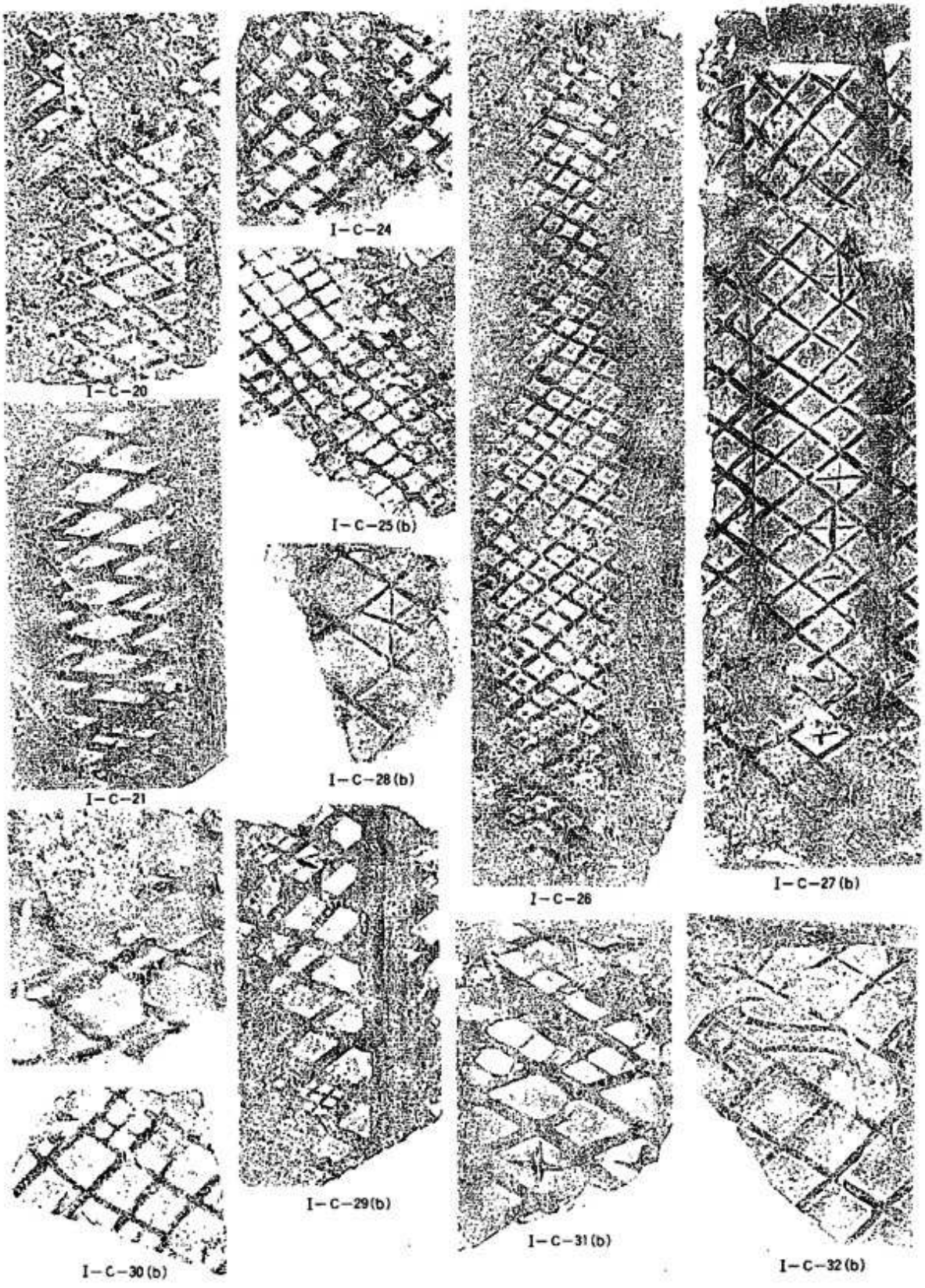
格Ⅰ－C－15　全容不明。0.8×1.7cmで、イ類。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－16　重ね目の擦り消しが著しく、全容は定かでない。0.9×2.0cmで、イ類。

格Ⅰ－C－17　一見二重格子目ともとれるが、ここでは単線のやや不規則なものとして捉えた。0.8～1.4×1.4～1.8cmで、イ類。



第41図　格子目瓦　I－C類拓影(2)（1／2）



第42図　格子目瓦Ⅰ－C類拓影(3)（1／2）

格Ⅰ－C－18　線はほぼ平行するが間隔が不揃いである。1.1～1.3×1.7～2.1cmで、イ類。

格Ⅰ－C－19　かなり不規則な斜格子目で、線の太さも一定しない。1.1×1.7cm内外でイ類。

格Ⅰ－C－20　資料の中程を境に上下で線の太さや角度が異なる。一種類のものか2種類が重複しているのかは現状では判断できない。明瞭な下半部分は、1.1×1.9cm内外で、イ類。1点のみの出土である。

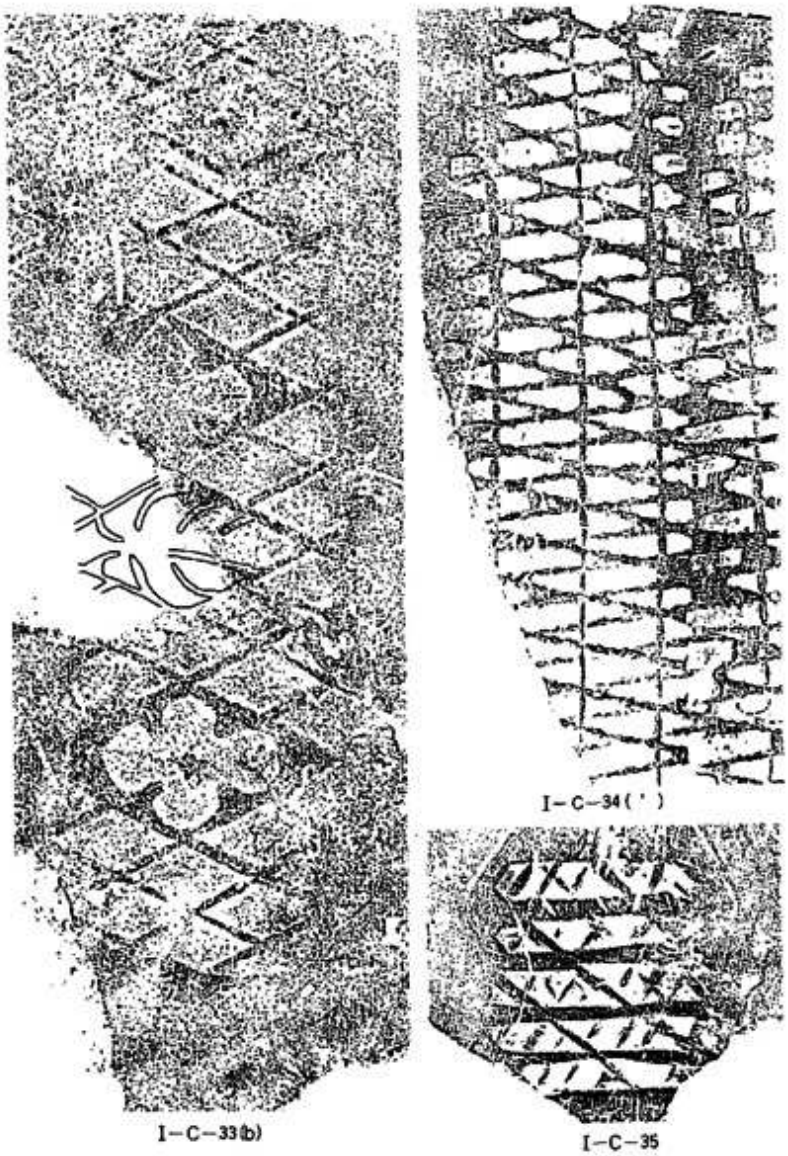
格Ⅰ－C－21　押しつぶされたような斜格子目で、不揃いなものである。線は太め。1.1×2.5cmで、イ類。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－22　押しつぶされたような斜格子目で、線は太い。線の間隔にばらつきがあるためイ類とウ類が混在する。0.8×2.1cm。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－23　大きな格子目であるが全容はわからない。格Ⅰ－C－8のように片方の線が二重になっている可能性が考えられる。ア類か。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－24　正格子に近い形状を呈する。線は格子の大きさに比べ太めである。1.1×1.4cm内外で、ア類。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－25　線が随所でゆがみ、格子目



第43図　格子目瓦　Ⅰ－C類拓影(4)(1／2)

も不規則である。1.1×1.4cm内外で、イ類。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－26　全容が知れる資料である。線はゆがんでおり、格子目も不規則である。0.9×1.2cm内外で、イ類。

格Ⅰ－C－27（b）　全容を知ることができる数少ない資料である。格子目の縦中央列下方に「＋」文を1、中程に「＋」「＋」「－」文、上方に「＋」文を配する。1.5～1.6cm×1.7～2.0cm内外で、イ類ウ類が混在する。叩き板の幅は4.5cm程度、長さ26.0cm程度とみられる。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－28（b）　全容は明らかではないが、一部に「＊」文を入れる。2.5×3.5cmで、ウ類。筑前国分尼寺跡第7次調査検出資料中に同じものが認められる。2点のみの出土である。

格Ⅰ－C－29（b）　不規則で太めの斜格子目で、一部に「×」文と「＃」文がある。1.5×2.2cmで、イ類。

格Ⅰ－C－30（b）　大きめの格子の一部に「×」文がみられる。1.8×2.2cmで、イ類。整地層からの出土はない。

格Ⅰ－C－31（b）　かなり太い線で構成される斜格子目で、「＋」文を入れるところと、升目の一部を彫り込んだもの（拓本では黒く塗りつぶしたようにみえる）が混在する。全容は不明。2.0×3.3cmで、ウ類。2点のみの出土である。

格Ⅰ－C－32（b）　格子目は不規則であるが、叩き板の端部付近の格子目を4升使って水波状の線を2本入れる。この部分に格子の線が出ていないことから、当初から彫られていたものと見られる。2.6×3.3cm内外で、イ類。1点のみの出土である。

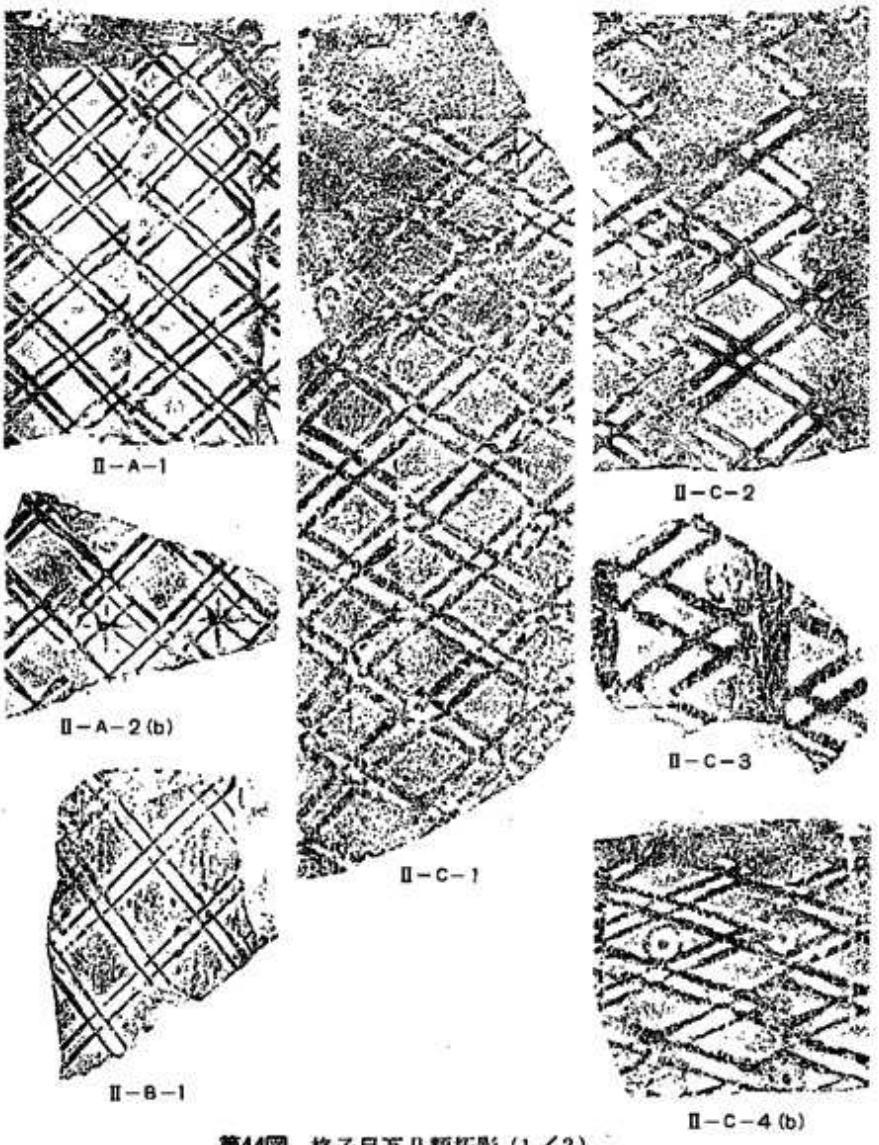
格Ⅰ－C－33（b）　大きめの格子で、格子の規模にばらつきは少ない。升目を4つ利用して、先端の丸い四葉文、先端の尖った四葉文、葉状文、菱形文を配する。2.0×3.6cmでイ類。類例は観世音寺、福岡市有田遺跡群などにみられる。1点のみの出土である。

格Ⅰ－C－34（′）　斜格子目の交点付近を通過する縦線を入れるもので、交点部分での素材の剥離がみられ、三角形に塗りつぶされたようになっている部分がある。格子はかなり整ったものである。1.0×3.4cmで、イ類。出土数は77点と多いほうである。

格Ⅰ－C－35　大きめの格子で構成されるが、副次的な斜線を浅く彫り込んでいる。浅い線は格子1に対して左上がり1本、右上がり3本を基本としているようであるが、位置によって異なっているようである。全容は判明していない。1.3×3.0cmで、イ類。

格Ⅱ－A－1　二重の正格子である。叩き板の幅は約4cm。整地層出土数は272点で、12.8%を占め2番目に多い出土量を示している。別に残る完存資料から、叩き板の幅は3.2cm内外、長さは20.4cm程度であることがわかる。

格Ⅱ－A－2（b）　やや大きめの格子内に「＊」文を配する。全容不明。整地層からの出土はない。



第44図　格子目瓦Ⅱ類拓影（1／2）

格Ⅱ－B－1　やや縦長の格子目で、文字瓦「安」に用いられるものに近似する。ウ類。

格Ⅱ－C－1　やや大きめのものながら、隣り合うものとの重なりは狭い。格子目同士の重ねは格子目がうまく連続するような配慮が見られる。イ類。

格Ⅱ－C－2　やや大きめの格子でC－1よりも格子の大きさにばらつきが目立つ。イ類。

格Ⅱ－C－3　大型の格子目。全容は明らかではない。整地層からの出土はない。

格Ⅱ－C－4(b)　押しつぶされた格子目の一部に「◎」文を配する。整地層からの出土はない。

縄目瓦

縄Ⅰ　叩き方でいくつかに分類できると思われるが、小破片資料が多くここでは分類しなか

った。奈良時代の縄目瓦と思われる。整地層出土総数の1.7%を占めているが安定した出土量とは言えまい。よってこれをもって安楽寺が奈良時代に遡って何らかの建物が存在していたことを示す資料とは言えない。

縄Ⅱ　桶巻作りで、かなり細かな目の縄を用いているが、多くは擦り消されており全容は明らかではない。この縄目を有する瓦は、丸瓦・平瓦ともに灰色を呈し、硬質に焼成されている。また瓦自体の厚さも薄目である。整地層出土数は186点で8.8%を占め、3番目に多い出土量を示している。

平行目瓦

今回の調査では1種類のみ確認した。出土量も少なく小片であるため、詳細は不明である。整地層からの出土はない。

4.まとめ

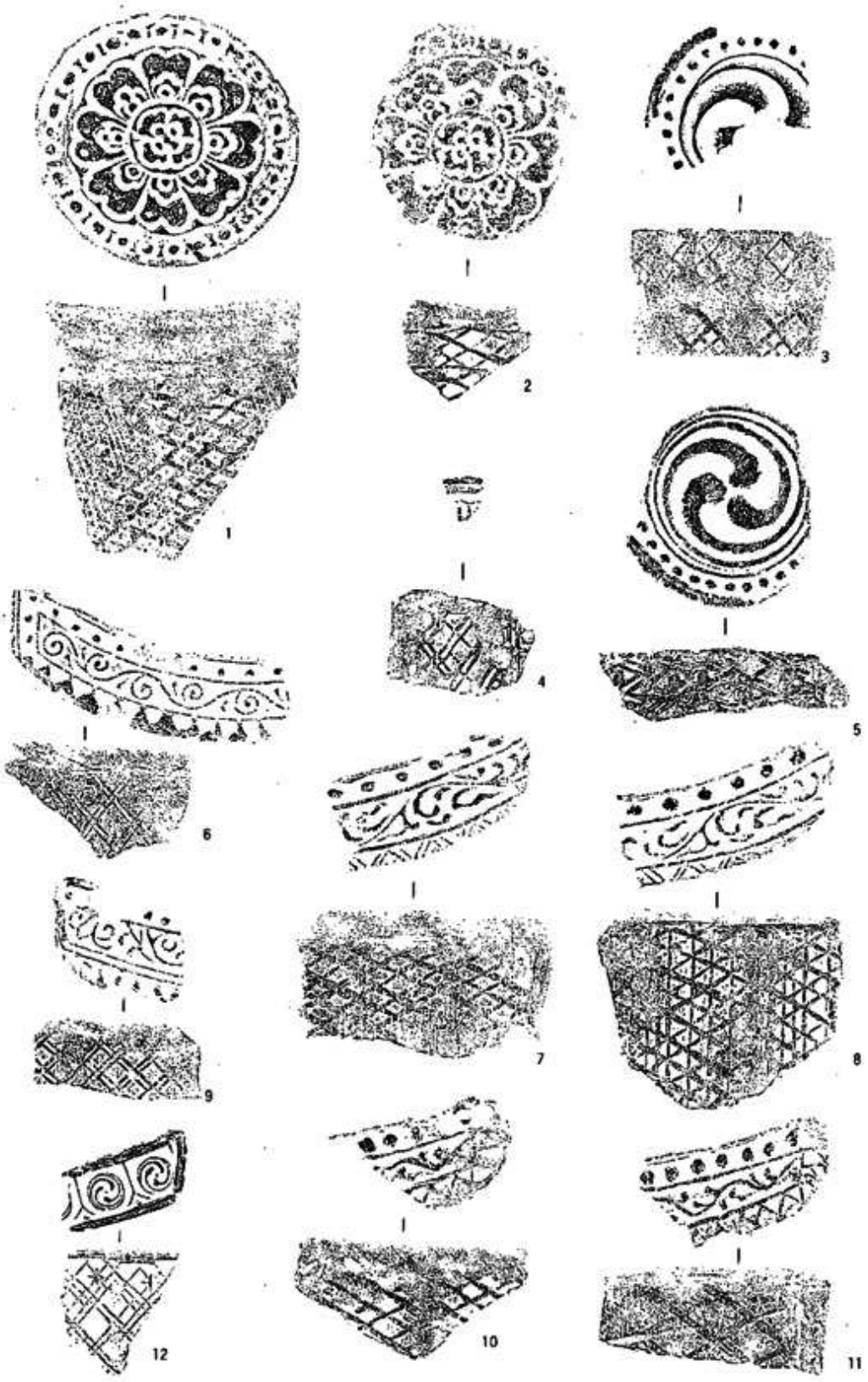
今回の整理作業の結果として気付いたことを簡単に列記し、まとめとしたい。

(1)瓦群の年代

ここに報告した瓦のうち整地層出土としたものは、同時に出土した土器群及び文字瓦に記載された年代（天承二年／1132年）から12世紀中頃以前に使用されていたものとみて間違いなかろう。資料に与えられる年代の上限は、縄Ⅰ資料をどのように解釈するかによって異なってくる。縄Ⅰはこれまでの所見では奈良時代を中心に使用されていたものであり、これが当初からこの場所で使用されていたものであれば、年代の幅は約400年前後になる。しかしその出土量はかなり少なく、未だ利用できる他の地点の瓦を再利用していると解釈すれば、この安楽寺の成立が延喜年間と考えられることを思うと、上限は10世紀前半ということになる。同時に出土している軒瓦の形式を踏まえると、後者の年代幅で考えることが現状では妥当と思われる。

(2)他地点出土瓦との関係

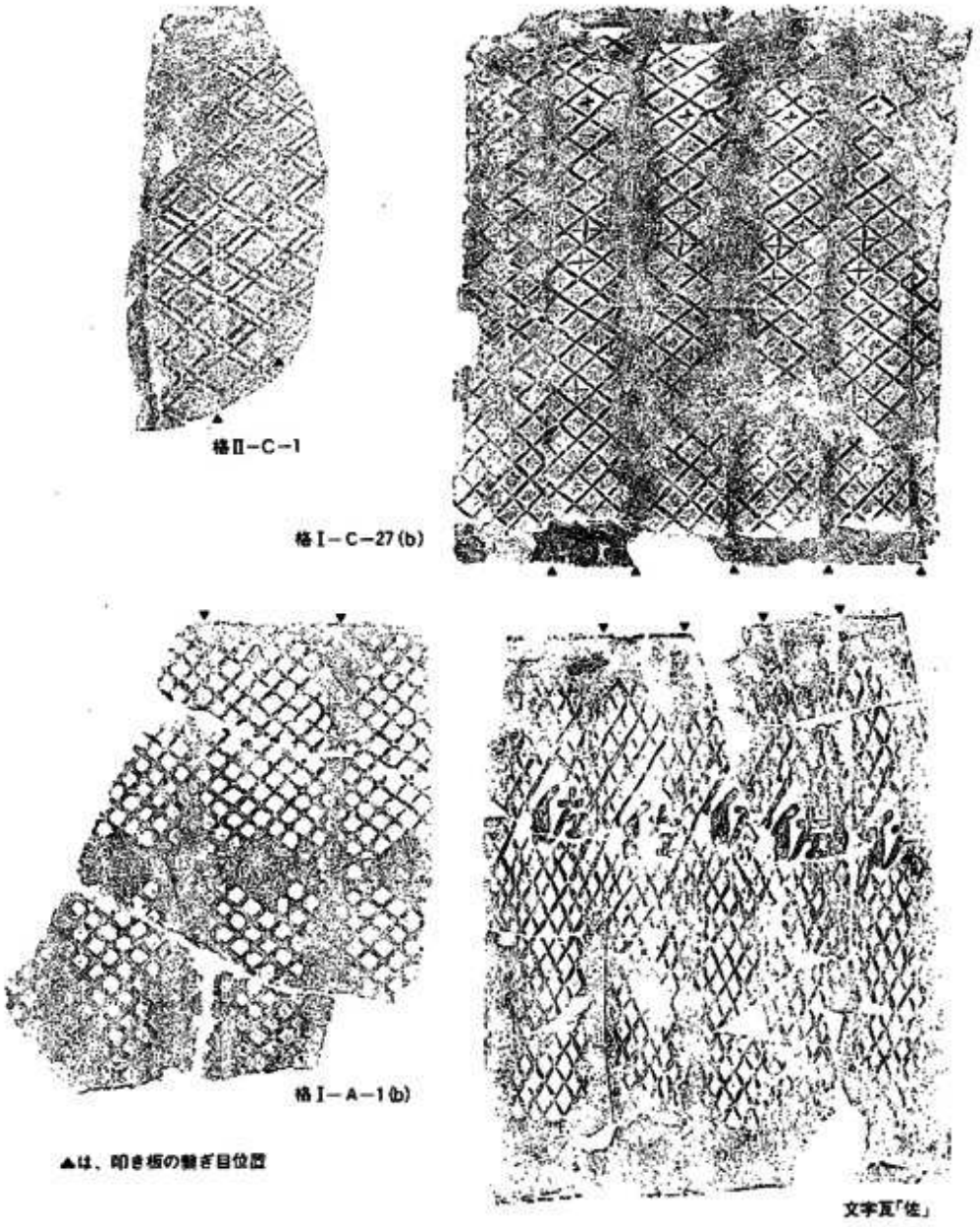
平瓦、丸瓦の格子目が詳細に報告されている例は少なく、また今回の資料も完存するものが少ないので比較検討は難しい。ただ、格Ⅰ-C-33(b)類は観世音寺での検出例のほかに、福岡市西郊の有田遺跡群で例があり、福岡平野の広範囲に分布していることが知られる。他の資料も今後詳細な整理がなされれば各地への分布状況が明らかになると思われるが、これまでの所見では他地域とあまり重複していないようである。特に大宰府エリア内での重複関係が明確には見いだせておらず、文字瓦がいくつかの地点で重複関係を押さえられるのと状況を異にしている。もちろんこれまであまり詳細に報告されていないことに起因する可能性が強いが、本市において整理している国分寺や条坊地区のものでも重複関係は少ない。年代差の問題を含めて、今後の詳細な整理がなされるのを待ちたい。



第45図　軒先瓦と叩き目の関係（1／4）

(3)整地層に帰属しない資料

叩き目文様の全体形状が明らかでないので確定的なことは言いにくいが、整地層に帰属しない資料には格子目中に小さな記号のような文様を配置したb又は(b)とした資料が多いことに気付く。b又は(b)とした資料は、格子目を複数潰して文様を表現したものと一つの格子目の中に小さく記号的な文様を入れるものとにわかれるが、整地層外出土のものは後者が主体を占めている。ひとつの目安にはなろう。



第46図　叩き目の配列状況（1／4）

(4)軒瓦との関係

第1次の報告に際して博多遺跡群や箱崎遺跡を例にとって軒平瓦の瓦当面下位を波状に作るもの（第1次報告の軒平瓦Ⅶ類）は、草花文をあしらう軒丸瓦（Ⅷ類）とセット関係にあることを推定したが、今回の整理で縄Ⅱとした瓦群は、軒先瓦に残された縄目の痕跡および成形方法、焼成などの点から、この軒先瓦に伴うものであると判断できるようになった。したがって、これら一連の瓦は12世紀中頃までに安楽寺の一部の堂舎に葺かれていたものといえる。具体的な製作年代はここのみの資料では知り得ないが、箱崎遺跡の例をみると11世紀後半までは遡れるものと思われる。

なお、これらの瓦の数量的分布をみると、平・丸とも大差無い数値が得られており、屋根の一部分を飾るものではなく、正当な本瓦葺きが実施されていたものとみられる。また、今次の調査における出土点数をみるとかなり安定した数量の部類にはいる。したがって、葺替えや差し替え程度ではなく一つの堂舎にまとまって葺かれていたものと考えたい。

これ以外の瓦では、第43図に示したものが両者の関係を窺える。

軒丸瓦　1・2はⅠ-1類で、格Ⅰ-C-9に近似した叩き目が観察される。しかし、残存部位で同一の箇所はなく別の種類の叩き目である可能性も残されている。いま一種のものも今回報告した分類には含まれていない。この状況から軒丸瓦専用の叩き目が存在していた可能性も考えられ、今後の検討次第では、工房内での分業体制の在り方を検討する材料にできるかもしれない。4はⅤ-2類とした剣頭文を配するもので、格Ⅱ-A-1類が確認される。5は巴文で、Ⅳ-1-a類としたものである。叩き目は今回の分類に属さないものである。3は巴文Ⅳ-1-c類で、丸瓦部分の叩き目と瓦当上部の叩き目が異なるものである。丸瓦の叩き目は格Ⅰ-A-3類であるが、瓦当部分のものは断片的にしか残存しないので分類は明らかにはできていない。ただし、叩く方向が丸瓦部分のものと90°異なっている可能性がある。これは明らかに作業工程の違いから起こることであり、支持土を置いたうえから細かく叩いたものと思われる。また、叩き文様の違いは作業内容によって分業されていたことを窺わせるものであり、丸瓦を作成したのちすぐその場で瓦当部分を接合したのではないことが理解できる。ただしこれだけでは丸瓦作成工人と軒先瓦作成工人が異なっているかどうかは不明である。資料の増加を待ちたい。なお、巴文に伴う叩き目は整地層中からは出土していない。

軒平瓦　6はⅠ-1類で、格Ⅱ-B-1類。7・8はⅠ-3類で、格Ⅰ-C-5′類と格Ⅰ-C-5類の可能性があるものとの2種類が知られる。9はⅠ-4類で、格Ⅱ-A-1類。10・11はⅠ-5類で、格Ⅰ-C-1類と格Ⅰ-C-10類の可能性があるものとの2種類が知られる。12は剣頭巴文を配するⅣ-3-b類で、格Ⅱ-A-2-b類が確認される。

以上の結果は、整地層出土とそうでない資料を逆転させる結果にはならず、両者が確認できた範囲でその出土状況の妥当性を追認できたことになる。

(5) 叩き目の意味するもの

これらの資料を整理していると、瓦凸面に現れた文様が瓦自体を叩きしめるという役割をどの程度果たしていたのか疑問になってきた。そこで思い付いたままにここで問題点を述べておくこととする。あくまでも問題点の提示であり、真偽のほどはこれからの詳細な整理にかかっていることは言うまでもない。

さて、それは丸瓦、平瓦ともに叩き目がきっちりと整頓され、整然と並べられている資料が存在することにある。例をみると、格I-A-1(b)や格II-C-1類のように隣り合う叩き目をうまく連結させ、あたかも一つの叩き板であるかのような仕上がりを呈する資料がある（第46図）。特に格I-A-1(b)類では中央に大きな四角文がきっちりと横並びになり叩き板の境目はほとんどわからない。また、格子目の重なる資料については、重ね目は擦り消されるものが多いものの、完全に消去されるものはなく、あたかも主要部分を故意に残しているかのようである。同じことは文字瓦の多くにも見受けられるものであり、これらの叩き目文様は多聞に装飾的意識が働いているかのようである。しかしながら丸瓦の場合凸面が使用時の表面になるから装飾と捉えても可能かもしれないが、平瓦の場合は凸面が使用時には裏面になるわけで、これに過度な装飾を施すと理解するのは困難であろう。

これは叩き板の原体の形状から起こってくる可能性が考えられる。つまりいづれの資料も叩き板原体は幅3～4cm、長さ30cm以下で瓦の大きさよりも若干小さめである。そして叩き板の両端が明瞭に観察できるという特徴を有している。これは土器などの叩き板のように羽子板状を呈しているのではなく、一枚の長方形の細長い板である可能性を示唆するものである。したがってこれ自体が叩くために用いられるものではなく、瓦に文様が彫られた板を押し当て、その上から別の打具を用いて叩いていることが窺え、スタンプ的な効果を狙っているかのようである。こうした作業は効率の点でかなり悪い要素となり得ると思われるが、実際に多くの資料でこうした痕跡が見い出される。丁寧なものは先述のとおり繋ぎ目部分がわからないほど丁寧に重ねており、このようにする理由が問題となってこよう。奈良時代などにみられた縄目叩きの痕跡と大きく異なることは、叩き目が持つ性格も変化したのではないかと想像される。

なお、これらの資料の大半が桶巻で作られており、叩き目が施される段階は、判明するものが少ないながら桶から分割する以前である。この点では一般の叩き板の解釈と変わらない。

このように叩き方から見る限り、文字瓦も一般的な格子目瓦もその持つ要素は同じものではないかと想定される。そこでこれまである程度の検討がなされている文字瓦の意味を考えてみることとしたい。過去に大宰府の文字瓦について語ったのは、藤井功である。藤井は「平井屋瓦」「佐瓦」「賀茂瓦」といった類のものを工人あるいは工房を示したものとし、「安楽寺」「四王」あるいは「観世音寺」と記載されたものは納品された場所を、「筑」「前」などは国の名称が記載されていると考えている。同様の立場は後に文字瓦を分類整理した石松好雄、高橋章に

よって受け継がれている。しかしながら、似通った状況を呈する文字瓦の内容が、3つと雖も異なった背景が説明されることはやや疑問なところである。

瓦に文字を記載するものには、これ以外に刻印がある。この研究は森郁夫、上原真人らによってなされているところで、森の意見を借りれば、生産者の立場ではなくそれを発注する側の立場で考えるべきであることが述べられている。

また、納品場所を記載する例は、中世末から近世に多いようで、特に寺院名を記載するものは重源の東大寺再興事業の折に作られたものをはじめとして、後の興福寺、春日御塔、薬師寺の軒先瓦などへ急速に波及していったとみられている。福岡県下の最近の報告では博多遺跡出土の「櫛田宮」銘の軒丸瓦が戦国時代以降ではないかと推定され、安楽寺跡でも「参重御塔」と記載されるものは整地層から出土せず、その内容などから13世紀前半のものと推定できるなど、鎌倉時代以降あまり古くは遡らないようである。また、納品場所を記載する部位は瓦当面に多くみられるところであり、叩き目に記載する実例は東大寺再興の平瓦にみられる刻印が知られている程度ではなかろうか。この点からも先の「安楽寺」「観世音寺」を納品場所と捉えるのはやや疑問であるといえよう。天満宮第3次調査地点から「観世音寺」の文字瓦が出土していることも参考の一つになろう。さらに、納品場所が一部の寺の名称しか見られないのも問題ではなかろうか。文字瓦の生産された時期、つまり10世紀から12世紀は安楽寺、観世音寺以外に未だ筑前国分寺も何らかのかたちで存在していたであろうし、大宰府自体も存在している。特に大宰府は10世紀中頃の反乱で消失し、その直後に再建されていることが知られているわけであるから、その事業に際して大量の瓦が供給されたはずである。このことを思えば「大宰府」「国分寺」などと記載した資料が見つかってもおかしくないのではなかろうか。

ところで、大宰府政庁では「佐」「平井」などの工房を示すとされる文字瓦にまじって「安楽之寺」の文字瓦が多く見つかっている。この瓦は文字部分をあたかも縦線で消したようになっていることから、大宰府使用に際して故意に消去したものと考えられている。しかし同一の文字瓦は安楽寺でも若干出土しており、これ以外にも格子目に縦線を加える例(格I-C-5と5′)もあり、はたして故意に消去したと考えるだけでよいものか疑問を抱かせる。

筆者は、「観世音寺」「安楽寺」ともに工房の名称ではないかと想定している。同じ文字内容でありながら一種類ではなく、枠取りの形状や配置などでいくつかに分類されることを思うと、安楽寺や観世音寺に付随した複数の工房が制作したか、寺院付属工房の工人が複数存在したことを意味していると考えられる。寺院付属の瓦工房が時代とともに変転し、その性格を変えていくことは山崎信二の研究で明らかなところであり、大宰府で平安時代に勢力を保有していた両寺院に付属する工房があってもおかしくはなかろう。

さて、このことから推して、叩き目自体が工人あるいは工房を表している可能性が考えられる。したがって、何らかの工具（同じ叩き板かもしれない）で瓦面を調整したのちに、スタン

プを押すように叩き目を順序よく丁寧に捺していった可能性が推定される。擦り消されず故意に文様を残しているのは、生産、納品にあたっての発注者側のチェック機能に対応するためではなかったろうか。中世に至りこのようなチェック機能が消滅し、発注者、生産者の立場が変化した新たな生産体制に至って、叩き目の機能は不必要となり、これがかえってノイズになったのであろうか、ほとんどの資料で叩き目が確認できない事実は見逃せない。

このように平安時代の叩き目は、瓦工人や工房のあり方を考えてゆく点で問題となるのではないかと考え、疑問点、問題点の一部を提案した。先に記したとおり他地点での出土状況も気にかかるところであり、これからの調査による資料増加に期待する部分も大きいが、既出土資料の詳細な見直しも必要になってきたのではなかろうか。今後の詳細な整理が待たれるところである。

(参考文献)

藤井功、亀井明徳『西都大宰府』1977　日本放送出版協会

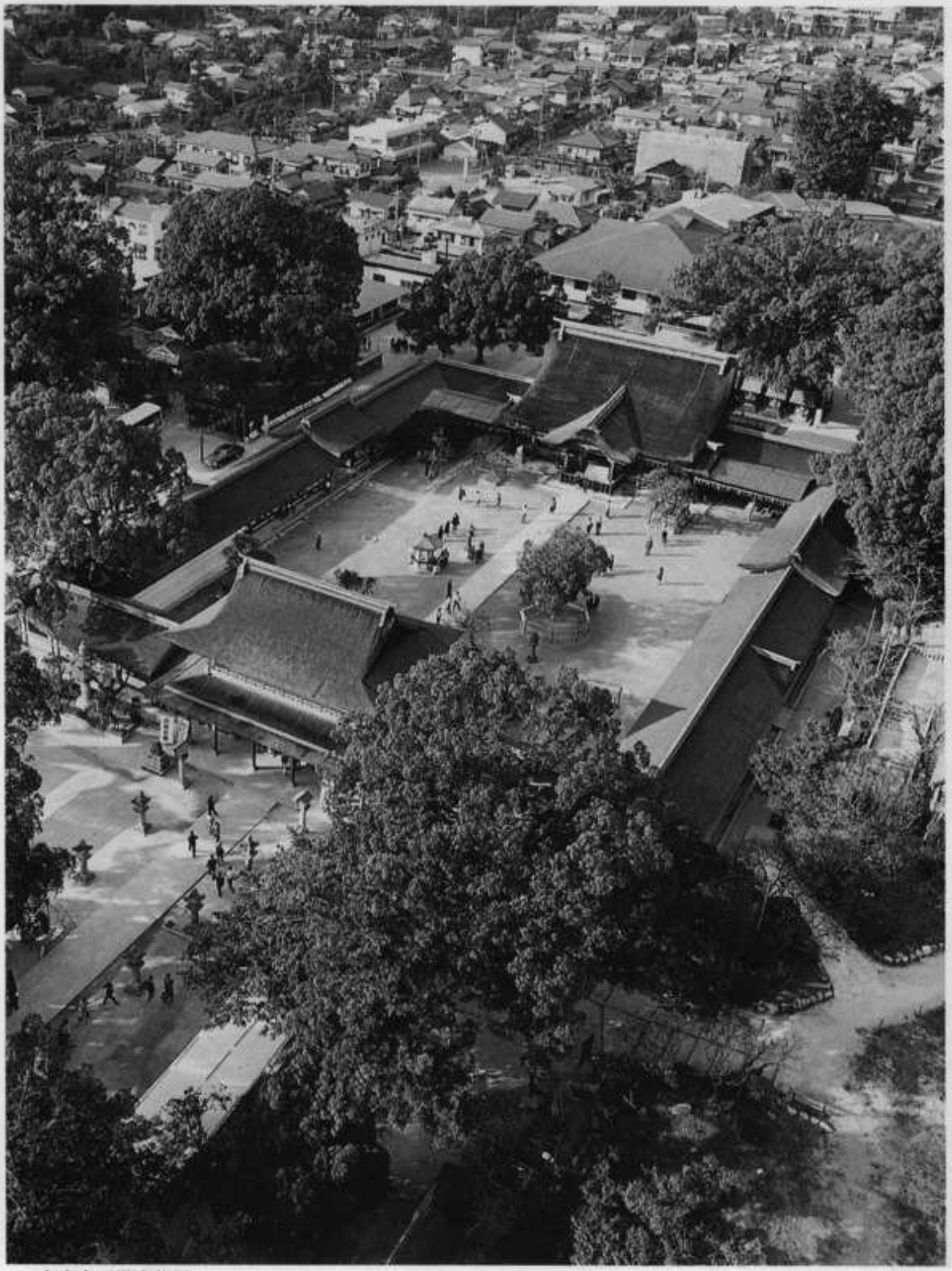
石松好雄、高橋章「大宰府出土の瓦について（二）」『研究論集4』1978　九州歴史資料館

森郁夫「平城宮の文字瓦」『研究論集Ⅳ』1980　奈良国立文化財研究所

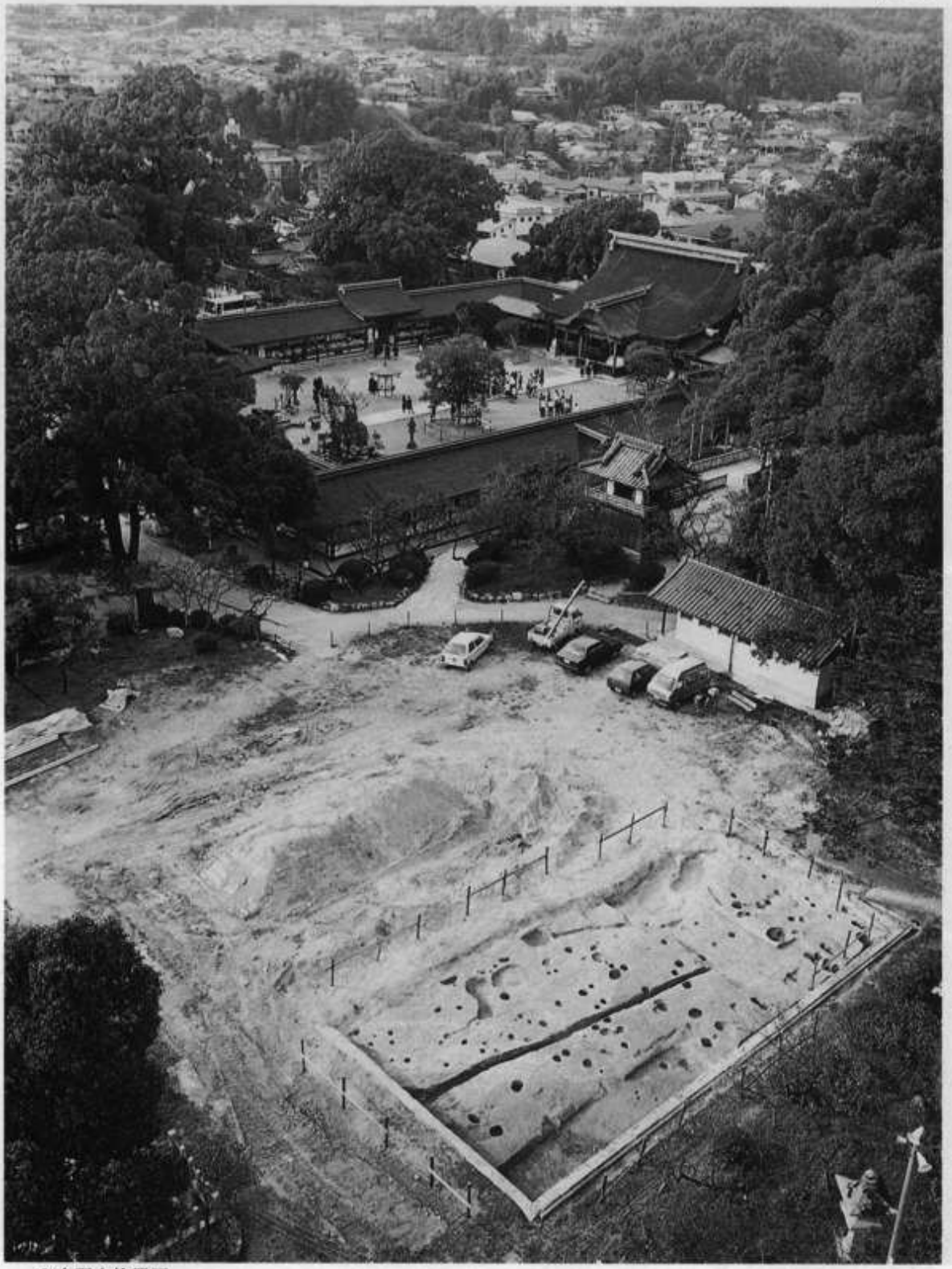
上原真人「天平12、13年の瓦工房」『研究論集Ⅶ』1985　奈良国立文化財研究所

山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集Ⅳ』1980　奈良国立文化財研究所

ほか

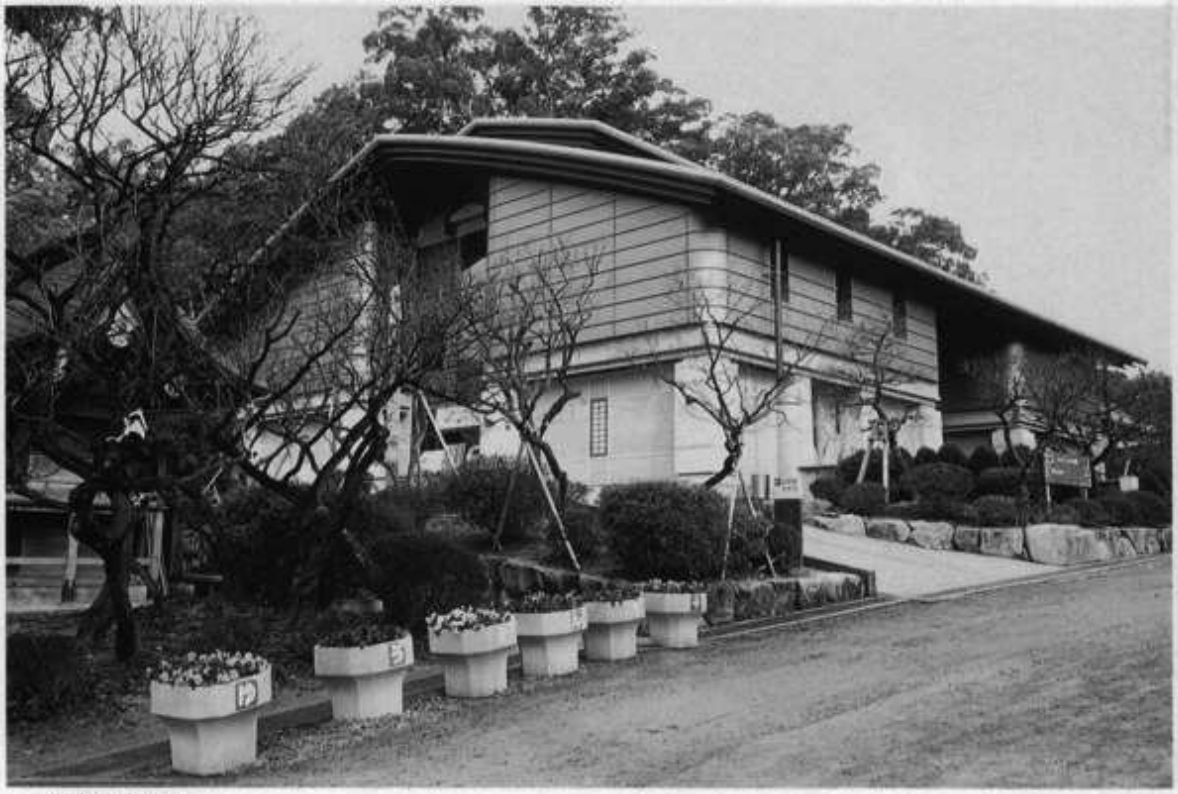


太宰府天満宮俯瞰

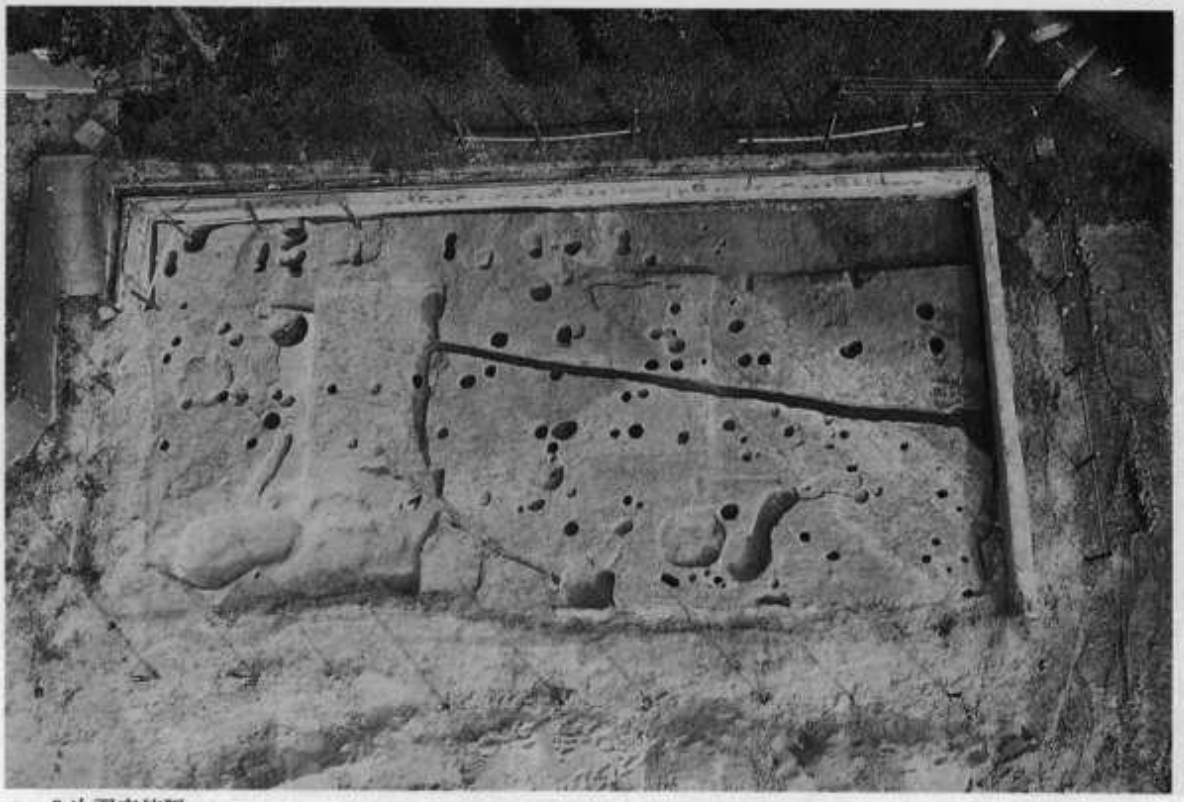


3次調査位置図

旧宝物殿（1928年建築）正面（「図録太宰府天満宮」1976年より）



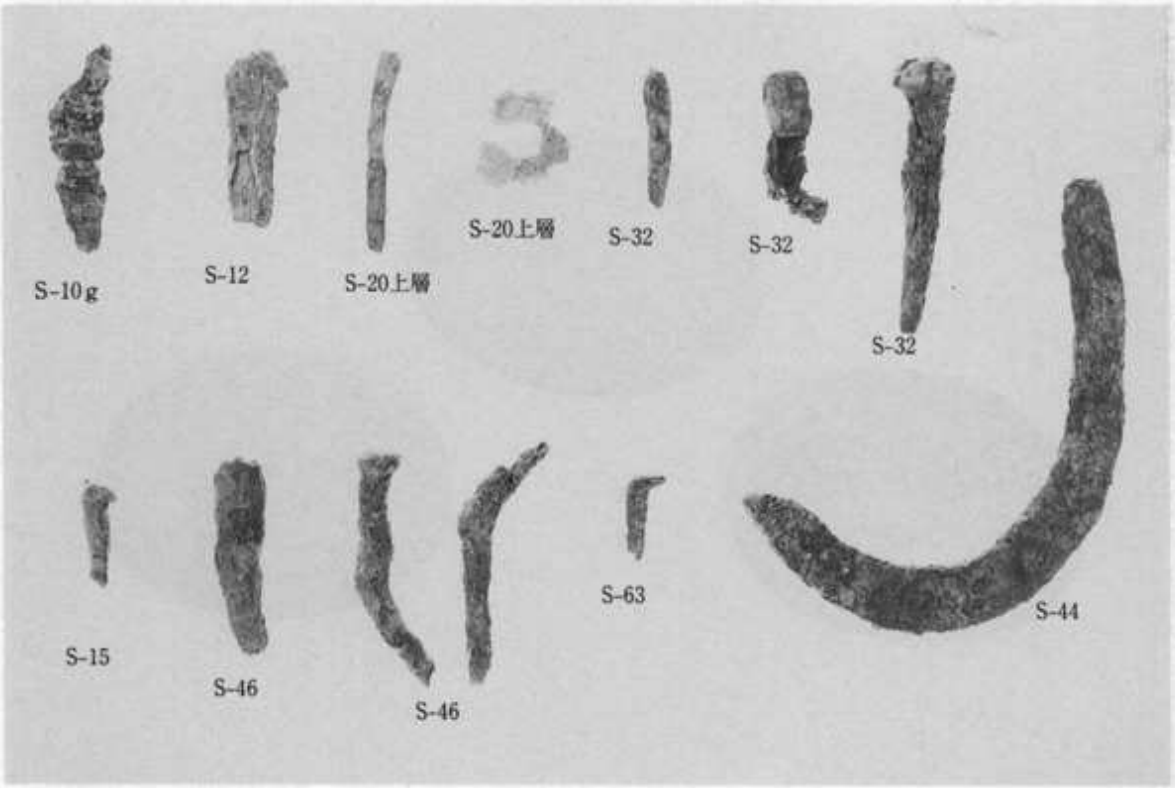
現在の宝物殿



3次調査俯瞰

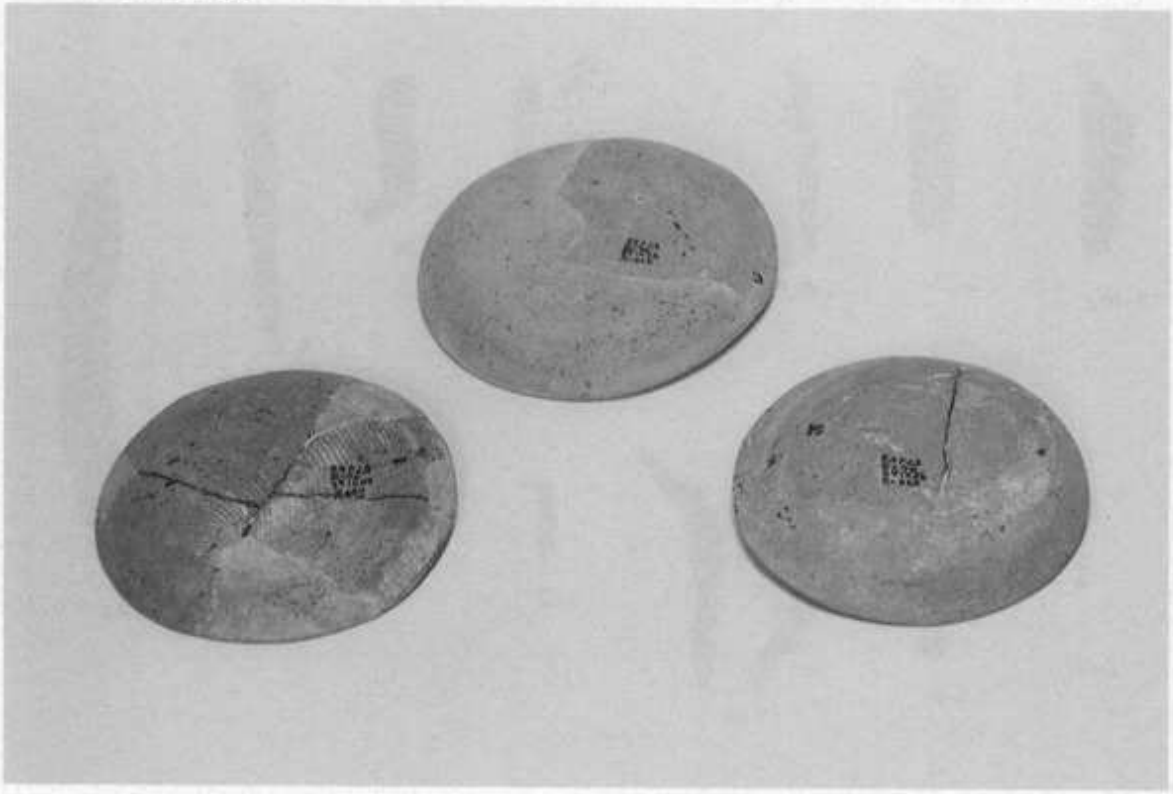
3次調査全体（北より）

天3 SK005出土遺物



天3各遺構出土金属製品

天3SK070出土遺物



天3SX035出土遺物

天3カクラン出土遺物

同左裏面

▶ 天4調査区東側

◀ 天4調査区中央部

▶ 天4調査区中央

◀ 天4調査区中央～西側

◀ 天4中央より西側

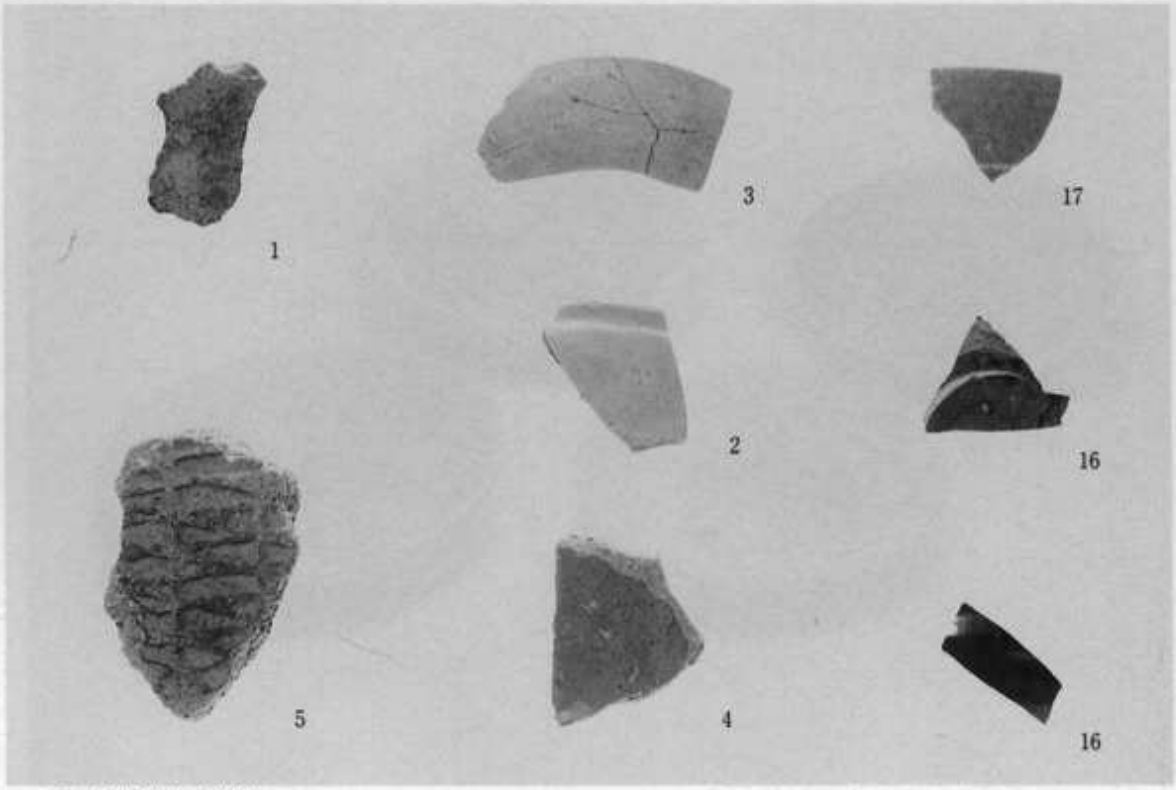
▶ 天4西側～中央

◀ 天4西側

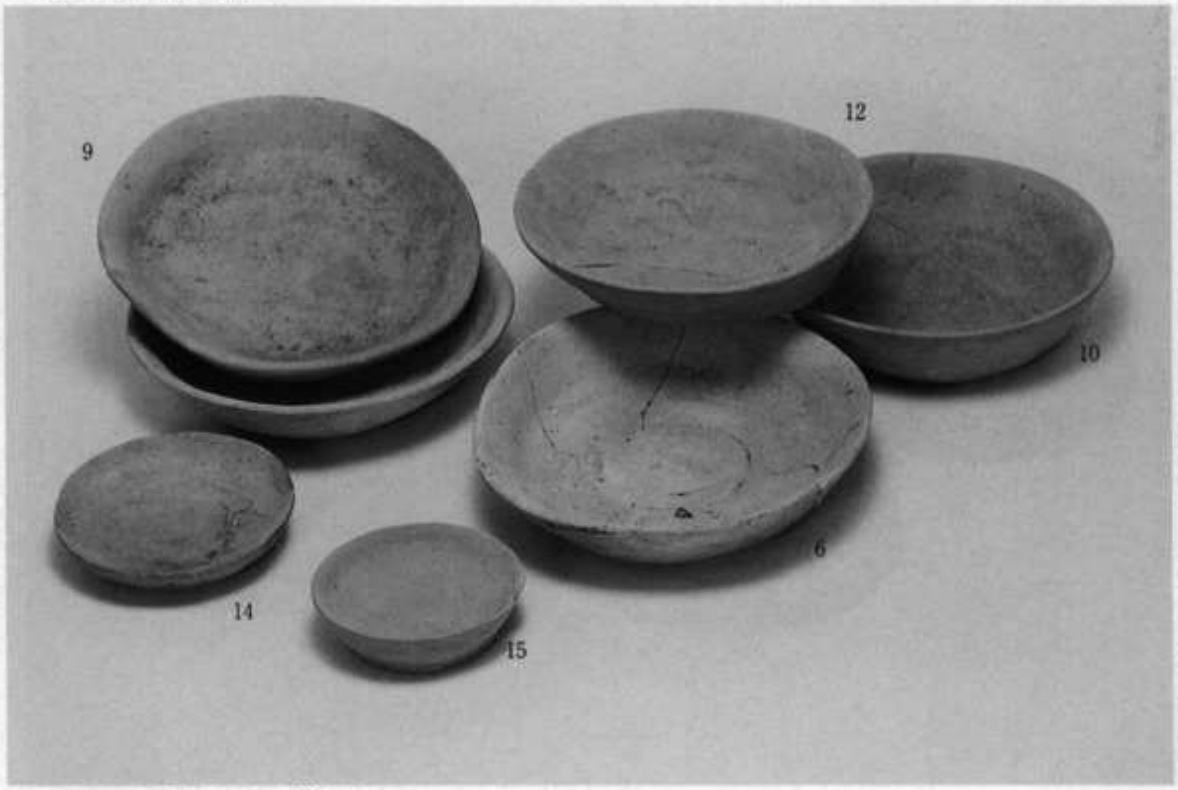
▶ 天4中央～西側

天4中央付近

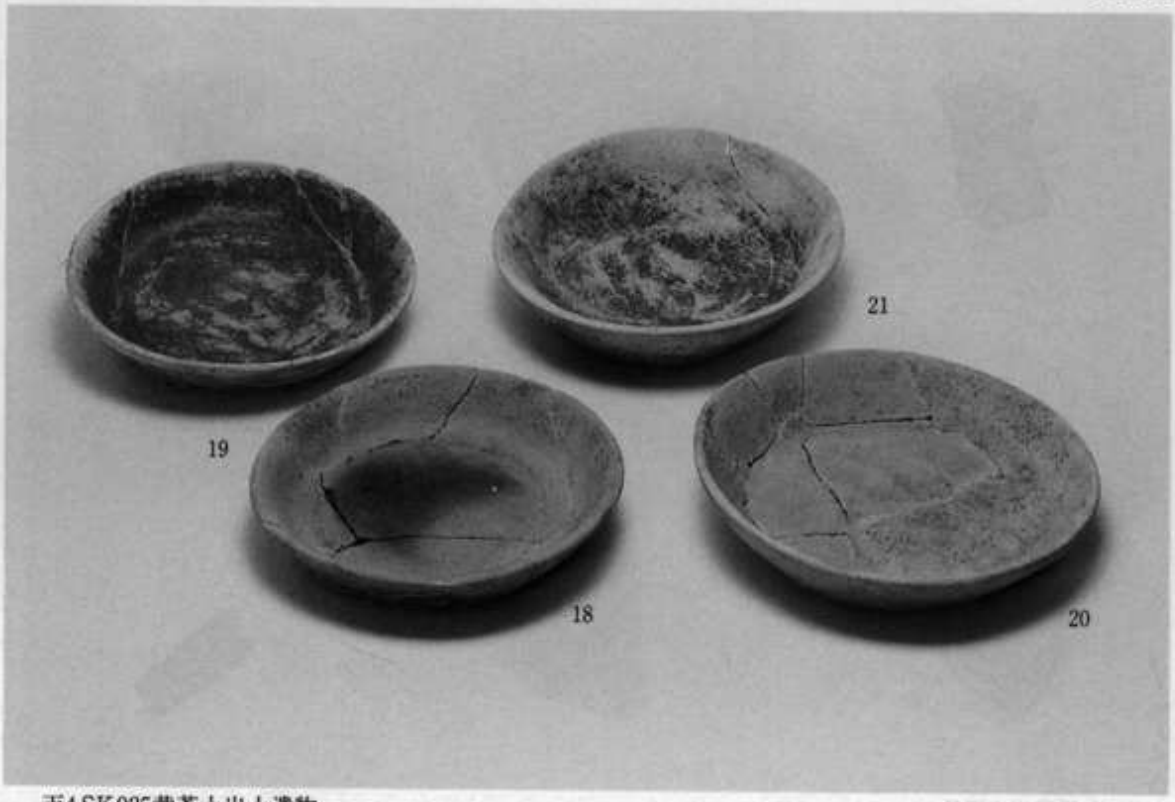
天4西側



天4 各遺構出土遺物

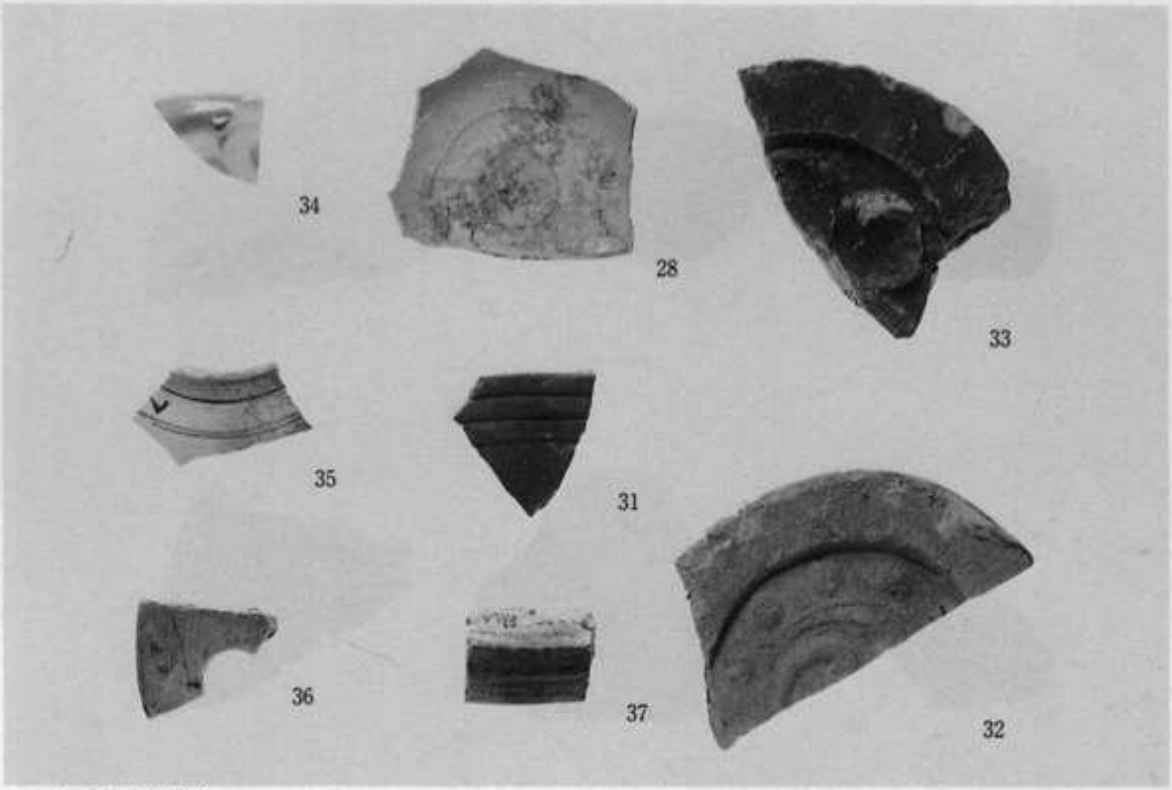


天4 SK025黒色土出土遺物

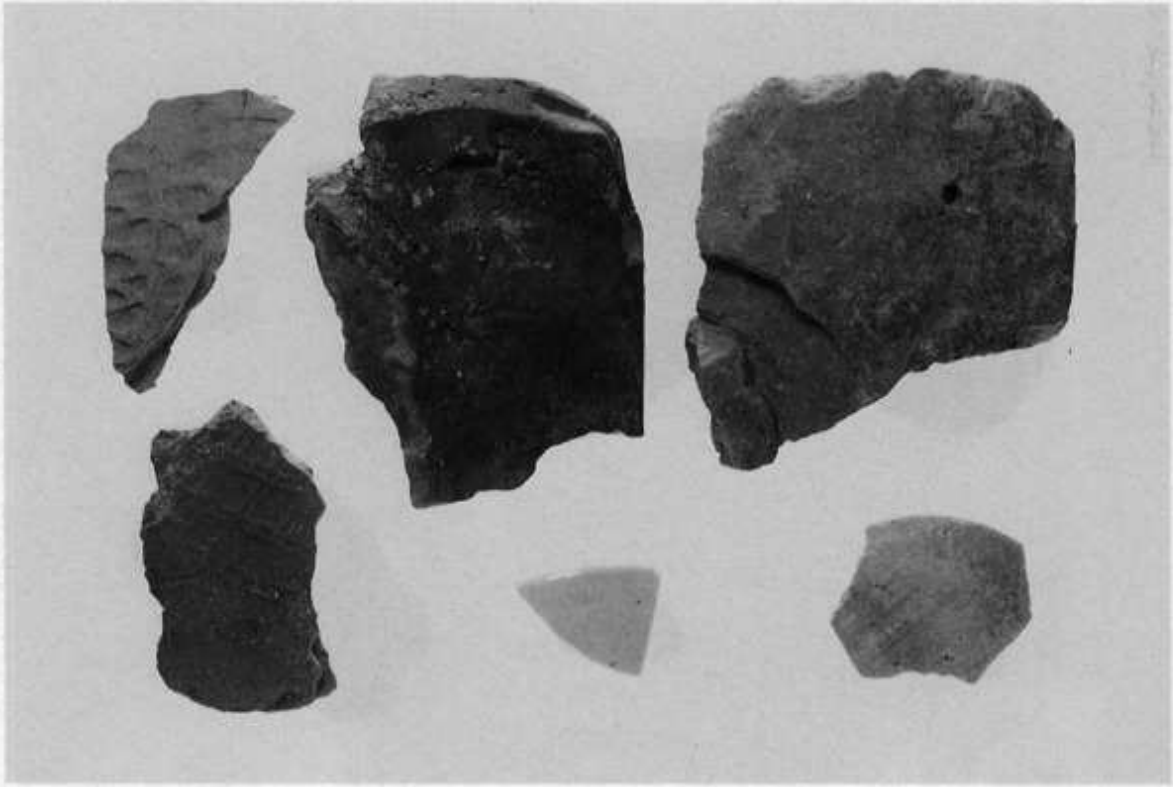


天4 SK025黄茶土出土遺物

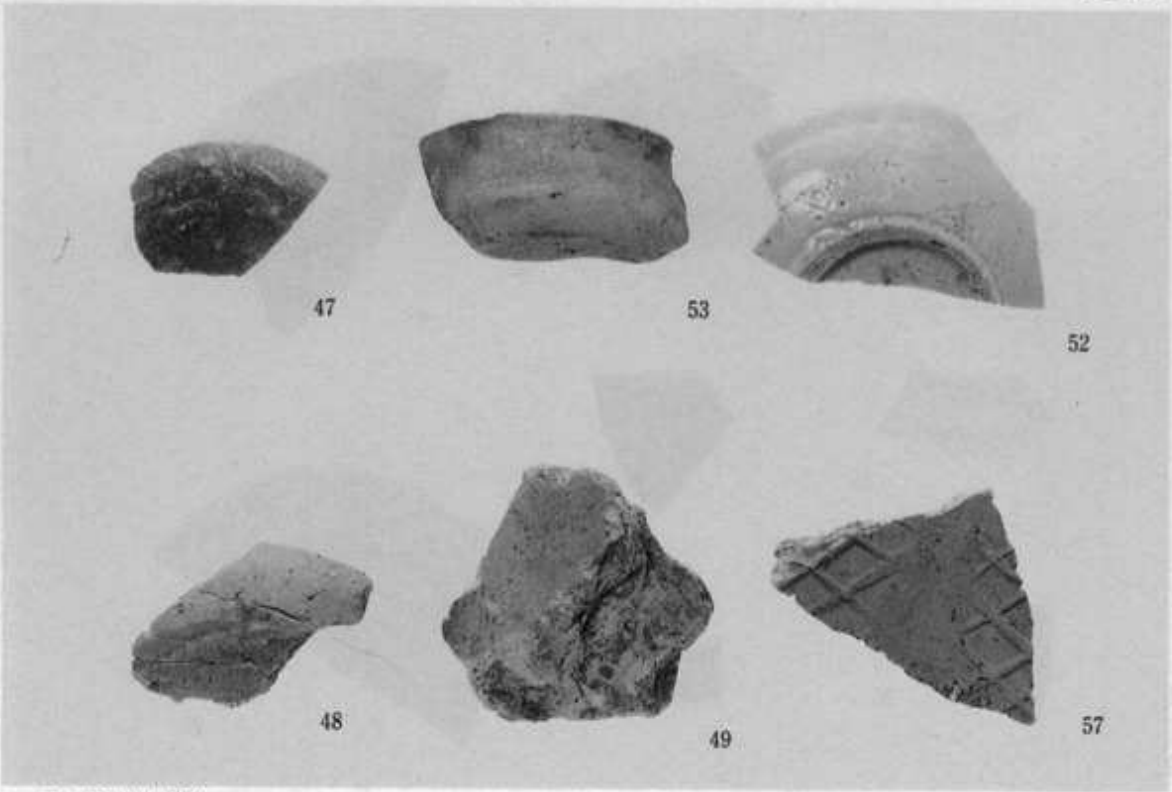
同裏面



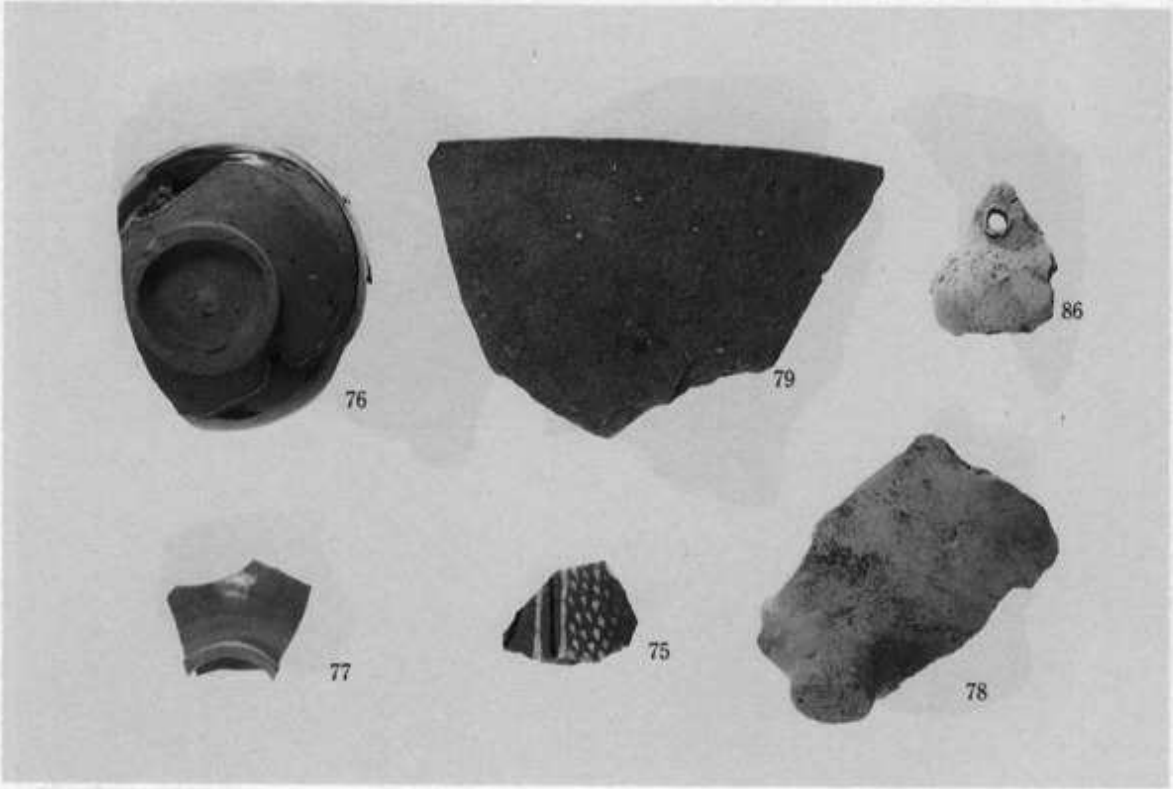
天4 SX 出土遺物



天4 SX 出土遺物



天4 SX 出土遺物



天4 SX 出土遺物

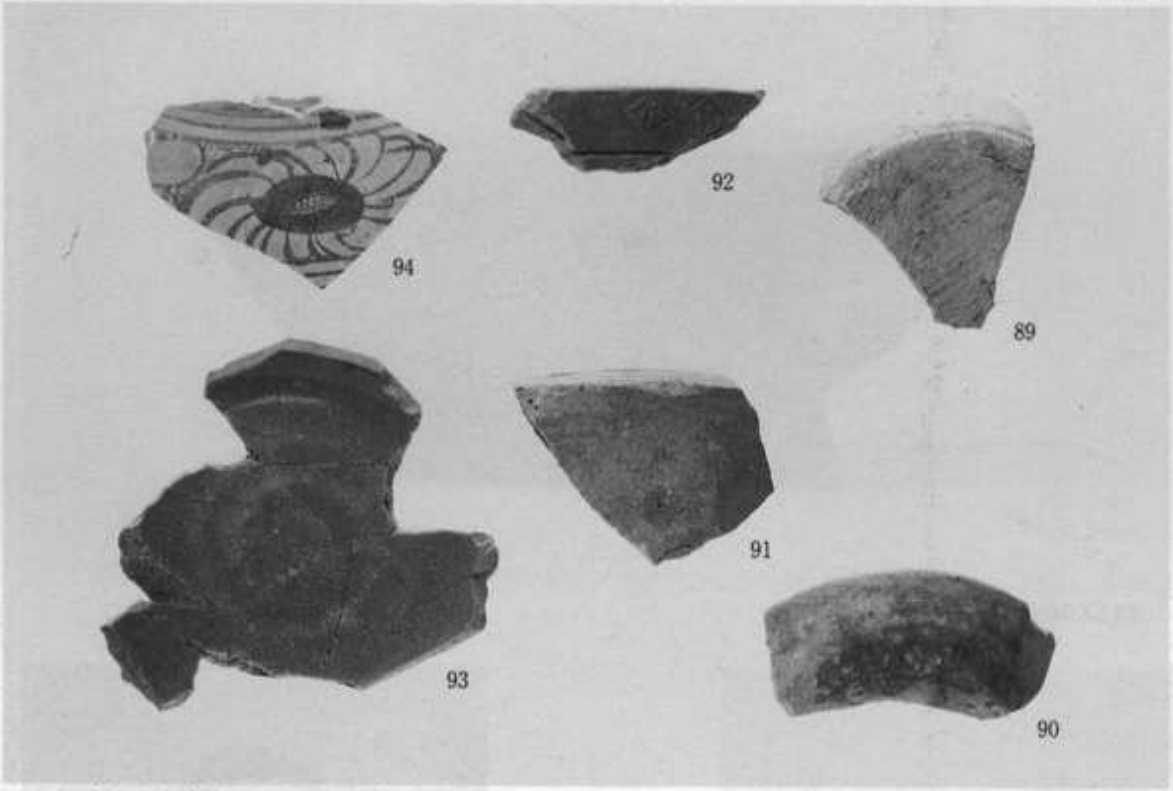
天4 SX049出土遺物

天4 表土出土遺物

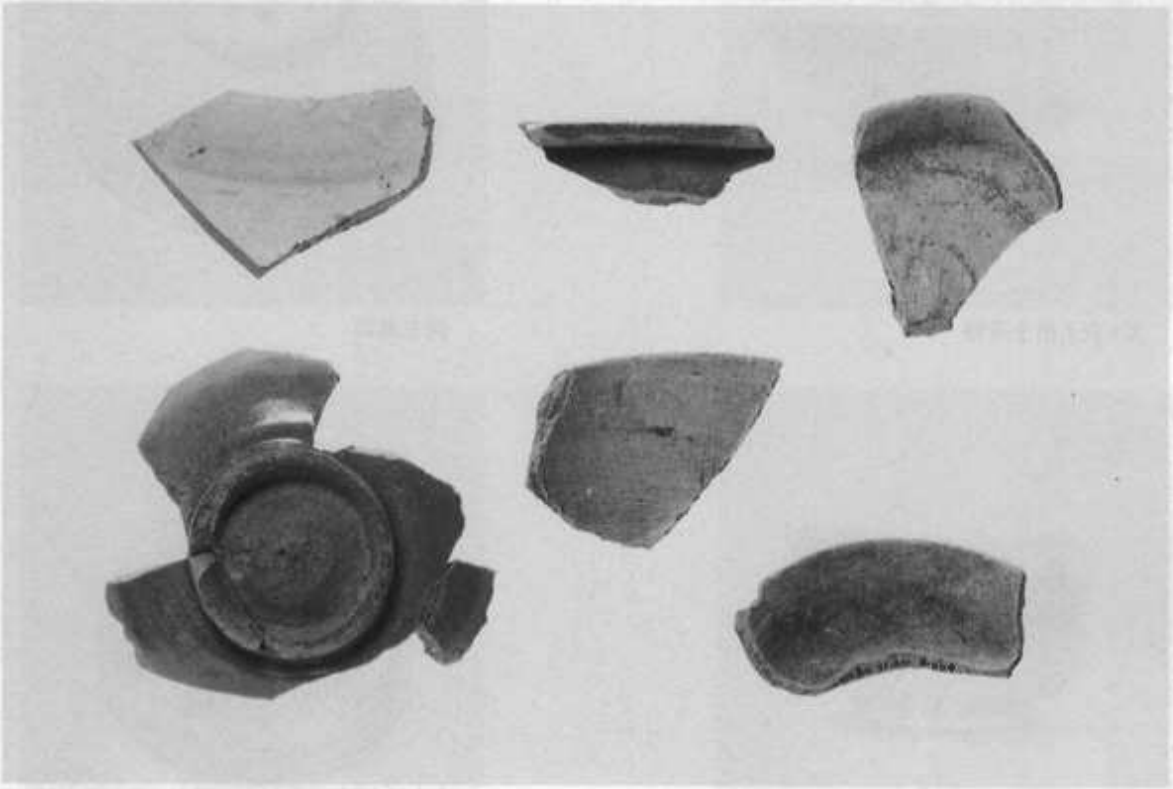
同左裏面

天4 表土出土遺物

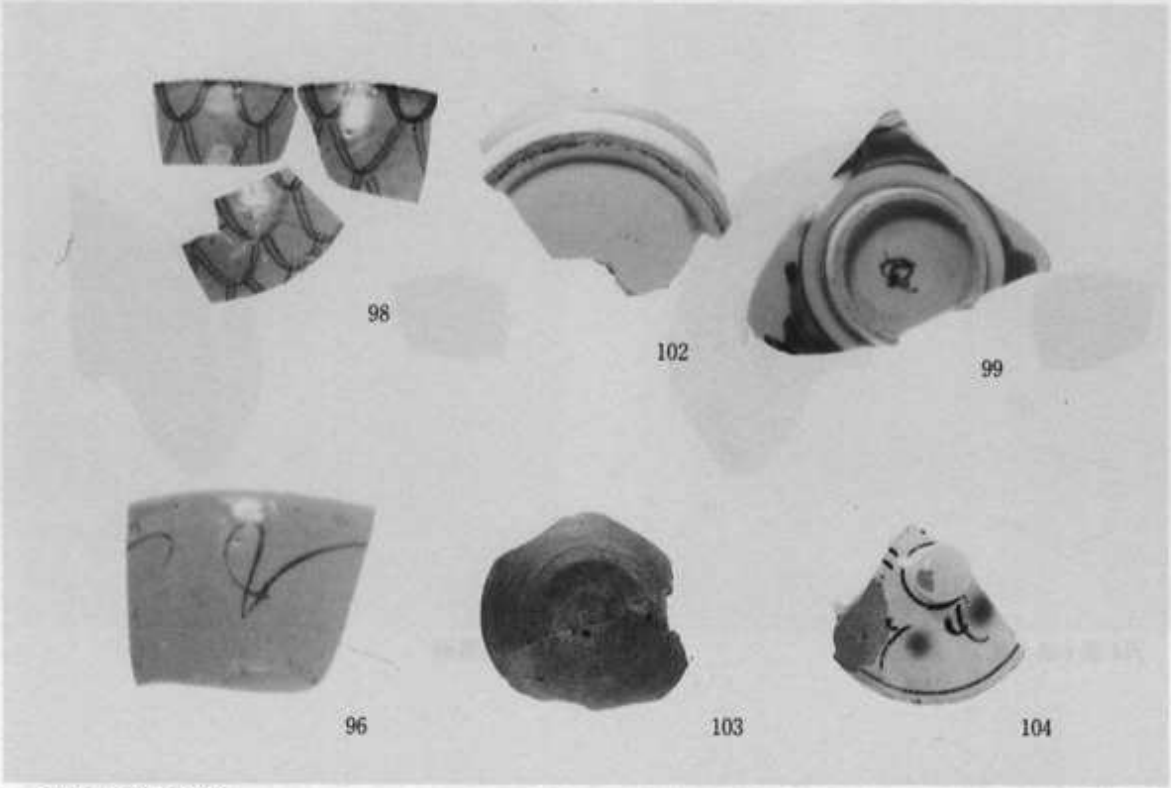
同左裏面



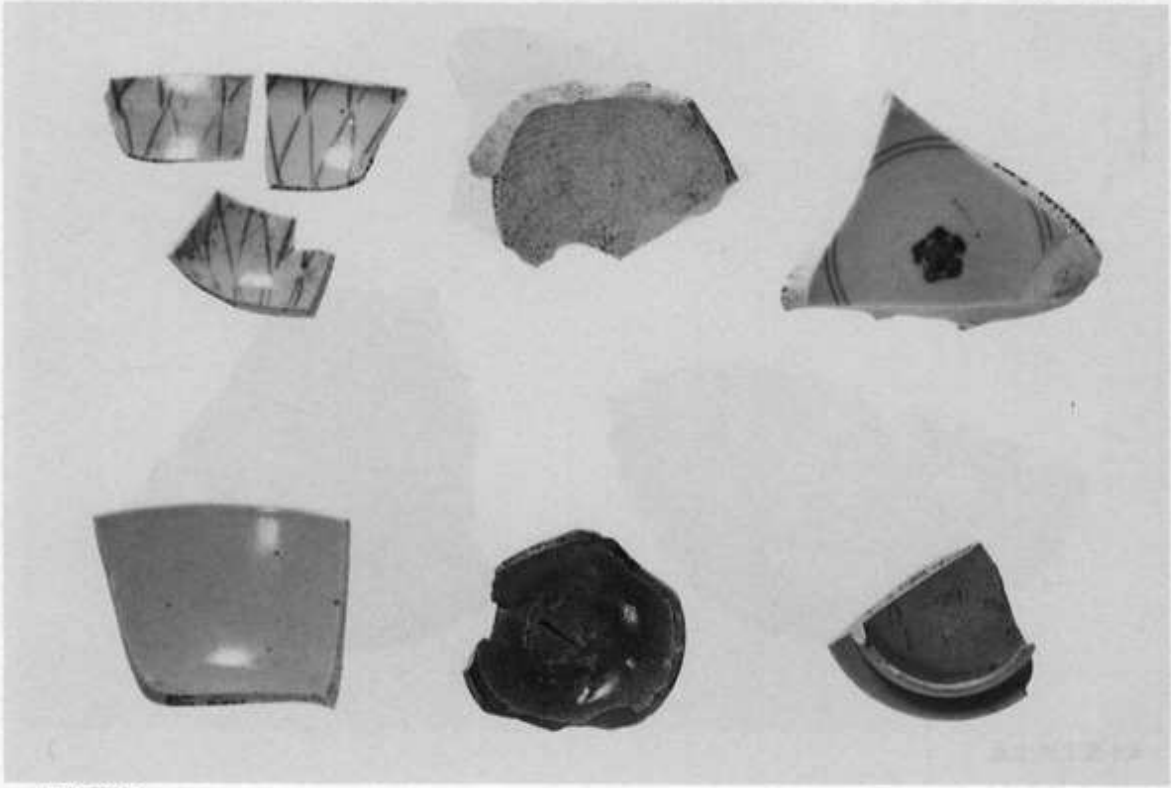
天4 表土出土遺物



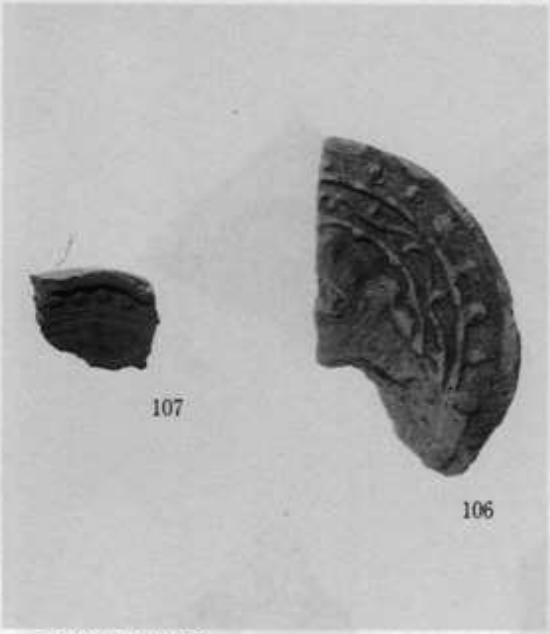
同上裏面



天4 表土出土遺物

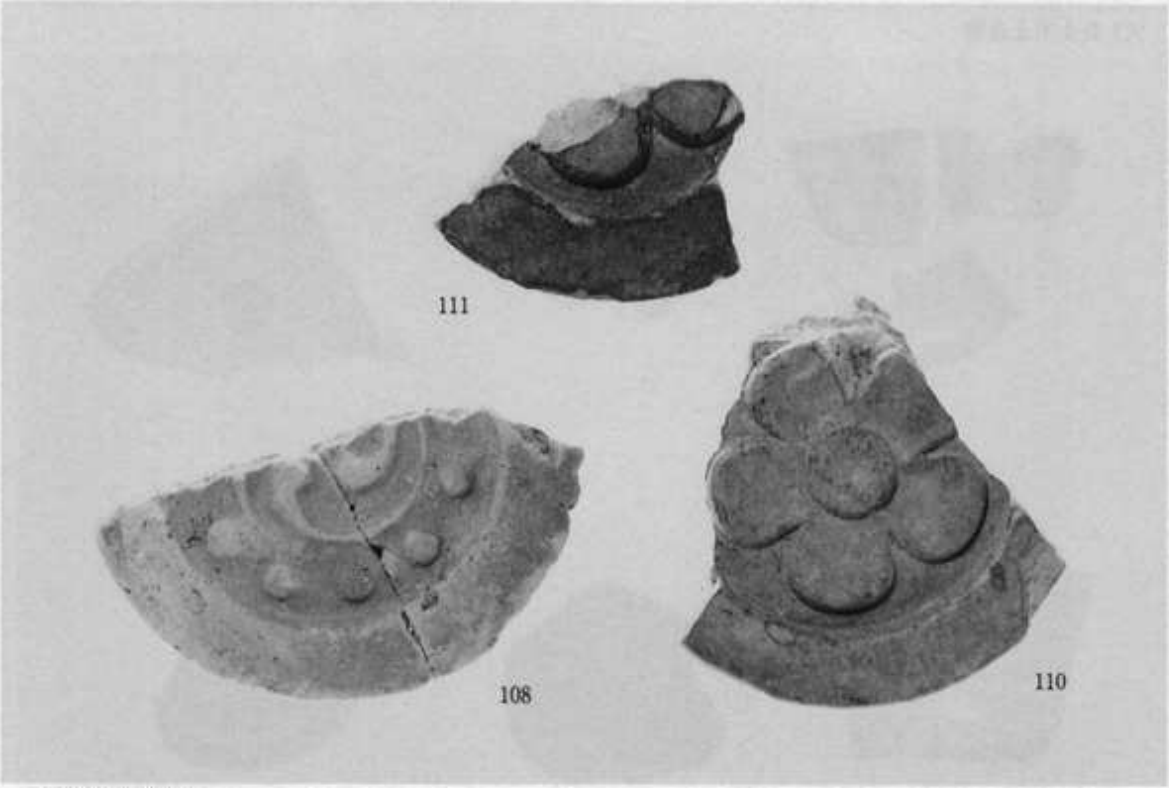


同上裏面



天4 表土出土瓦

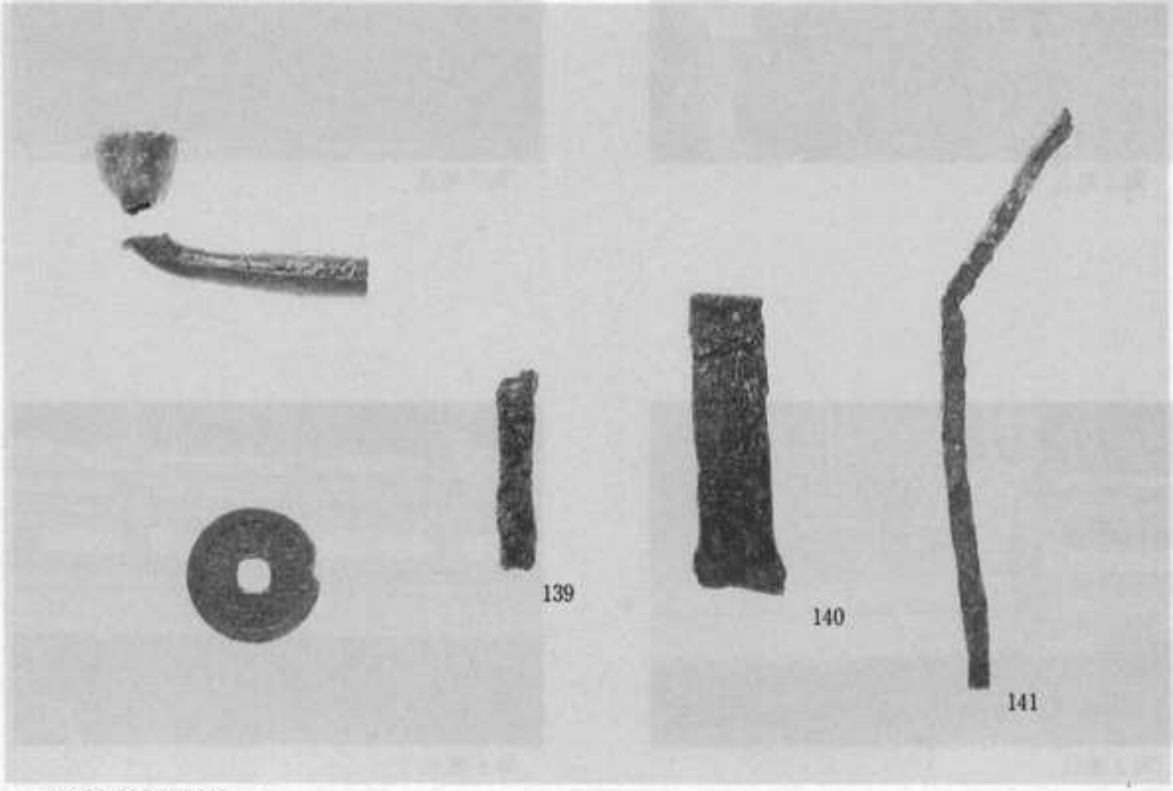
同左裏面



天4 表土出土瓦

天4 SK025出土遺物

同左裏面



天4 出土金属製品

立会調査No. 1 地点

No. 4 地点

No. 2 地点

No. 5 地点

No. 3 地点

No. 6 地点

No. 7 地点

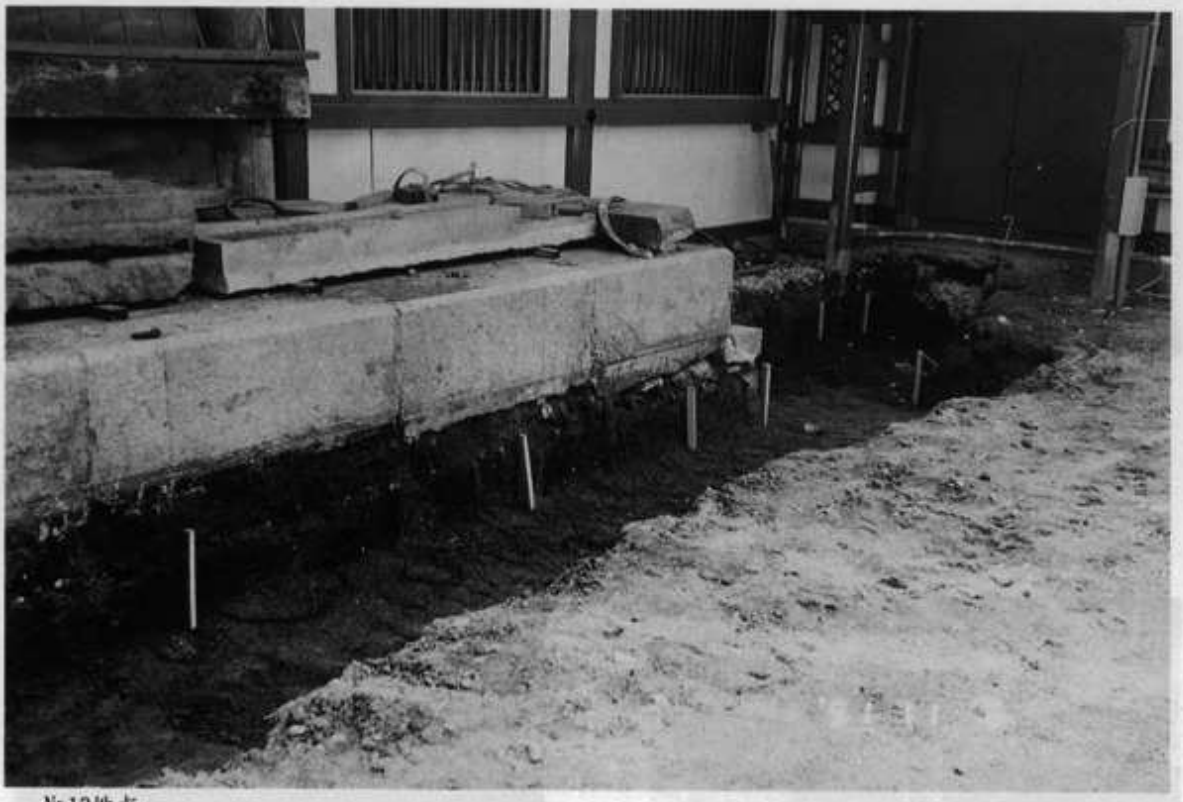
No.10地点

No. 8 地点

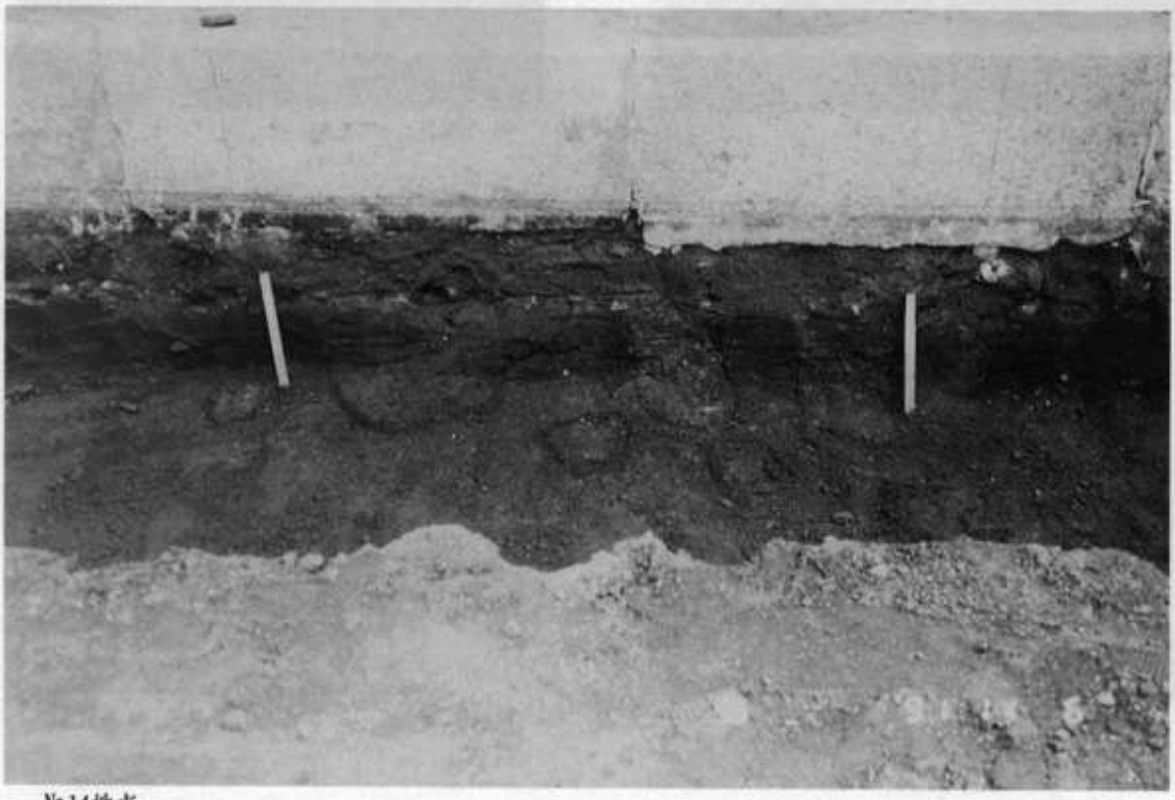
No.11地点

No. 9 地点

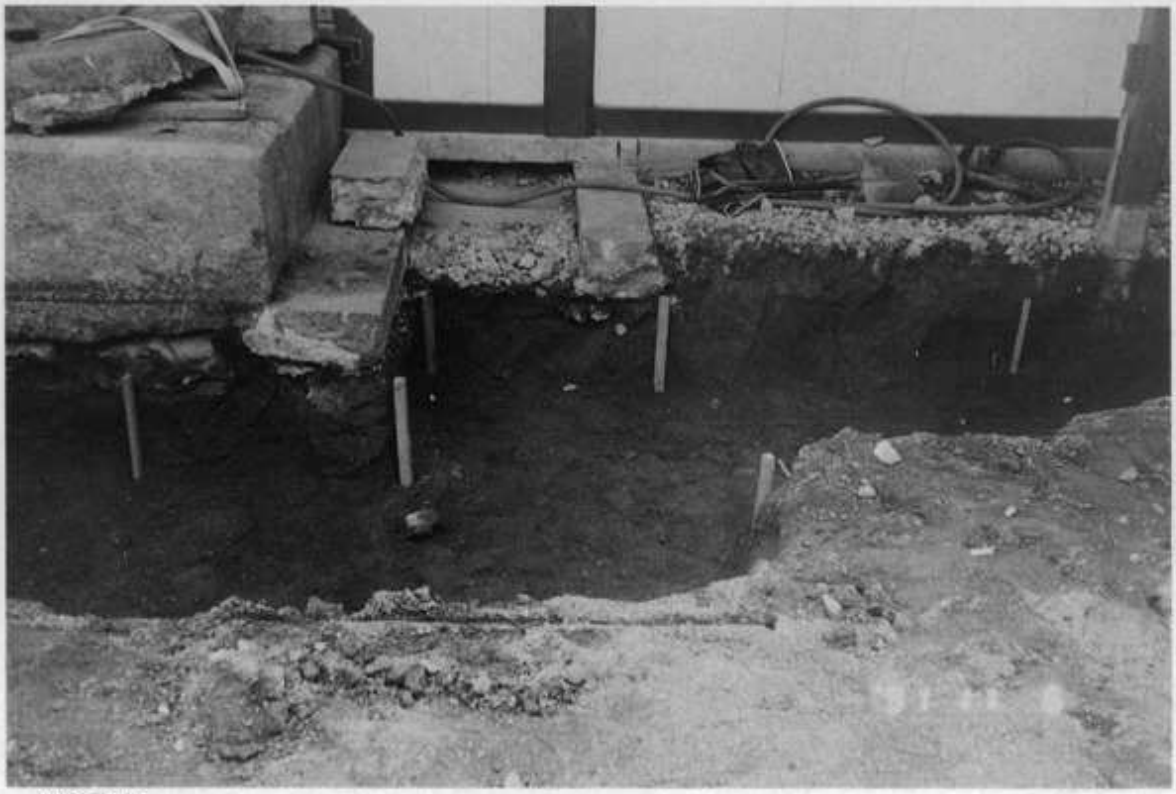
No.12地点



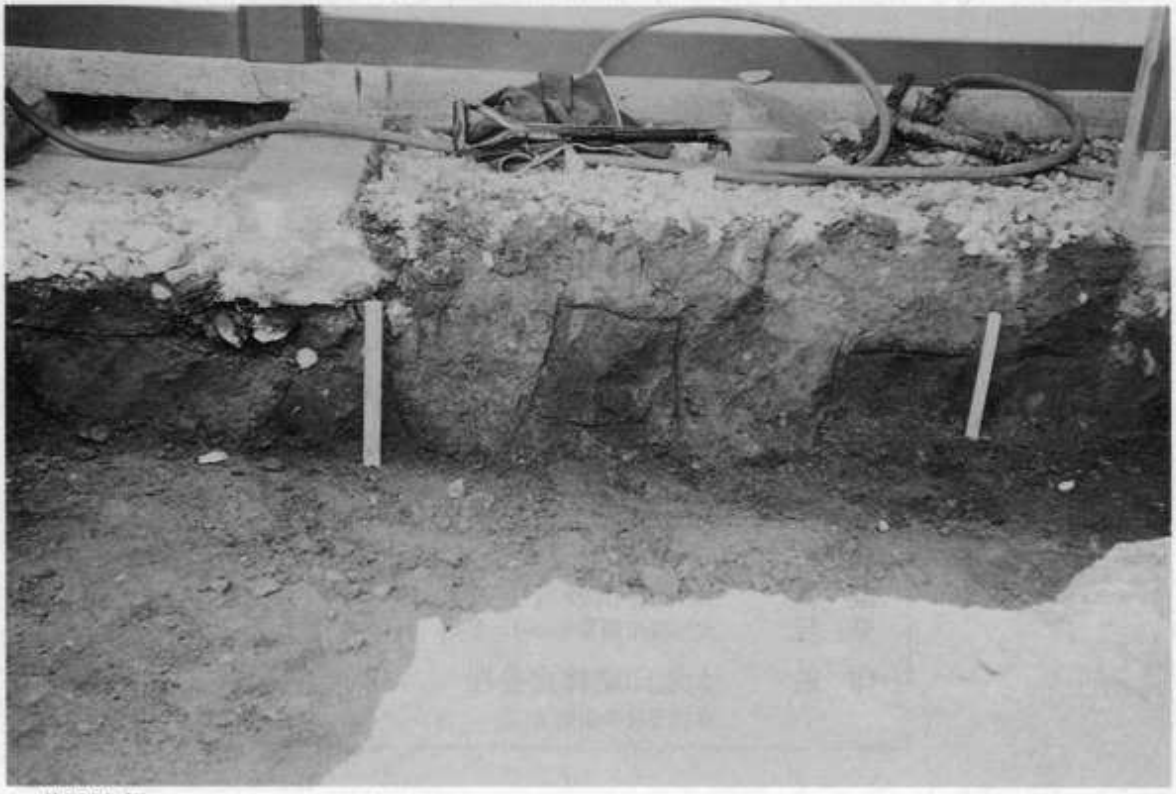
No.13地点



No.14地点



No.15地点



No.16地点

太宰府市の文化財 第26集
太宰府天満宮Ⅲ
── 第3・4次調査 ──
平成7年3月
編　集　太宰府市教育委員会
発　行　太宰府市観世音寺1-1-1
印　刷　大道印刷株式会社
春日市日の出町6-23